

之を獲たり。吾れ朝に此君（曹操）に侍し、夕に我家に歸り、外は朝政に參與し、又わが家事を廢せず。われ他人の犠牲となるを憚り、人に用ひられざらんことを願ふも、曹公の徳に浴する事實は恰も黍苗の陰雨に浴するが如し。是を以て伊尹の湯王を扶けしに倣はんと欲し、沮溺の退耕に倣はざるなり。かの孔子の詩に「我が舊居に復り、吾が好む所に從はん」といふが如きは、吾が意にあらざるなり。

涼風秋節に厲く、(二六) 司典詳刑を告ぐ。(二七) 我が君時に順つて發し、(二八) 桓桓として東南に征く。舟を汎べて長川を蓋ひ、卒を陳ねて、(二九) 隰垌を被ふ。征夫親戚を懷ふ。誰か能く戀情なからん。衿を拊ちて舟檣に倚り、(三〇) 眷眷として鄴城を思ふ。彼の

東山の人を哀み、喟然として、(三一) 鶴鳴を感ず。

日月安處せず、人誰か恆に寧きを獲ん。昔人(三二) 公旦に從ひ、一たび徂きて輒ち(三三) 三齡。今我が

神武の師、暫く往きて必ず速に平がん。余が(三四) 親睦の恩を棄て、力を輸して忠貞を竭す。懼

らくは一夫の用、我が(三五) 素餐の誠に報ゆるな

らざるなり。

【二六】 司典。主司なり。禮記に「孟秋の月涼風至る、用つて始めて戮を行ふ、天子乃ち將帥に命じ、士を選び兵を厲くし、以て不義を征す」とあり。

【二七】 我が君。曹操を指す。時は秋なり。

【二八】 桓桓。武勇の貌。建安二十一年、曹操吳の孫權を征す。

【二九】 隰垌。郊野なり。

【三〇】 眷眷。顧戀の貌。

【三一】 東山。詩經の篇名。征戰を詠ぜし詩なり。

【三二】 鶴鳴。東山の詩に「我れ東山に徂き、洒洒として歸らず、我れ東より來れば、零雨其れ濛たり、鶴垌に鳴き、婦室に歎く」とあり。

【三三】 公旦。周公旦なり。周公東征三年にして歸る。

【三四】 親睦。親戚なり。

【三五】 素餐。無能にして祿を食むこと。

からんことを。夙夜自ら(三六) 併性し、逝かんことを思ひて縈を抽くが若し。將に先登の(三七) 羽を乗らんとす。豈敢て(三八) 金聲を聽かんや。

【大意】 今や秋風嚴厲にして、主司刑戮を告ぐるの時となり、我が君（曹操）また此時に乗じて孫權を征し、師旅を陳ねて山川を壓す。吾れ亦遠征に從つて行く。何ぞ親戚を懷ひ、戀情を起さざらんや。乃ち胸を撫して舟に倚り、鄴城を顧戀し、周公東征の士卒を憶ひ、鶴鳴婦嘆の事に感ず。然りと雖も日月すら安居せず、人何ぞ常に寧きを

を得んや。周公の東征は三年に亙りしも、我が神武の軍は暫くにして平定するを得ん。我れ甘んじて親戚を離れ、忠貞の節を竭す所以なり。ただ我の微力なる、平生素餐の恩に報ゆる能はざらんことを恐る。因つて夙夜恍惚し、遠征を思ふこと縈繞を抽んづるが如し。將に羽旗を負ひて先登せんとす。豈金聲を聞いて退くをなさんや。

軍に從ひて(三九) 遐路に征き、彼の東南の(四〇) 夷を討つ。舟を方べて廣川に順ひ、薄暮未だ(四一) 安城せず。白日西山に半に、(四二) 桑梓餘暉あり。

蟋蟀岸を夾んで鳴き、孤鳥翩翩として飛ぶ。征夫

【三六】 併性。併性なり。

【三七】 羽。羽旗なり。

【三八】 金聲。退却の合圖。古は鼓を聞いて進み、金を聞いて退く。

【三九】 遐路。遠路なり。

【四〇】 夷。吳の孫權を指す。

【四一】 安城。舟を岸に繋ぐこと。

【四二】 桑梓。二木の名。餘暉は

蟋蟀岸を夾んで鳴き、孤鳥翩翩として飛ぶ。征夫

【三九】 遐路。遠路なり。

【四〇】 夷。吳の孫權を指す。

【四一】 安城。舟を岸に繋ぐこと。

【四二】 桑梓。二木の名。餘暉は



心に懐多く、(三) 悽悽として吾をして悲ましむ。  
船を下りて 高防に登れば、草露我が衣を濡す。  
身を廻して牀寝に赴く。此愁當に誰にか告ぐべ  
き。身干戈の事に服す。豈私する所を念ふを得んや。(三) 戎に即て命を授くるあり、茲理違ふべからず。

餘光。  
【三】 蟋蟀。こほろぎ。  
【三】 悽悽。悲傷の貌。

【三】 高防。高隄なり。  
【三】 戎。軍なり。即は就なり。

【大意】 吾れ從軍して遠く吳の孫權を討ち、舟を方べて大江を渡り夕に至るも尙ほ舟を泊する能はず、日將に西山に没せんとして、桑梓の梢僅に餘光を帯び、蟋蟀夕を告げ、飛鳥時に歸るを見らるや、感慨心に盈ち悲傷して已まず。舟を下りて岸に登り、草露の衣を濡す處 僅に一夜の夢を結び、愁思語るに人なし。然りと雖も既に軍に從へば、復た私事を思ふべきにあらず。生命を抛ちて君事に勉めざるべからず。

朝に鄴都の橋を發し、暮に 白馬の津を濟り、河隄の上に逍遙し、左右に我が軍を望めば、(三) 連舫萬艘に踰え、(四) 帶甲千萬人。彼の東南の路に率ひ、將に一舉の勳を定めんとす。(五) 籌策帷幄に運るは、一に我が 聖君に由る。恨むらくは我に 時謀なく、諸を 具官の臣に譬へられんことを。(六) 中

【三】 白馬。渡津の名。  
【三】 連舫。舫は并舟なり。  
【四】 帶甲。甲士なり。  
【四】 籌策。戰略なり。帷幄は帳幕。  
【四】 聖君。曹操を指す。  
【三】 時謀。時に應ずる謀。  
【四】 具官の臣。員に備はるのみの臣。無能の臣なり。  
【五】 中堅。卒伍の名。鞠躬は盡瘁なり。

聖の内に鞠躬し、(七) 微畫陳ふる所なし。(八) 許歴は完士たり、一言猶ほ秦を敗る。我に 素餐の責あり、誠に 伐檀の人に愧づ。(九) 鉛刀の用なしと雖も、庶幾はくは 薄身を奮はん。

【大意】 朝に鄴都を發し、暮に白馬津を渡り、隄防の上を徘徊し、我が軍士を望めば、船艦萬艘に餘り、甲士千萬人なり。皆吳に征きて孫權を平ぐるの功を立てんとす。謀略の神速なるは、我が君曹公の聖に由る。我れ時に應ずるの謀なく、不才にして員に備はるのみ。中堅に伍して盡力すと雖も、策略の陳ぶべきなきを恨む。昔許歴は一個の凡士なるも、猶ほ能く策を陳べて秦軍を敗れり。我れ既に徳なくして祿を受け、彼の伐檀の人に愧づ。鉛刀一割の用なしと雖も、ただ微力を盡して事功を立てんことを願ふのみ。

【四六】 微畫。微細なる謀略。  
【四七】 史記に「秦韓を伐つ、趙趙奢をして之を救はしむ、許歴曰く秦人は趙師の此に至るを意はず、其來るや氣盛ならん、將軍必ず厚く其陣を集めて以て之を待て、然らずんば必ず敗れんと、後許歴復た曰く、先づ北山の上に據る者は勝ち、後れて至る者は敗れんと、趙奢乃ち萬人を發して之に赴かしむ、秦兵後れて至り山を争ひて上るを得ず、趙奢

【三】 悠悠として荒路を涉り、(三) 靡靡として我が心愁ふ。四望するに煙火な

【三】 悠悠。長き貌。



く、ただ林と丘とを見る。城郭、榛棘を生じ、蹊徑由る所なし。蒲廣澤に竟り、葭葦長流を夾む。日夕涼風發し、翩翩として吾が舟を漂す。寒蟬樹に在りて鳴き、鶴鵠天を摩して遊ぶ。客子悲傷多く、涙下りて收むべからず。朝に譙郡の界に入れば、曠然として人憂を消す。雞鳴四境に達し、黍稷原疇に盈つ。館宅、鄜里に充ち、士女莊廬に滿つ。聖賢の國にあらざるよりは、誰か能く斯休を享けん。詩人樂土を美す。客たりと雖も猶ほ留まらんことを願ふ。

【大意】 遠く荒路を行きて我が心愁に滿ち、四方を望むも唯林丘を見るのみ、城郭に叢木茂り徑の通すべきなし。水邊に至れば水草長流を夾み、晚風吾が舟を漂はし、寒蟬樹頭に鳴き、鶴鵠天上に飛ぶ。之を見聞して益悲傷を加へ、涙落ちて拭ふに由なし。翌朝始めて譙郡に入り、忽ち憂情を一洗するを得たり。此地や村落相次ぎて黍稷野に滿ち、家屋稠密にして士女道に滿つ。曹公の如き聖賢にあらざれば、何ぞ能く斯の美を享くるを得ん。昔詩人も有徳の國を美せり。故に吾に於て客地なりと雖も尙ほ永く此土に留まらんことを願ふ。

- 【三】 蹊徑。愁ふる貌。
- 【四】 榛棘。叢林なり。
- 【五】 蹊徑。徑路なり。
- 【六】 葭葦。水草の名。
- 【七】 鶴鵠。水鳥の名。
- 【八】 客子。遊子といふに同じ。仲宜自ら謂ふ。
- 【九】 譙郡。曹操は譙郡の人なり、故に之を美す。
- 【一〇】 原疇。田野なり。
- 【一一】 鄜里。郭外の地。
- 【一二】 莊廬。道なり。
- 【一三】 斯休。休は美なり。
- 【一四】 詩人。詩經の詩の作者。樂土は有徳の國なり。

郊廟

宋の二郊祀歌二首

【一】 郊祀歌。宋の文帝の時、天地を郊祀し、延年をして詞を作らしむ。

【二】 寶命。天命なり。寅威は敬み畏るること。

【三】 帝祖。天帝及び祖先。嚴恭は尊敬なり。

【四】 海を云云。岱は山の名。書經に「海岱及び淮までは惟れ徐州」とあり、徐州は即ち彭城の東界なり。

【五】 唐。堯なり。宋の高祖はもと彭城の人にして、唐堯及び楚の元王(漢の高祖の弟)の後なり。

【六】 靈。神なり。睿は聖なり。

【七】 宇。國土なり。

【八】 月竊。月窟なり。西極をいふ。

【九】 日際。東極をいふ。

【一〇】 元。年號なり。正は曆なり。

【一一】 六典。周禮に六典の官あり、以て萬邦を掌る。

【一二】 九官。舜九官に命じ以て天下を治む。

【一三】 輕。神前に供する犧牲。滌は牲を養ふ室。

【一四】 絜。清潔の物。俎は供物を載する具。

【一五】 王衷。王の中心。

【一六】 神祐。神靈の降せる福。

顔

延年



承け、神人俱に其文武の徳に服す。乃ち大に天の賜を受け、中央に位して國土を拓き、普天率土皆之を戴いて君主となし、遠近皆王庭に來服し土物を奉獻す。ここに政教の基を建て、禮交り樂舉り、上下相和し、治國の官各其事を聯ねて、皆次序あり。因つて犧牲清潔の物を供へ、至誠の心を盡して天地を祭り、以て神靈の福に答ふ。

維れ 聖帝を饗し、維れ孝親を饗し、皇乎として備はり、上春に 事あり。禮 宗祀を行ひ、敬 郊禋に達す。金枝中に樹ち、廣樂四に陳り、陟配京に在り、徳を降して民に在り。奔精夜を昭し、高燎晨を煬し、陰明浮燦し、沈滌深淪す。成を告げて大に報じ、釐を元神に受く。月御節を案じ、星驅輪を扶け、遙に興り遠く駕し 曜曜振振たり。

- 【一七】 聖。宋の文帝を指す。帝は天帝。
- 【一八】 皇乎。大なる貌。
- 【一九】 事。祭事なり。
- 【二〇】 宗祀。祖先の祭。
- 【二一】 郊禋。天を祭ること。
- 【二二】 金枝。金を以て飾れる燈。
- 【二三】 廣樂。天子の音樂。
- 【二四】 陟配。天子の徳上りて天に配し、身は京師に在り。
- 【二五】 奔精。流星なり。
- 【二六】 高燎。柴を焼くカガリビ。
- 【二七】 陰明。北方の星なり。宋は水徳を以て王たり、故に此星光を揚ぐ。
- 【二八】 沈滌。祭の名。
- 【二九】 月御。月の御者、節を案ずとは徐行するなり。
- 【三〇】 曜曜。光明の貌。振振は盛なる貌。

【大意】 吾が君ここに天帝を祭り、又孝道を盡して祖先を祭らんとし、上春に當りて祭事を舉げ、よく禮敬を竭す。金燈中に立ち、廣樂四方に陳り、其徳上天に配して京師に在り。思徳降りて下民

に及び、流星祠壇を繞り、柴を燒くの煙曉に達し、陰明星その光を揚げ、其祭深靜なり。乃ち成功を告げて天に報じ、遂に福を天神に受く。天福の降下するや、月御車を馳せ、星辰輪を扶け、遙に興りて遠く地に至り、曜曜として盛なり。

樂府上

樂府四首

飲馬長城窟行

古辭

青青たる河畔の草、縣縣として遠道を思ふ。遠道思ふべからず、夙昔夢に之を見る。夢に見しとき我が傍に在り、忽ち覺むれば他郷に在り。他郷各々縣を異にし、展轉して見るべからず。枯桑天風を知り、海水天寒を知る。門に入りて各自に媚ぶ。誰か肯て相爲に言はん。客遠方より來り、我に雙鯉魚を遺る。兒を呼んで鯉魚を烹る。中に尺素の書あり。長跪して素書を読む。書中竟に何如。上には 餐食を加へよとあり、下に

- 【一】 樂府。役所の名、漢の武帝、郊祀の禮を定めて樂府を立つ。後樂器に合せて歌ふ詩の名稱となる。
- 【二】 古辭。作者の姓名を知らず、故に古辭といふ。
- 【三】 飲馬。馬に水かふこと。
- 【四】 縣縣。絶えざる貌。
- 【五】 夙昔。昨夜なり。
- 【六】 展轉。ねがへりすると。



は長く相憶ふとあり。

【大意】 此詩は閨怨の作なり。今や春草萎妻たる春となり、吾が夫を想ふの心緒亦春草の生ずるが如くに起り、縣縣として絶えず。昨夜夢中夫と相見る。夢覺むれば遠く隔りて、展轉反側するも相見る能はず。それ獨居する者能く寂寥の苦を知る。世の耦ある者は門に入りて互に媚愛す。何ぞ吾が情を訴ふるを得んや。偶々客の夫の處より來るあり。我に二鯉魚を贈る。僮をして之を烹しむるに、中に書信あり。我れ長跪して之を讀めば、上には攝養を加へて健康を保たれよとあり。下には遙に御身を想ひつつありとあり。此詩一説に蔡邕の作なりといふ。

君子行

君子は未然に防ぎ、嫌疑の間に處らず。(一〇)瓜田に履を納れず、(一一)李下に冠を正さず。(一二)嫂叔は親授せず、長幼は比肩せず。(一三)勞謙其柄を得。(一四)和光甚だ獨り難し。(一五)周公白屋に下り、(一六)哺を吐いて餐に及ばず。(一七)一沐に三たび髪を握

【七】 枯桑。以下二句ただ獨居する者寂寥の況味を知るに喩ふ。  
【八】 尺素。白絹なり。古人の

書信多く絹に書す。  
【九】 餐食。食事なり。餐食を加ふとは攝養すといふがことし。

【一〇】 瓜田。うりばたけ。  
【一一】 李下。すももの木の下。  
【一二】 嫂叔。嫂は兄の妻、叔は弟。親授は直接に物のやりとりすること。  
【一三】 勞謙。勞は功なり、功ありて之に處るに謙を以てする

は、物を持つに其柄を得たるが如しとの意。  
【一四】 和光。才智を誇示せざるをいふ。老子に「其光を和し其塵を同うす」とあり。  
【一五】 周公。名は旦、周の成王の攝政たり。白屋は賤士の居

る。後世聖賢と稱す。

【大意】 人は當に嫌疑を避くべく、尤も當に謙和を守るべきを言ふ。君子の世に處するや、未然に警戒し嫌疑を避くべし。瓜田には履を納るべからず、李下には冠を正すべからず。(盜の嫌疑を避く) 嫂と弟とは親く物を授受すべからず。(姦通の嫌疑を避く) 長幼は肩を比べて行くべからず。(無禮の嫌疑を避く) 又己の功に誇り能を輝すべからず。昔周公は能く賤士に下り、吐哺握髮して以て天下の士を待てり。故に後世之を稱して聖賢となす。

傷歌行

(一) 昭昭たる素明の月、(二) 暉光我が牀を燭らす。憂人寐ぬる能はず、(三) 耿耿として夜何ぞ長き。微風(四) 閨闈を吹き、(五) 羅帷自ら飄颻す。衣を攬りて長帯を曳き、(六) 屣履して高堂を下る。東西安んぞ之く所あらん、徘徊して以て彷徨す。春鳥(七) 翻りて南に飛び、(八) 翩翩として獨り翔翔す。悲聲(九) 儔匹に命じ、哀鳴我が腸を傷ましむ。物に感じて思ふ所を懷へば、(十) 泣涕忽ち裳を濡す。

る家。  
【六】 哺。口中に含める食物。餐は食ふこと。一食の間に三たび哺を吐きて天下の士を待てるをいふ。  
【七】 一沐。一たび髪を洗ふこと。

【一】 昭昭。明なる貌。素明は白くして明なること。  
【二】 暉光。光なり。  
【三】 耿耿。安からざる貌。  
【四】 閨闈。閨門なり。

【三】 羅帷。薄絹の帳。  
【四】 履履。履をばくこと。  
【五】 翩翩。鳥の飛ぶ貌。  
【六】 儔匹。仲間の鳥。  
【七】 泣涕。なみだ。

(三) 泣涕忽ち裳を濡す。



佇立して高吟を吐き、憤を舒べて 穹蒼に訴ふ。

【大意】 此れ思婦の詩なり。天上の明月我が孤居の牀を照し、憂思して眠る能はず。夜の長きを怨みつつあれば、微風來りて閨帷を翻す。乃ち衣を攝げ履を穿ちて堂を下り、足にまかせて園中を徘徊す。偶々春鳥飛鳴して其友を呼ぶ。之を聞きて、我益々夫を思ひて涙を濺ぎ、高吟して蒼天に訴ふ。

長歌行

青青たる園中の葵、朝露日を待ちて晞く。陽春德澤を布き、萬物光暉を生ず。常に恐る秋節至り、焜黄して華葉の衰ふるを。百川東して海に到る。何の時か復た西に歸らん。少壯にして努力せずんば、老大にして徒に傷悲せん。

【大意】 園中の葵を見るに、湛湛たる朝露日を待ちて忽ち晞く。露澤の久うすべからざること以て見るべし。春和澤を布き、萬物俱に光暉を生ずるも、常に秋節至りて、華葉の衰へんことを恐る。百川東流して海に到れば、復た歸るべからず。人生も亦此に同じ。少壯の時努力せずんば、老年に至りて徒に自ら傷まんのみ。

怨歌行

班婕妤中

【一】 班婕妤。漢の成帝の宮人にして趙飛燕の爲に寵を奪は

新に齊の 紈素を裂けば、鮮潔にして霜雪の如し。裁して 合歡扇を成し、團團として明月に似たり。君が懷袖に出入し、動搖して微風發す。常に恐る秋節至り、涼颺炎熱を奪ふを。篋笥の中に弃捐せられ、恩情 中道に絶ゆ。

【大意】 齊國に産する白絹を裂けば、その潔白なること雪の如し。之を裁ちて合歡扇を作れるに、圓きこと明月の如し。ここに君の懷中に出入し、時に之を搖かして微風を發す。然も一旦秋風起りて炎熱を奪ひ、また扇を要せざるに至らんことを恐る。果せるかな終に箱中に棄てられ、また君寵を辱うする能はざるに至りぬとて、通首扇を借りて自ら比したるなり。首二句は己の美貌、三四句は宮中に入りしこと、五六句は君寵を得しこと、七八句は飛燕を恐れしこと、末二句は寵を失へることに喩ふ。

樂府二首

魏武帝

短歌行

【一】 魏武帝。曹操、字は孟德。



酒に對して當に歌ふべし、人生幾何ぞ。譬へば朝露の如し。去日甚だ多し。慨して當に以て慄すべし。憂思忘れ難し。何を以て憂を解かん。唯 杜康あり。青青たる子が衿、悠悠たる我が心。但 君が爲の故に、沈吟して今に至る。呦呦として鹿鳴き、野の苹を食ふ。我に嘉賓あらば、瑟を鼓し笙を吹かん。明明として月の如し。何の時にか接るべき。憂中より來り、斷絶すべからず。陌を越え阡を度り、枉げて用て 相存す。契闊談讌して、心に舊恩を念ふ。月明かに星希に、鳥鵲南に飛び、樹を繞ること三匝、何れの枝にか依るべき。山は高きを厭はず、海は深きを厭はず。(二)周公哺を吐いて、天下心を歸せり。

【大意】 此れ歲月の逝き易きを歎じ、賢才を得て以て早く王業を建てんことを欲するの詩なり。酒に對して當に歌ふべし。人生は朝露の如く、去日甚だ多し。何ぞ慷慨悲歌せざるを得んや。此憂を消すものは唯酒あるのみ。われ賢才を得んことを思ひ、心常に沈吟して置かず。誠に賢才を得て治を輔くるを得ば、當に鹿鳴の章の嘉賓を讌樂

- 【一】 杜康。酒の異名。
- 【二】 青青。以下二句は詩經鄭風子衿篇の語なり。昔學生は皆青き襟の衣を著たり。故に學生を青衿といふ。悠悠は憂思の貌。青衿の見難きに由りて之を憂思するなり。
- 【三】 君。青衿を指す。
- 【四】 呦呦。以下四句は詩經小雅鹿鳴篇の語なり。此篇は嘉賓を讌することを詠す。呦呦は鹿の鳴く聲。苹は草の名。
- 【五】 陌。陌も阡も道なり。
- 【六】 相存。問ふこと。
- 【七】 契闊。勤苦すること。
- 【八】 月明。月明かなれば星稀なり。大賢出でて小人勢を失ふに喩ふ。月は曹操自ら比す。
- 【九】 鳥鵲。世の賢才に喩ふ。樹を繞る三匝とは依るべき所を知らざるに喩ふ。
- 【一〇】 周公。前詩に見ゆ。

するが如くなるべし。然も賢才の得難きは、月光の接るべからざるが如し。是を以て憂思心に絶ゆることなし。時に道を枉げて故舊を存問すれば、談讌に勤苦して唯舊情を念ふのみ。背て來りて我に就かず。我れ今獨り權勢を得て、餘子は碌碌たれども、世の賢才我に依るを知らず。我の深く惜む所なり。夫れ山は土を辭せず、故に能く其高きを成し、海は水を辭せず、故に能く其深きを成し、明主は人を厭はず、故に能く其衆きを成す。周公は王者の親を以て、吐哺握髮して天下の士を待つ。故に天下皆心を之に歸せり。我亦此を慕ふ者なり。

苦 寒 行

北のかた 太行山に上る。難い哉何ぞ 巍巍たる。羊腸阪詰屈たり。車輪之が爲に摧く。樹木何ぞ 蕭索たる、北風聲正に悲む。熊羆我に對して 蹲り、虎豹路を夾んで啼く。谿谷人民少く、雪落ちて何ぞ 霏霏たる。頸を延べて長く歎息し、遠行して懷ふ所多し。我が心何ぞ 怫鬱たる、一たび 東歸せんと思欲す。水深くして橋梁絶え、中道正に徘徊す。迷惑して故路を失ひ、薄暮 宿栖するなし。行き行きて日已に遠く、人馬同時に饑う。囊を擔ひ行きて薪を取り、氷

- 【一】 太行山。山の名、河内野
- 【二】 巍巍。高き貌。
- 【三】 羊腸阪。阪の名、太原晉陽の北に在り。詰屈は曲れる
- 【四】 蕭索。寂寥なり。
- 【五】 霏霏。雪のふる貌。
- 【六】 怫鬱。憂志の貌。
- 【七】 東歸。故郷に歸るをいふ。



を斧り持ちて糜を作る。彼の 東山の詩を悲み、悠悠として我を哀ましむ。

【五】宿栖。宿泊なり。  
【二】東山。詩經爾風の詩篇の

名。行役を歌へる詩なり。  
【三】悠悠。憂思の貌。

【大意】此行役苦寒に因りて作る。恐らくは北のかた烏桓を討ちし時の作ならん。北のかた太行山に登れば、路峻にして行き難く、羊腸阪は屈曲して車輪も之が爲に碎けんとなす。樹木葉落ちて北風之を拂ひ、虎豹熊羆路に當りて蹲り、行人絶えて雪繁し。頸を延べて顧望すれば、心鬱結して故郷に歸らんことを思ふ。水深くして橋なく、中途にさまよひて夕に至るまで宿泊するを得ず。日は已に遠く西山に没し、人馬俱に飢う。因つて袋を擔ひて柴を採り、氷を碎きて粥を煮る。時に周公東征して東山の詩を作り、兵士の勞苦を悲みしを思ひ、我をして悲哀の情に堪へざらしむ。

樂府二首

魏文帝

善哉行

山に上りて薇を采り、薄暮饑に苦む。谿谷風多く、霜露衣を沾す。野雉羣り雉き、猴猿相追ふ。還つて故郷を望めば、鬱として何ぞ 壘壘たる。高山に崖あり、林木に枝あり。憂來りて方なく、人之を知る莫し。人生寄るが如し。多く憂ふるも何を

【一】壘壘。山の重れる貌。  
【二】方。定方なり。

か爲ん。今我れ樂ますんば、日月馳するが如し。湯湯たる川流、中に行舟あり。波に隨つて轉薄し、客遊に似たるあり。我が良馬に策うち、我が輕裘を被り、載ち馳せ載ち驅り、聊か以て憂を忘れん。

【大意】これ客遊の所感を述べし詩なり。客地に在りて暮に薇を採り、以て飢を療せんとすれば、谷中の風霜衣を沾して堪へ難し。彼の猿鳥を見るに、各羣を成して自適せるも、我れ獨り離居して故郷を望み、徒に

【三】湯湯。水の流るる貌。  
【四】轉薄。回轉して岸に至り著ること。

悲を増すのみ。山には崖あり木には枝あり。凡そ皆定向あらざるはなし。獨り憂の定方なきは、人の知り難き所なり。然りと雖も人生は寄寓の如し。何ぞ必しも多く憂ふるをなさんや。宜しく時に及んで行樂すべきなり。舟の流に漂ふは、恰も客遊の人に似たり。いでや肥馬に鞭うち輕裘を著て、山水の間を遨遊し、以て吾が憂を除かん。

燕歌行

秋風 蕭瑟として天氣涼しく、草木搖落して露霜となり、羣鷺辭し歸りて鴈南に翔る。念ふ君客遊して思斷腸。慊慊として歸を思ひて故郷を戀はん。何爲れぞ淹留して他方に寄る。賤妾

【五】蕭瑟。淋しき貌。  
【六】慊慊。心に満たざる所あり

る貌。  
【七】淹留。久しく滯留するこ



〔大意〕 箏・箏として空房を守る。憂來りて君を思ひて  
敢て忘れず、覺えず涙下りて衣裳を濡す。琴を援  
き絃を鳴らして、清商を發し、短歌微吟長きこ  
と能はず。明月皎皎として我が牀を照し、  
〔一〕星漢西に流れて夜未だ央ならず。〔二〕牽牛織女遙に相望む。〔三〕爾獨り何の幸ありて 河梁を恨  
む。

【八】 箏・箏。孤獨の貌。空房は  
空閑。  
【九】 清商。清苦にして愁を含  
む音調。

【一〇】 皎皎。明かなる貌。  
【一一】 星漢。あまのがは。  
【一二】 牽牛織女。二星の名。  
【一三】 爾。牽牛織女を指す。  
【一四】 河梁。梁は橋なり。

【大意】 婦人遠行の夫を思ふ事を作るなり。今や霜飛び木落ち、鴈燕亦各南北に歸る。君獨り  
客遊して歸らず。客中必ず慊慊として故郷を戀ひつつあらん。宜しく早く歸るべし。妾今獨り空閑  
を守れば、憂へ來りて涙衣を沾す。琴を弾じて自ら慰めんとすれば、音調清苦にして吟聲續ぎ難  
し。明月牀を照して銀河西に流るる處、牽牛織女の二星河を隔てて相望むを見る。ああ此の二  
星河の罪ありて、河梁を隔てて相會ふを得ざるやとなり。末二句は己の夫に會ふを得ざるに比して  
言ふ。

樂府の詩四首

曹子建

箏 篋 引

高殿の上に置酒し、親友我に従つて遊ぶ。中厨 豐膳を辨へ、羊を烹て肥牛を宰む。秦箏何ぞ  
慷慨、齊瑟和にして且つ柔。陽阿奇舞を奏し、  
京洛名謳を出す。樂飲 三爵を過ぎ、帯を緩  
めて 庶羞を傾く。主は千金の壽を稱し、  
賓は萬年の酬を奉ず。久要忘るべからず、終  
に薄きは義の尤むる所なり。謙謙たる君子の徳、  
〔一〕磬折して何をか求めんと欲する。驚風白日  
を飄し、光景馳せて西に流る。盛時再びすべ  
からず、〔二〕百年忽として我に適る。〔三〕生在して  
は華屋に處り、〔四〕零落しては山丘に歸る。〔五〕先  
民誰か死せざらん。〔六〕命を知らば復た何をか憂  
へん。

【大意】 この詩は世俗讌會の華奢なるを見、曉すに交道は唯終あるを貴ぶ。徒に長壽の頌禱をな

- 【一】 箏・篋。もと樂器の名。引は曲といふが如し。
- 【二】 置酒。酒宴を設くること。
- 【三】 豐膳。饒多なる食物。
- 【四】 宰。料理すること。
- 【五】 秦箏。秦人よく箏を彈す故に秦箏といふ。慷慨は激揚といふが如し。
- 【六】 齊瑟。齊人よく瑟を鼓す故に齊瑟といふ。
- 【七】 陽阿。漢の成帝の時の歌舞の妙手。
- 【八】 京洛。京師の人。名謳は巧妙なる歌。
- 【九】 三爵。爵は杯なり。君子の宴は三爵を度とす。
- 【一〇】 庶羞。諸種の珍味。
- 【一一】 千金。史記に「平原君千金を以て魯仲連の壽をなす」とあり。
- 【一二】 久要。舊約なり。
- 【一三】 磬折。身を屈すること。
- 【一四】 百年。人の一生を假に見積りて言ふ。
- 【一五】 生在。一本に生存とあり。
- 【一六】 零落。死亡なり、山丘は墳墓。
- 【一七】 先民。古人なり。
- 【一八】 命。天命なり。



すの愚なるを以てせるなり。高堂に盛宴を設け、親友相會して樂み、酒肴音樂歌舞座に滿ち堂に溢る。飲むこと既に三杯を過ぎ帯を緩めて佳味を盡し、主人は杯を獻じて千金の壽を頌し、客は杯を酬いて萬年の壽を禱る。此れ世俗の爲す所なり。然も全く無益の事なり。君子の交は舊約を忘れざるを貴ぶ。始に厚くして終に薄きは、義に於て過れりとなす。謙恭は君子の徳なり。吾の其身を屈するは、唯徳を失はざらんことを期するのみ。千萬年の壽を求めんが爲にあらす。見よ驚風白日を飄し、日景西に馳すれば、盛年再び得べからず、百年の生涯忽にして身に迫る。生きては華屋に住するも、死すれば墳墓の主となる。古人誰か死せざる者あらん。長壽を禱るの益なきこと以て見るべし。ただ天を樂み命を知る者、獨り憂なきのみ。

名都篇

名都に 妖女多く、京洛に少年を出す。寶劍千金に直し、被服麗にして且つ鮮なり。雞を東郊の道に鬪はし、馬を長楸の間に走らす。馳騁未だ半なる能はず、雙兔我が前を過ぐ。弓を攬りて鳴鏑を捷み、長驅して南山に上る。左に挽き右に因りて發すれば、一たび縦ちて兩禽連る。餘巧未だ展ぶるに及ばず、手を仰ぎて飛

- 【一九】名都篇。篇首の二字を取りて題とす。名都とは有名な都會の意にて邯鄲、臨淄などを含む。
- 【二〇】妖女。美女なり。
- 【二一】京洛。京師、洛陽なり。
- 【二二】長楸。楸は木の名。古人楸を道に植う。

鳶を接る。觀る者咸善しと稱し、衆工我に妍を歸す。歸り來りて平樂に宴し、美酒斗十千。鯉を膾にして胎鰕を膾にし、鼈を炮きて熊蹯を炙にす。鳴鶴匹侶を嘯き、列坐長筵に竟る。連翩として鞠壤を撃ち、巧捷惟れ萬端。白日西南に馳せ、光景攀むべからず。雲散して城邑に還り、清晨復た來り還る。

- 【一】鳴鏑。かぶら矢。
- 【二】兩禽。雙兔なり。
- 【三】接。射なり。
- 【四】衆工。諸の善射者。妍は美なり、妙なり。
- 【五】平樂。宮觀の名。洛陽の西門外に在り。
- 【六】斗十千。一斗の價一萬錢との意にて高價なるをいふ。
- 【七】胎鰕。鰕の卵。
- 【八】熊蹯。熊の掌、古來美味の稱あり。
- 【九】鳴鶴。鳴は呼、鶴は友。友を呼ぶこと。匹侶は友、嘯も呼ぶこと。
- 【一〇】連翩。輕迅の貌。鞠壤は蹴鞠及び擊壤の遊技をなすこと。
- 【一一】巧捷。巧妙にして敏捷なること。萬端は一一變化あるをいふ。
- 【一二】雲散。雲の如く散ること。

【大意】時人の騎射遊戯を事とするを刺れる詩なり。名都には美女多く、洛陽には少年多し。佩ぶる所は千金の寶劍にして、衣服は鮮麗なり。此の少年鬪雞騎馬を樂となし、馬を馳すること半途にして、雙兔の馬前に走るを見る。弓を執り矢を挿み、長驅して南山に登り、左手に弓を挽き、右手に矢を縦てば、一發にして雙兔を貫く。妙技未だ施し盡すに及ばざるに、又手を舉げて飛鳶を射る。觀る者皆其巧を稱し、衆手皆妙技を推して我に歸す。歸り來りて平樂觀に宴し、美酒あり佳肴あり、友を呼びて席を列ね、起つて蹴鞠、擊



壤の戯をなし、敏捷にして變化百出す。忽ち日西に没して、又挽き留むべからず。因つて各々城邑に歸り、明晨また此に來る。日日遊樂に耽ること斯の如し。嘆すべきかな。

美女 篇

美女妖にして且つ閑かなりの桑を岐路の間に采る。柔條紛として冉冉たり。葉落つると何ぞ翩翩たる袖を攘げて素手を見し、皓腕に金環を約ぶ。頭上金爵の釵、腰に翠琅玕を佩ぶ。明珠玉體を交へ、珊瑚木難に問る。羅衣何ぞ飄飄たる。輕裾風に隨つて還る。顧眄すれば光彩を遺し、長嘯すれば氣蘭の若し。行徒用て駕を息め、休者以て餐を忘る。借問す女安にか居る。乃ち城の南端に在り。青樓大路に臨み、高門重關を結ぶ。媒氏何の營む所ありて、玉帛時に安んぜざる。

- 【三五】妖。美なり。閑は雅なり。
- 【三六】柔條。嫩枝なり。紛は亂、冉冉は動く貌。
- 【三七】翩翩。飛ぶ貌。
- 【三八】素手。白き手。
- 【三九】皓腕。白き腕。金環は黄金のワテア。
- 【四〇】金爵。黄金製の雀。釵の飾なり。
- 【四一】翠琅玕。玉に似たる美石。
- 【四二】珊瑚。珠の名。木難は碧色の珠。
- 【四三】羅衣。薄絹の衣。飄飄は飄る貌。
- 【四四】行徒。行路の人人。
- 【四五】青樓。青漆を施せる樓閣。
- 【四六】重關。重門なり。
- 【四七】容華。美しき容貌。
- 【四八】令顔。美貌なり。
- 【四九】媒氏。結婚の媒介者。
- 【五〇】玉帛。玉と絹、結納の贈物。
- 【五一】佳人。美女なり。

し。衆人徒に嗷嗷たり。安んぞ彼の觀る所を知らん。盛年房室に處り、中夜起ちて長歎す。

【大意】美女を以て君子に喩へ、君子美行あり、賢君を得て之に事へんことを願ひ、若し時に遇はずんば、微さると雖も終に屈せざることを言ふ。美女あり妖冶にして閑雅なり。出でて桑を路傍に摘む。嫩枝冉冉として椳み、桑葉翩翩として落つ。雪白の腕に金環を結び、金雀の釵を戴き、琅玕の佩を腰にし、珠玉相交りて耀き、羅衣風に飄り、顧眄すれば光彩永く遺り、長吟すれば其氣蘭の如く芳し。此の美女を見ては行路の人も足を留め、憩ふ者も食ふを忘る。問ふ此女何處にか住すると。答へて曰く、家は城市の南端にあり、高樓路に臨み、重門堅く閉ぢたりと。ああ彼の美貌を見ては、誰か之を娶るを欲せざらん。媒氏何ぞ早く婚事を定めざるや訝しき限りなり。そは他にあらず。此の美女高義を慕ひ賢婿を求むれども得難ければなり。衆人徒に喧騒するも、何ぞ彼女の意中を知らんや。彼女既に佳婿を擇ぶ。故に盛年に至るまで獨り閨中に在り。然も中夜起ちて志願の遂げざるを嘆息しつゝあるなり。

- 【五二】嗷嗷。喧騒すること。
- 【五三】彼の云云。彼の美女の意中を知らんやとの意。
- 【五四】房室。閨房なり。

白馬 篇



白馬 金鞵を飾り、連翩として西北に馳す。借問す誰が家の子ぞ、幽并の遊俠兒、少小にして郷邑を去り、聲を沙漠の垂に揚ぐ。宿昔良弓を乗り、楛矢何ぞ參差たる。弦を控いて左的を破り、右に發して月支を摧く。手を仰ぎて飛猿を接、身を俯して馬蹄を散ず。狡捷猴猿に過ぎ、勇剽豹蝟の若し。邊城警急多く、虜騎數々遷移す。羽檄北より來り、馬を厲して高隄に登る。長驅して匈奴を踏み、左顧して鮮卑を陵ぐ。身を鋒刃の端に棄て、性命安んぞ懷ふべき。父母すら且つ顧みず、何ぞ子と妻とを言はん。名壯士の籍に編し、中に私を顧るを得ず。軀を捐て國難に赴き、死を視ること忽ち歸するが如し。

- 【一】金鞵。黄金のオモツラ。
- 【二】連翩。馬の馳する貌。
- 【三】幽并。二州の名。今の山西直隸の地。此地古來勇俠多し。
- 【四】沙漠。支那の西北なる沙漠の地。
- 【五】宿昔。昔時。
- 【六】楛矢。竹箭なり。參差は長短齊しからざる貌。
- 【七】左的。左方に設けたるマト。
- 【八】月支。射帖なり。布帛に畫きて的とせるもの。
- 【九】飛猿。敏捷なる猿。接は射なり。
- 【一〇】馬蹄云云。馳騫するをいふ。
- 【一一】狡捷。動作の敏捷なること。猴猿は猿。
- 【一二】勇剽。猛獸の名。
- 【一三】警急。警戒すべき事變。
- 【一四】虜騎。外夷の騎兵。
- 【一五】羽檄。兵を徵す文書。
- 【一六】鮮卑。外夷の名。
- 【一七】性命。生命なり。
- 【一八】中。心中なり。

【大意】白馬に乗る者を見て此篇を作る。人當に事功を立て力を國家に盡すべく、私を念ふべからざる事を言ふ。白馬に金鞵を飾り、西北に向つて疾驅する者あり。これ何人ぞや。答者曰く、幽并の遊俠兒にして、少年の時郷里を去りて此地に來り、勇名を蕃夷の間に轟かせる者なり。昔嘗て弓矢を負ひ、左に發して右に發して射帖を摧き、仰いで飛猿を射、俯して馬を馳せ、敏捷なること猿に過ぎ、勇猛なること虎豹の如し。今馬を驅りて西北に向ふは、邊城に胡夷來寇し、檄を飛ばして兵を徵すを以て、將に征きて匈奴鮮卑の賊を破らんが爲なり。此人既に身を鋒刃に委し、また生命を惜まず、父母妻子をも敢て顧みず。名を壯士の籍に置けば、心に私事を顧るを許さず。去つて外夷を攘ひて國難を救はんとす。死を視ること尙ほ故郷に歸るが如し。

王明君の辭 竝序

石季倫

王明君は本是れ王昭君、良家の子昭君を以て配す。昔公主烏孫に嫁ぐとき、琵琶をして馬上に樂を作し、以て其道路の思

【一】王明君。王昭君なり、年十七にして漢の元帝の宮人となる、宮人甚多きを以て畫工をして其形を圖せしめ、圖を按じて召幸す、宮人皆畫工に略す、昭君獨り其美を恃みて略はず、工人乃ち之を醜圖す。

【二】石季倫。石崇、字は季倫、後匈奴婚を漢に求む、帝圖を按じ昭君をして匈奴に嫁せしむ、昭君入りて辭するに及び光彩人を射る、帝悔恨すれども及ばず、遂に匈奴に嫁せしむ。

【三】晉の渤海南皮の人。

【四】文帝。晉の文帝。諱は昭。良家の子。清白人家の子女をいふ。

【五】公主。天子の女の稱、漢の武帝の時、烏孫使を遣して馬を獻じ、公主に尙せんこと



を慰めしむ。其の明君を送るとき、亦必ず爾りしならん。其の新曲を作る、哀怨の聲多し。故に之を紙に敍すと云爾。

- 【九】 僕御。馭者なり。流離は涙の流るる貌。
- 【一〇】 五内。五臓なり。
- 【一一】 珠纓。冠の紐。
- 【一二】 穹廬。まるでんじやう。
- 【一三】 閼氏。單子の中に住す。
- 【一四】 殊類。異人種なり。
- 【一五】 父子。父子二人にて昭君を妻とせるなり。
- 【一六】 屏營。うるうるする貌。
- 【一七】 匣中。箱の中、漢土の人たるをいふ。
- 【一八】 糞土。匈奴に喩ふ。

我れ本漢家の子、將に單子の庭に適かんとす。辭訣して未だ終るに及ばず、前驅已に旌を抗ぐ。僕御涕流離し、轅馬悲み且つ鳴く。哀鬱五内を傷ましめ、泣涙珠纓を霑す。行き行きて日に遠く、遂に匈奴の城に造る。我を穹廬に延き、我に閼氏の名を加ふ。殊類は安んずる所にあらず、貴しと雖も榮とする所にあらず。父子に陵辱せらる。之に對して慙ぢ且つ驚く。身を殺すは良に易からず、默默として以て苟も生く。苟も生きて亦何をか聊んせん、積思常に憤盈す。願くは飛鴻の翼を假り、之に乘りて以て遠く征かん。飛鴻我を顧みず、佇立して以て屏營す。昔は匣中の玉たり、今は糞土の英たり。朝華は歡ぶに足らず、秋草と并せられんことを甘んず。語を後世の人に傳ふ。遠嫁情を爲し難しと。

【大意】 われ本と漢人なるに、將に匈奴の王に嫁せんとす。陛下に別を告ぐるに未だ終らざるに先驅の士卒早くも旌を擧げて行を促す。因つて車に駕して去らんとすれば、僕馬皆悲鳴す。吾が心亦悲傷し、五臓も爲に裂けんとなす。行きて匈奴の城に至れば、我を穹廬の中に迎へ入れ、我を以て后となす。異人種は心に安んずる所にあざれば、后妃の貴きに升るも敢て榮とする所にあらず。況んや父子二人我を凌辱して妻となすをや。之に對して唯慙ぢ且つ驚くのみ。自殺するの難きを以て、隱忍して生を保てども、幽憤常に心に滿つ。飛鷹の翼を借りて漢土に飛び歸らんと思へど、飛鷹敢て我を顧みず。獨り徘徊して沈吟するのみ。昔は漢土の玉たりしも、今や夷地の花となる。一朝の榮華は吾が希ふ所にあらず、ただ秋草と共に凋落せんことを願ふ。後世の人に寄語す。遠く外夷に嫁しては悲に堪へざることを。

樂府詩十七首

陸士衡

猛虎行

渴すれども盜泉の水を飲まず、熱けれども惡木の陰に息はず、惡木豈枝なからんや、志士苦心多し。駕を整へて時命を肅み、策を杖ついで將に遠

【一】 時命。時君の命。



く尋ねんとす。饑ゑて猛虎の窟に食し、寒えて野雀の林に栖む。日歸りて功未だ建たず、時往いて歳  
載ち陰れぬ。崇雲岸に臨んで駭き、鳴條風に隨つて吟ず。幽谷の底に静言し、高山の岑に長嘯  
す。急絃 懦響なく、亮節音を爲し難し。人生誠に未だ易からず、易ぞ云に此衿を開かん。我が  
介の懷を眷み、俯仰して古今に愧づ。

【大意】 此れ耿介の志を抱き事功を建てんと欲する意を述ぶ。昔孔子盗泉を過ぎ、渴すれども飲  
まず。其名を惡みてなり。志士は惡木の陰に息ふを恥づ。何ぞ況んや惡  
人と同じく處るをや。夫れ惡木には枝多く、之に息ふ者衆し。然も志士  
は苦心して其下に息はざらんことを期す。われ車馬を整へ時君の命を慎  
み、馬に鞭ちて遠く適かんとし、途に猛虎の窟に食ひ、野雀の林に宿  
す。是れ惡木盗泉を去ること、尙ほ未だ遠からず。豈久しく此に食息す

- 【一】 崇雲。高き雲。
- 【二】 鳴條。風に鳴る枝。
- 【三】 静言。沈思すること。
- 【四】 懦響。懦弱の響。
- 【五】 亮節。貞亮の節。
- 【六】 耿介。正直なり。
- 【七】 耿介。正直なり。

べけんや。忽ち日月逝き歳云に暮るるを致し、功業未だ建たず。徒に岸雲變幻し、秋風枝を鳴らす  
を見、無限の感慨を起し、乃ち谷底山巔に沈思長嘯す。我れ時に因りて節を屈せず。急絃の下自  
ら弱響なきも、貞亮の節は知音を得難し。此れ即ち志士苦心の處なり。世路を渉るは誠に至難と  
す。何ぞ此遠行の襟懷を開かん。われ唯耿介の節を眷愛するは、古今人に恥づるを恐るればなり。

君子行

天道は夷且つ簡なり、人道は峻にして難し。  
休咎相乘躡し、翻覆すること波瀾の若し。疾  
を去りて遠からざるに苦み、疑似實に患を生  
ず。火に近づけば固に熱かる宜く、氷を履んで  
豈寒を惡まんや。蜂を撥りて天道を滅し、塵  
を拾ひて孔顔を惑はす。逐臣尙ほ何か有ら  
ん、弃友焉んぞ歎くに足らん。福の鍾るは恆  
に兆あり、禍の集るは端なきにあらず。天損  
未だ辭し易からず、人益猶ほ懼ぶべし。朗鑒  
豈遠く假らんや、之を取るは傾冠に在り。近情  
自ら信するに苦み、君子は未然を防ぐ。

【八】 夷。平なり、簡は略なり。  
【九】 休咎。禍福なり。乘躡は往來なり。  
【一〇】 蜂を云。尹吉甫が前妻の子は伯奇、後妻の子は伯封、後妻其子の太子たらんことを欲し、吉甫に言つて曰く、伯奇妾を好めり、若し信ぜずんば王臺に上りて之を觀よと。後妻蜂を取り其毒を除きて衣領の中に置き、伯奇をして視て之を殺さしむ、吉甫伯奇を責めしむ、使者袖に死蜂あるを見て以て吉甫に白す、吉甫之を追はしむれば、已に河に投ぜり。父子の道は天性の常なり、故に天道といふ。

【一】 孔顔。孔子陳蔡の間に窮すること七日、嘗て粒食せず、顔回米を得て之を炊ぐ、孔子望見すれば、回甑中の飯を攫みて之を食へり、飯熟して孔子に進む、孔子起ちて曰く、今夢に先君を見たり、食聚し之を饋らんと欲すと、曰く不可なり、さきに炭煤甑中に入る、食を棄つるは不祥なり、回因つて攫んで之を食へりと孔子歎じて曰く、信する所のものは目、恃む所のものは心、今心目信じて恃むに足らず、弟子之を記せと。炭煤とは煙塵なり。  
【二】 逐臣。君に逐はれし臣。  
【三】 弃友。棄てられし友。  
【四】 朗鑒。明鏡なり。抱朴子に「明鏡舉れば則ち冠を傾けて見る」とあり。荀悅申鑒に「側弁垢顔は明鏡に鑒みず」とあり。



人道は僻多し。故に險難なり。禍福の往來反覆するは、波瀾の定めなきが如し。惡を去ること遠からず、事疑似に涉るれば、則ち禍患を生じ、氷火に近づけば、必ず寒熱の患に罹り、讒佞に近づけば、則ち禍難を致す。蜂を取りて父子の天常を滅し、塵を拾ひて孔顔疑惑を生ず。況んや逐臣棄友をや。何の恨むべく歎すべきことか之れあらん。禍福の至る皆漸あり。天損の至る己の招く所にあらず。故に之に安んじて辭せず。人益の來る、己の求むる所にあらず。故に之を受けて歡となすべし。傾冠の明鏡に掩ひ難きは、皆自ら之を取るのみ。小人は近情にして自ら信ずるに苦みて禍に遇ひ、君子は遠く慮り嫌疑に遠ざかり、夷簡の天道に従ひて福を蒙る。

從軍行

苦しいかな遠征の人、飄飄として四遐を窮む。南のかた五嶺の巔に陟り、北のかた長城の阿を成る。深谷、遼として底なく、崇山鬱として嵯峨たり。臂を奮ひて、喬木に攀ち、迹を振げて、流沙を涉る。隆暑固に已に慘たり、涼風嚴にして且つ苛なり。夏

- 【一五】飄飄。遠行の貌。四遐は四方なり。
- 【一六】五嶺。江南に在る五山の稱。
- 【一七】長城。萬里長城。
- 【一八】遼。深き貌。
- 【一九】崇山。高山なり。嵯峨は高き貌。
- 【二〇】喬木。高き木、詩經に「南に喬木あり」とあり。
- 【二一】流沙。西北沙漠の地、書經に「西のかた流沙に被る」とあり。
- 【二二】涼風。寒風なり。苛は切なり。
- 【二三】夏條。夏の枝。

條鮮藻を焦し、寒氷衝波を結ぶ。胡馬雲屯の如く、越旗亦星羅す。飛鋒影を絶つなく、鳴鏑自ら相和す。朝に食ふに胃を免がず、夕に息ふに常に戈を負ふ。苦しいかな遠征の人、心を撫でて悲むこと如何。

【大意】遠征の人は誠に苦し。遠く四方を窮め、南は五嶺に至り、北は長城に至る。深谷を踏み高山に登り、喬木を攀ち沙漠を涉り、酷暑焼くが如くにして、鮮藻も其枝を焦し、寒風凜冽にして、衝波も爲に凍り、胡馬雲の如く集り、越旗星の如く布き、鋒刃飛んで影を絶たず、鳴鏑鳴つて響相和し、食ふにも胃を脱がず、息ふにも戈を釋てず。艱苦誠に甚しといふべし。その悲果して如何ぞや。

豫章行

舟を清山の渚に汎べ、遙に高山の陰を望めば、川陸途軌殊なり、懿親將に遠く尋ねんとす。三荆株を同うするを歡び、四鳥林を異にするを悲む。會ふを樂むは良に古よりす。別を悼むは豈獨り今のみならんや。世に寄る將

- 【一七】豫章。郡名なり。
- 【一八】清山。一本清川に作る。
- 【一九】途軌。道なり。
- 【二〇】懿親。兄弟なり。遠く尋ねとは遠く別るるをいふ。
- 【二一】三荆。荆はイバラ、三枝本を共にするなり。昔田廣、田眞、田慶兄弟三人、將に別れんとす、庭に荆樹あり宿を經て萎黃す、乃ち相謂つて曰く荆樹すら尙ほ然り、況んや我が兄弟をやと、遂に別れず荆復た悦茂す。
- 【二二】四鳥。孔子衛に在り哭す



た幾何ぞ、日昇いて陰を停むるなし。前路既に多く、後塗年に随つて侵す。催促たる薄暮の景、塵塵として克く禁むること鮮し。曷爲れぞ復た茲を以て、會ち是に苦心を懷く。遠節物に嬰ること淺く、近情能く深からず。行いて嘉福を保て、景絶えば繼ぐに音を以てせん。

る者を開く、甚だ哀し、顔回  
に問ひて曰く、汝知るや此れ  
何ぞ哭すると、回曰く此れ唯  
死の爲にあらす、又生離の爲  
なり、昔廼山の鳥四子を生み  
羽翼既に成り、將に四海に分  
れんとす、其母悲鳴して之を  
送る、其の往いて返らざるが  
爲なり、翫に音を以て類して

之を知れりと、之を問ふに果  
して然り。  
【三三】 前路。今日までの生涯。  
【三四】 後塗。餘年なり。  
【三五】 催促。速かなる貌。  
【三六】 塵塵。進む貌。  
【三七】 遠節。遠大の節。物は物  
果なり。  
【三八】 音。音信なり。

【大意】 兄弟の遠行を送る意なり。舟を汎へて遙に往路を望めば、川陸道を異にす。兄弟茲に遠く別れ去らんとす。荆樹も共に居るを歡び、鳥類も別れ栖むを悲む。會ふを樂み別るるを悼むは、古今となく一なり。況んや人生は寄寓の如く、歲月逝き易きをや。齡を重ねること既に多く、餘年亦幾何もなし。忽ち將に衰老せんとす。何爲れぞ復た離別の事をなし、此の愁苦の心を抱く。然りと雖も遠大の節あれば、物累に嬰ること淺く、哀情亦随つて深からざるを得ん。去つて宜しく善福を保つべし。形影若し絶えなば、之に繼ぐに音信を以てせん。

苦寒行

北のかた 幽朔の城に游べば、涼野嶮難多し。俯して 穹谷の底に入り、仰いで高山の盤に陟る。凝氷重澗に結び、積雪長巒に被る。陰雲巖側に興り、悲風樹端に鳴る。白日の景を觀ず、但寒鳥の喧しきを聞く。猛虎林に憑りて嘯き、玄猿岸に臨んで歎く。夕に喬木の下に宿し、慘愴して恆に歡鮮し。渴して堅氷の漿を飲み、饑ゑて零露の餐を待つ。離思固に已に久し、寤寐興に言ふなし。劇しいかな行役の人、慊慊として恆に寒に苦む。

【三九】 幽朔。北なり。  
【四〇】 涼野。寒野なり。  
【四一】 穹谷。窮谷なり。  
【四二】 喬木。高樹なり。  
【四三】 慘愴。悲傷なり。  
【四四】 零露。落つる露。  
【四五】 寤寐。ねてもさめても。  
【四六】 慊慊。満足せざるを恨む  
貌。

【大意】 北方寒冷の野を行き、窮谷に入り山巔に登れば、堅氷積雪山を覆ひ谿を埋め、風雲樹を拂ひ、日光を見ずして唯寒鳥の聲と、虎嘯き猿啼くを聞く。夕に高樹の下に宿すれば、悲傷して歡をなし難し。渴しては堅氷の漿をすすり、飢ゑては零露を掬んで食ふ。別離の情語るに人なし。行役の人苦寒の状かくの如く其れ甚し。

飲馬長城窟行

馬を驅りて 陰山に陟れば、山高くして馬前ま  
す。往いて陰山の 候に問へば、勁虜燕然に

【三七】 陰山。北邊の山の名。  
【三八】 候。斥候兵。

【三九】 勁虜。強狄なり。燕然  
山名。



在り。戎車軌を停むるなく、旌旄屢徂遷る。仰いで積雪の巖に憑り、俯して堅氷の川を渉る。冬來りて秋未だ反らず、家を去ること。遼として以て縣し。獫狁亮に未だ夷がず、征人豈徒に旋らんや。末徳先鳴を争ひ、凶器兩全なし。師克ちて薄賞行はれ、軍没して微軀捐てらる。將に甘陳の迹に遵ひ、功を單子の旂に收めんとす。振旅して歸士を勞ひ、爵を稟街の傳に受く。

【大意】 馬を驅りて陰山に陟れば、山險にして馬前まず。往いて斥候に問へば、匈奴尙は燕然山に在りといふ。乃ち更に兵車を進め旌旗を徙し、積雪を履み堅氷を渉る。昨冬來り征して、今秋尙は家に歸らず、家を離るること益遠なり。然も匈奴未だ平がず、何ぞ空しく歸るを得ん。進み戦つて先登を争ひ、兵刃交りて彼我孰か傷く。克てば薄賞を得、敗るれば命を捐つ。ただ甘延壽、陳湯に倣ひて單子を捕へ、凱旋して戰士を勞ふの時、稟街の傳舎に於て、封爵を受けんことを願ふ。

- 【五〇】 戎車。兵車なり。
- 【五一】 旌旄。旗なり。
- 【五二】 遼。遼なり。
- 【五三】 獫狁。匈奴なり。
- 【五四】 末徳。莊子に「三軍五兵の運は徳の末なり」とあり、戦をいふ。先鳴は先登して大に呼ぶこと。
- 【五五】 凶器。武器なり。
- 【五六】 微軀。微賤の身。

- 【五七】 甘陳。甘延壽は漢の北地の人、西域に使し副校尉陳湯と共に郵支單子を斬り義成侯に封ぜられ、陳湯は爵關内侯を賜ふ。
- 【五八】 單子。匈奴の王の稱。
- 【五九】 振旅。凱旋なり。
- 【六〇】 稟街。長安城内にある蕃夷の居留地。傳は傳舎なり。

門有車馬客行

門に車馬の客あり、駕して言に故郷を發す。君が久しく歸らざるを念ひ、袂を投じて門塗に赴き、衣を攬りて裳に及ばず。膺を撫で客を攜へて泣き、涙を掩ひて温涼を敍ぶ。邦族の間を借問し、惻愴して存亡を論ず。親友多くは零落し、舊齒皆凋喪しぬ。市朝互に遷易し、城闕或は丘荒となる。墳墓日月多く、松柏鬱鬱として芒芒たり。天道信に崇替す。人生安んぞ長きを得ん。慷慨して平生を惟ひ、俛仰して獨り悲傷す。

跡を濡して 江湖を渉

- 【六一】 君。陸士衡を謂ふ。
- 【六二】 江湖。川の名。
- 【六三】 門塗。門途なり。
- 【六四】 温涼。寒暖の挨拶をする
- 【六五】 邦族。郷里の親族。
- 【六六】 惻愴。悲傷なり。
- 【六七】 零落。死亡なり。
- 【六八】 舊齒。耆老なり。凋喪は死すること。
- 【六九】 墳墓。士衡の家の墳墓をいふ。
- 【七〇】 芒芒。盛なる貌。
- 【七一】 崇替。興廢なり。
- 【七二】 俛仰。俯仰なり。

【大意】 門に訪客あり、吾が故郷より來れるなり。客曰く、足下の久しく歸らざるに由り、足を漬して江湖を渉り、來りて足下を訪へるなりと。因つて疾く起ち、未だ衣を整ふるに暇あらず、出でて客を見、胸を撫で涙を掩ひて寒暄を敍し、郷里の親族の事を問ひ、其の生死を聞きて悲喜す。親友多くは死し、耆老存する者なし。市朝城闕或は化して丘墟となり、墳墓日に増して松柏鬱茂すと聞く。夫れ天道には興廢あり、人生獨り長きを得んや。慷慨し



て往時を憶ひ、俯仰して悲傷しぬ。

君子有所思行

駕を命じて北山に登り、延佇して城郭を望む。麴里一に何ぞ盛なる、街巷紛として 漠漠たり。

甲第高闈を崇うし、洞房阿閣を結ぶ。

曲池何ぞ 湛湛たる、清川 華薄を帯ぶ。

宇綺窓を列ね、蘭室羅幕に接す。

淑貌色の ままに斯に升起、哀音顔を承けて作る。

人生誠 行邁し、容華年に随つて落つ。

善い哉 膏梁の士、生を營むこと奥にして且つ博なり。

宴安靈根を消し、酖毒悒むべからず。

肉食の資を以て、笑を 葵と藿とに取るなけれ。

【大意】北山に登りて城市を望めば、街衢交錯し、高第樓閣軒を竝べ、池あり川あり、叢林あり。

深屋には綺窓を列ね、蘭室には羅帳を張り、中に美女あり容色の美を以て擧げらる。然も容色の衰ふるや、哀音忽ち起る。人生は行客の如し。

【七三】延佇。久しく立ちどまる。  
【七四】麴里。城邑なり。  
【七五】漠漠。布列する貌。  
【七六】甲第。甲乙の次第ある邸宅。  
【七七】高闈。高門。  
【七八】洞房。房室なり。阿閣は大閣。  
【七九】湛湛。水の平なる貌。  
【八〇】華薄。草木の叢生する處を薄といふ。  
【八一】還宇。深屋なり。綺窓は綺綺を以て飾れる窓。  
【八二】蘭室。香木にて造れる室。

【八三】羅幕は薄絹の帳。  
【八四】淑貌。美貌なり。  
【八五】行邁。行き過ぐる事。  
【八六】容華。美しき容色。  
【八七】膏梁。美食なり。  
【八八】宴安。左傳に「宴安は酖毒なり懷ふべからず」とあり。靈根は身に喩ふ。  
【八九】酖毒。害毒なり。  
【九〇】肉食。高位にある人といふ。  
【九一】葵藿。野菜の名。貧賤の人をいふ。

營丘海曲を負ひ、沃野爽且つ平なり。  
洪川河濟を控き、崇山高冥に入る。東のかた 姑尤の側に被り、南のかた 聊攝の城に 界す。海物萬類を錯へ、陸産尙ほ千名。孟諸 楚夢を呑み、百二秦京に倅し。惟れ 師東 表を恢いにし、桓后周の傾くを定む。天道 迭に代るあり、人道久しく盈つるなし。鄙しい 哉 牛山の歎、未だ至人の情に及ばず。  
爽 鳩苟も己に徂きぬ、吾子安んぞ停るを得ん。行き行きて將に復た去らんとす。長存は營 む所にあらず。

【九〇】營丘。齊の地名。  
【九一】沃野。豊饒なる野。  
【九二】洪川。大川なり。河濟は齊國にある川の名。  
【九三】崇山。高山なり。  
【九四】姑尤。齊の東界の地名。  
【九五】聊攝。齊の西界の地名。  
【九六】孟諸。齊の澤の名。楚夢は楚の雲夢澤。  
【九七】百二。史記に「秦は形勝の國、持戟百萬、秦百二を得たり」とあり。蘇林註に「秦地堅固、二萬人諸侯の百萬人に當るに足るなり」とあり。  
【九八】師。師尚父、即ち太公望なり、始めて齊に封ぜらる。

東表は東方の儀表。  
【九九】桓后。齊の桓公、霸業を成し王事に勤む。  
【一〇〇】牛山。晏子春秋に「齊の景公牛首山に遊び北其國に臨み流涕して曰く、若何ぞ此を去りて死するやと、艾孔、梁丘據皆泣く、晏子獨り笑ふ、公涕を收めて之に問ふ、晏子曰く、賢者をして常に守らしめば則ち太公桓公之を守らん勇者をして常に守らしめば則ち莊公之を有たん、吾が君安んぞ之を有つを得ん、而るに流涕をなすは是れ不仁なり、不仁の君一、詔諛の臣二を見



【大意】齊の地たる、東に海を負ひ、沃野千里、大川には清濟濁河あり、高山聳えて雲表に入る。其廣袤東は姑尤に至り、南は聊攝に至り、海陸の物産千種萬類なり。孟諸の澤は楚の雲夢より大に、國土の險は秦の百二に侔し。師尙父嘗て東方の儀表たり、桓公周室の傾けるを扶けぬ。然も天人の道は興廢して、暫くも留まらず。故に景公は牛山の嘆を發せり。是れ未だ至人の心に達せざるなり。爽鳩氏已に滅びぬ。齊侯豈獨り永く存するを得んや。長存は求めて得べからざる所なり。

日出東南隅行

或は曰ふ羅敷數歌

(101) 扶桑朝暉升り、此の高臺の端を照す。高臺に妖麗多く、(102) 澹房清顔を出す。淑貌皎日に耀き、(103) 惠心清且つ閑なり。美目玉澤を揚げ、(104) 蛾眉翠翰に象る。鮮膚一に何ぞ潤へ

る、獨り笑ふ所以なり」とあり。  
【101】爽鳩。昔齊國を領せし諸侯なり。左傳に「齊侯酒を飲んで樂む、公曰く古より死なくんば其樂若何ぞや」と、晏子對へて曰く、古より死ななくん

ば古の樂なり、君何ぞ得ん、爽鳩氏始め此地に居る、季薊之に因り、而して逢伯凌之に因り、蒲姑氏之に因り、太公之に因る云云」とあり。  
【102】吾子。齊侯をいふ。

【103】扶桑。東方日出の處にある木の名。朝暉は旭日。  
【104】妖麗。美女なり。  
【105】澹房。深閨なり。  
【106】淑貌。美貌なり。皎日は

白日。  
【107】惠心。順好の心。  
【108】玉澤。美しき光澤。  
【109】蛾眉。美しき眉。翠翰は翡翠鳥の羽。

る。秀色餐ふべきが若し。(110) 窈窕として容儀多く、(111) 婉媚にして笑言に巧なり。暮春に(112) 華丹、赤き花。(113) 綺と紵と。金雀藻翹を垂れ、(114) 瓊瑤瑤瑤を結ぶ。駕を方べて清塵を揚げ、足を(115) 洛水の瀾に濯ぐ。(116) 藹藹たり風雲の會、佳人一に何ぞ繁き。南崖(117) 羅幕充ち、北渚(118) 軒軒盈つ。清川(119) 藻景を含み、高崖(120) 華丹を被る。(121) 馥馥として芳袖揮り、(122) 泠泠として織指彈す。悲歌清響を吐き、雅舞(123) 幽蘭を播く。丹脣(124) 九秋を含み、(125) 妍迹七盤を陵ぐ。曲に赴くこと驚鴻より迅く、(126) 節を踏むこと集鸞の如し。(127) 綺態顔に随つて變じ、沈姿(128) 乏源なし。俯仰紛として(129) 阿那たり。顧步咸懼ぶべし。遺芳(130) 飛颺に結び、浮景清湍に映ず。(131) 冶容詠するに足らず、春游良に歎すべし。

【大意】 旭日東方より出で、高樓の端を照す。

樓中美女多く、常に深閨の中に在り。美貌白日に輝

- 【110】窈窕。美しき貌。
- 【111】婉媚。美しき貌。
- 【112】華丹。赤き花。
- 【113】綺。紵。鮮明なる貌。
- 【114】瓊瑤。美しき羽。
- 【115】洛水。川の名。
- 【116】藹藹。盛なる貌。風雲は多きをいふ。
- 【117】羅幕。薄絹の帳。
- 【118】軒軒。車なり。
- 【119】藻景。美しき日光。
- 【120】馥馥。美しき容姿。
- 【121】綺態。美しき態度。
- 【122】沈姿。一本に定源に作る。
- 【123】阿那。しなやかなる貌。
- 【124】飛颺。飛風なり。
- 【125】遺芳。美しき容姿。
- 【126】集鸞。調曲なり。
- 【127】乏源。美しき態度。
- 【128】阿那。しなやかなる貌。
- 【129】飛颺。飛風なり。
- 【130】冶容。美しき容姿。



き、其心順好なり。目には珠玉の光澤を含み、眉は翡翠の羽に似たり。肌膚潤美にして言笑共に好し。祭祭たる春服を著、金雀の釵を挿み、玉珮を佩び、車を馳せて洛水の邊に遊ぶ。その衆盛なること、風雲の會の如し。南岸には羅幕充ち、北岸には車輿滿つ。ここに清歌妙舞して其輕捷なること、驚鴻集鸞の如く、姿態舞容に隨つて變じ、深沈の姿縱横に出で、其源定まらず。芳香飛風に交り、舞影波瀾に映ず。其事詠歌するに足らずと雖も、芳春の遊誠に歎美すべし。

長安有狹邪行

(一三) 伊洛に岐路あり、岐路 朱輪を交ふ。(一四) 輕蓋華景を承け、(一五) 騰歩飛塵を躡む。玉を鳴らす豈 樸儒ならんや、(一六) 軾に憑る皆俊民なり。烈心勁秋より厲しく、麗服芳春より鮮なり。余本倦遊の客、(一七) 豪彦舊親多し。(一八) 蓋を傾けて芳訊を承く。(一九) 鳴がんと欲せば當に晨に及ぶべし。一を守るは矜るに足らず、岐路良に遵ふべし。(二〇) 規行曠迹なく、(二一) 矩步豈人に逮ばんや。

- 【一三】長安。京師なり。狹邪は邪曲の路。岐路なり。
- 【一四】伊洛。川の名、長安と洛陽との附近に在り。
- 【一五】朱輪。朱塗の車。
- 【一六】輕蓋。輕き車蓋。華景は日光。
- 【一七】騰歩。歩を擧ぐるること。
- 【一八】樸儒。朴實なる儒士。
- 【一九】軾。車上の横木。俊民は輕俊の士。
- 【二〇】豪彦。朝廷の俊傑。
- 【二一】蓋を傾く。從來面識なき者途上に相會し、車蓋を傾けて相語るなり。一見して相親むをいふ。芳訊は美言なり。
- 【二二】鳴がんと云云。雞は晨に及んで鳴く、人の時に及んで仕ふるに喩ふ。
- 【二三】規行。規則正しき行歩。曠迹は遠迹なり。
- 【二四】矩步。規則正しき歩行。

足を投じて (一四) 緒已に爾り、(一五) 四時必しも循はず。將に (一六) 殊塗の軌を遂げ、子を (一七) 同歸の津に要せんとなす。

【大意】京師に岐路多く、岐路の間貴人の車馬往來頻なり。日光を車蓋に承け、歩を擧げて清塵を躡む。佩玉の人皆朴實の儒士にあらず、乗車の人悉く輕俊の士なり。其心秋霜よりも厲しく、其服春華よりも麗し。余は本遊宦を疲倦せる者なり。既に朝士と親舊なり、今又新知の人あり。美言を以て我に勸めて曰く、宜しく早く進仕し、雞の晨に及んで鳴くが如くなるべし。貞一の道を守り、自ら苦辛を取るは、何ぞ矜るに足らん。世路に遵ひ委曲して俗に従ふべし。行歩の規矩に中る者は、曠遠の道に達すべからずと。余之に答へて曰く、余が足を投ずること既に足下に異れり。余は余が前緒を追ひて進むべし。四時の節を異にし、必ずしも相循はざるが如く、足下と趣を同うせず。途を異にして進み、竟に足下と同じく會合の處に歸せんとなす。

前 緩 聲 歌

(一四〇) 游仙靈族を聚め、(一四一) 會城の阿に高會す。長風萬里に擧り、(一四二) 慶雲鬱として嵯峨たり。(一四三) 處

- 【一四〇】游仙。仙人なり。
- 【一四一】會城。仙人西王母の居る處、崑崙山上に在り。
- 【一四二】慶雲。瑞雲なり。嵯峨は



妃洛浦に興り、(一五) 王韓太華に起る。北のかた (一五) 瑤臺の女を徵し、南のかた (一五) 湘川の娥を要す。 (一五) 肅肅として霄駕動き、(一五) 翩翩として翠蓋 羅る。羽旗 (一五) 瓊鑾を棲ましめ、(一五) 玉衡鳴和を 吐く。(一五) 太容高絃を揮ひ、(一五) 洪崖清歌を發す。 (一五) 獻酬既已に周く、輕舉して紫霞に乗る。轡 (一五) 扶桑の枝に摠へ、足を (一五) 湯谷の波に濯ぐ。 清輝天門に溢れ、慶を垂れて皇家に惠す。

【大意】 仙靈、族を聚めて會城の曲に會合す。時に長風舉り瑞雲起る。慮妃は洛浦より來り王韓は華山より來り、北のかた瑤臺の佚女を召し、南のかた湘川の神女を迎ふ。皆輕車に駕して天上を翔り、旗上に鑾あり衡端に和あり。太容洪崖乃ち絃歌を奏し、酒宴既に畢り、霞に乗りて去らんとし、轡を扶桑の下に整へ、足を湯谷の波に濯げば、光輝天門に溢れ、慶福を降して我が皇家に惠賜す。

長歌行

逝きの天を經るの日、悲しい哉地を帶る川。寸陰 晷を停るなく、尺波豈徒に旋らんや。年の往くこと勁矢よりも迅く、時の來ること亮に 急弦なり。(一六) 遠期克く及ぶこと鮮く、(一六) 盈數固に全きこと希なり。(一六) 容華夙夜に零ち、(一七) 體澤坐に自ら捐つ。(一七) 茲物苟も停め難し、吾が壽安んぞ延ぶるを得ん。(一七) 俯仰逝く將に過ぎんとす、倏忽幾何の間ぞ。慷慨して亦焉にか訴へん、天道良に自然なり。但恨むらくは功名薄く、(一七) 竹帛宣ぶる所なきを。歳の未だ暮れざるに迨及び、長歌して我が閑を承けん。

- 【一五】 瓊鑾。鈴なり。
- 【一六】 玉衡。車の横木。鳴和は鈴。
- 【一七】 太容。黃帝の樂師。
- 【一八】 洪崖。三皇の時の樂師。
- 【一九】 獻酬。杯のやりとりすること。
- 【二〇】 扶桑。日の出づる處にある木。
- 【二一】 湯谷。一本に湯谷に作る、日の出づる處。湯は音ヤウ。陽と通ず。
- 【二二】 雲の盛なる貌。
- 【二三】 慮妃。洛水の神女。
- 【二四】 王韓。王子晉、韓衆の二人、華山に博す。
- 【二五】 瑤臺。仙宮の名。
- 【二六】 湘川。川の名、堯の二女娥皇女英、湘川に墮ちて死し神女となる。要は迎ふること。
- 【二七】 肅肅。車の行く貌。霄駕は天に薄りて行く車。
- 【二八】 翩翩。輕き貌。翠蓋は翡翠の羽を以て作りし車蓋。

吳趨行

【大意】 日に行きて天を經、川は流れて地を繞り、日景暫くも留まらず、川流去つて返らず。年往き時來る。その迅速なること信に急弦の勁矢を發するが如く、人よく上壽の數に滿つるを得る者稀なり。紅顏も忽ちにして衰へ、體澤もいつしか滅ゆ。歲月俯仰の間に過ぎ、人命倏忽にして能く幾時をか保たん。これ天道の自然にして、亦訴ふるに處なし。ただ功名の竹帛に垂るるなきを恨むのみ。願くは老の未だ至らざるに及び、閑暇の日を承け、長歌して自ら慰めん。

- 【一六】 晷。日景なり。
- 【一七】 急弦。強く張りし弓弦。
- 【一八】 遠期。上壽百二十歳をいふ。
- 【一九】 盈數。百二十の數に滿つること。
- 【二〇】 容華。美しき容貌。夙夜は忽ちなり。
- 【二一】 體澤。身の光潤なり。
- 【二二】 茲物。容華體澤を指す。
- 【二三】 俯仰。俯仰なり。
- 【二四】 竹帛。史籍なり。



(一五) 楚妃且く歎ずること勿れ、(一六) 齊娥且く謳ふこと莫れ。四坐竝に清聴し、我が 吳趨を歌ふを聴け。吳趨自ら始あり、請ふ 昌門より起さん。昌門何ぞ 嗟峨たる、(一七) 飛閣通波に跨る。(一八) 重樂游極に承け、(一九) 回軒曲阿に啓く。(二〇) 藹藹として慶雲被り、(二一) 泠泠として祥風過ぐ。山澤 藏育多く、土風清くして且つ嘉し。(二二) 泰伯仁風を導き、仲雍其波を揚ぐ。(二三) 穆穆たる延陵子、灼灼として諸華を光す。王 迹 陽九に隕れ、帝 功 四遐に興る。(二四) 大皇富春より、手を矯げて 世羅を頓ふ。(二五) 邦彦運に應じて興り、祭として春林の葩の若し。(二六) 屬城威士あり、吳邑最も多しとな

【一五】楚妃。楚の樊姬なり、徳を立て勳を著し、名を後世に垂る、因つて楚妃歎を作りて之を歎詠す。  
【一六】齊娥。齊后なり、よく謳歌をなす、人皆取りて曲となす。  
【一七】飛閣。高閣なり。通波は江海なり。  
【一八】重樂。重れるマスガタ。  
【一九】回軒。長窓なり。曲阿は曲屋の角。  
【二〇】藹藹。雲の盛なる貌。慶雲は瑞雲。  
【二一】泠泠。風の聲。  
【二二】泰伯。包容生長すること。  
【二三】穆穆。美なる貌。延陵子は吳の公子季札なり、賢を以て當時に稱せらる。  
【二四】灼灼。明なる貌。諸華は中國なり。  
【二五】陽九。災厄なり。  
【二六】四遐。四方なり。  
【二七】大皇。吳王孫權を指す、孫權は吳の富春の人なり。  
【二八】世羅。世變といふが如し。

す。(二九) 八族未だ侈るに足らず、(三〇) 四姓實に名家、文徳 淳懿を熙め、武功山河に倅し。禮讓何ぞ 濟濟たる、流化自ら 滂沱たり。淑美 窮紀し難し。(三一) 商摧して此歌を爲る。

【二九】八族。八族。張勃吳錄に「陳、桓、呂、寶、公孫、司馬、徐、傅」とあり。  
【三〇】四姓。朱、張、顧、陸なり。  
【三一】窮紀。記録し盡すこと。  
【三二】商摧。はかり定むること。

【大意】楚妃歎を歌ふを休めよ、齊娥謳を唱ふるなかれ。四坐の人願くは我が吳趨行を歌ふを聴け。吳趨は昌門より始まる。昌門の高閣江海に連り、重棋浮棟を支へ、屋角に長窓を開く。瑞雲之を罩め清風之を拂ふ。土風清美にして山澤は萬物を包容生育す。昔泰伯仁讓の風を開き、仲雍之を承げ、季札賢にして中國に輝く。漢王災厄に遇ひて王業頽壞するや、英雄四方に起る。吳王孫權富春より起りて世變を整へ、美士時運に應じて出で、祭然として春花の如し。屬城には皆奇士あり、吳邑最も多し。八族四姓皆わが吳をして重からしむ。相は文徳を昭にし、將は武功を烈にし、禮儀よく行はれ、教化徧く及ぶ。善美なること一一記録し難し。今その大略を量度して此歌を作



塘上行

江籬幽渚に生じ、微芳宜ぶるに足らず。風雲の會を被蒙して、華池の邊に移居す。藻を玉臺の下に發き、影を滄浪の泉に垂る。沾潤既に渥く、根を結ぶこと奥くして且つ堅し。四節逝いて處らず、華繁さも久しく鮮なり難し。淑氣時とともに殞ち、餘芳風に隨つて損つ。天道遷易あり、人理常全なし。男は智の愚を傾くるを懼び、女は衰へて妍を避くるを愛す。微軀の退くを惜まず、但蒼蠅の前むを懼る。願くは君末光を廣めて、妾が薄暮の年を照せ。

【大意】 江籬微香ありと雖も、幽渚に生ず。一たび華池に移りてより、花を玉樓に開き、影を滄浪に垂れ、恩に潤ふこと既に渥く、根を結ぶこと固に堅し。(己微賤なりと雖も、君王に配するを得、永く以て好をなすべきに比す。)四時去つて留まらず、芳華も久しく妍なり難く、佳氣時に因つて落ち、餘香風に隨つて損つ。(色衰へて棄てらるるに比す。)夫れ天人の理俱に一定なし。男女の愛豈又常あらんや。男は智を以て愚を傾く

【二〇】塘上行。婦人衰老して寵を失ひ、塘上に行いて歌を作るなり。  
【二一】江籬。香草なり。婦人自ら喻ふ。  
【二二】風雲の會。兩姓の好に喻ふ。  
【二三】藻。文彩なり、花をいふ。  
【二四】滄浪。水色の清きをいふ。  
【二五】四節。四季なり。  
【二六】淑氣。美貌に喻ふ。  
【二七】妍。美女なり。  
【二八】微軀。己の身をいふ。  
【二九】蒼蠅。讒人に喻ふ。  
【三〇】末光。將に没せんとする日光、衰へたる君寵に喻ふ。

悲哉行

遊客春林を芳とす。春芳客心を傷ましむ。和風清響を飛ばし、鮮雲薄陰を垂る。蕙草淑氣饒く、時鳥好音多し。翩翩たる鳴鳩の羽、啾啾たる倉庚の音。幽蘭通谷に盈ち、長秀高岑に被る。女蘿亦託するあり、蔓葛亦尋るあり。傷ましい哉遊客の士、憂思一に何ぞ深き。目は氣に隨ふ草に感じ、耳は時を詠する禽を悲む。寤寐遠念多く、緬然として飛沈の若し。願くは歸風の響に託し、言を寄せて欽する所に遺らん。

【二三】悲哉行。客游して物に感じ、憂思して作る。  
【二四】通谷。深谷なり。  
【二五】鮮雲。輕雲なり。  
【二六】長秀。草木の長茂せるもの。高岑は高山。  
【二七】女蘿。蔓草の名。  
【二八】寤寐。れてもさめても。  
【二九】緬然。遠き貌。  
【三〇】欽。敬なり。

【三二】時鳥。春鳴く鳥。  
【三三】翩翩。飛ぶ貌。  
【三四】啾啾。鳥聲の貌。倉庚は







鶴首清泚に戯る。(一) 肆は窈窕の容を呈し、路は便娟の子を曜かす。(二) 自來年代を彌り、賢達紀すべからず。(三) 勾踐廢興を善くし、越叟行止を識る。(四) 范蠡江湖に出で、梅福城市に入る。(五) 東方旅逸に就き、梁鴻桑梓を去る。(六) 牽綴して土風を書す。辭殫くれども意未だ已ます。

- 【一】 鶴首。舟の名。泚は清なり。
- 【二】 肆。市なり。窈窕は美好の貌。
- 【三】 便娟。好き貌。
- 【四】 自來。從來なり。
- 【五】 紀。記なり。
- 【六】 勾踐。吳越を伐つ、越王勾踐敗れて會稽山に棲む、後勾踐吳を平ぐ、故に廢興を善くすといふ。
- 【七】 越叟。越公なり、越絶書に「吳越携離に戦ふ、吳王闔閭馬を傷け軍敗れて還り、其讐を復せんと欲し越公に師事し、其術を録す」とあり。
- 【八】 范蠡。勾踐を佐けて吳を平げ、乃ち扁舟に乗り江湖に浮び、名を變じ姓を易へ、齊に適きて鴟夷子と稱す。
- 【九】 梅福。漢の九江の人、少くして長安に學ぶ、元始中王莽政を專にす、福一朝妻子を棄て九江を去る、其後人福を會稽に見し者あり、姓名を變じて吳の市門の卒となる。
- 【十】 東方。名は朔、久しく吳中に在りて書師となる、漢の武帝の時、上書し拜せられて郎となる、宣帝の時郎を棄てて去り以て亂政を避く、後會稽に藥を賣る。旅逸は客となりて放逸すること。
- 【十一】 梁鴻。漢の扶風の人、關を出でて吳に至り、人の爲に賃春す、書十餘篇を著す。桑梓は郷里。

【大意】 六引三調の曲を奏すること、緩にして人皆繁音の起るを待つ。四坐の人請ふ靜かに吾が會吟行を歌ふを聽け。會吟自ら始あり、先づ大禹の功を四海に敷けるより始めん。大禹洪水を治むるや、壺口、冀州を以て初となし、木を斬り道を通じて江の汜に至る。吳の地たる斗の分野にし

て列星天文を炳かし、大海背より横に地理を鎮じ、山峰連りて千仞の高きをなし、水流背向して百里の曲あり。池水稻田に溉ぎ、輕雲松杞を罩む。兩京三都も此土(會稽)の美艷なるに及ばず。高臺中天に聳え、高墻の數丈なるあり。駿馬道に馳せ舟船清波に泛び、市路に美女あり。年を経ること久しきを以て、賢達の士少からず。今之を略記すれば、興廢を善くせる勾踐、行止の理に通ぜる越叟、江湖に出でし范蠡、城市に入りし梅福、旅逸となりし東方朔、故郷を去りし梁鴻の如きは、其傑出せる者なり。文を綴りて此地の土風を記するに、詞盡れども意は窮りなし。

樂府の詩八首

東武吟

鮑明遠

主人且く誼しくすること勿れ、賤子一言を歌はん。僕は本寒郷の士、身を出して漢恩を蒙る。始めに張校尉に隨ひ、占募して河源に到る。後には李輕車を逐ひ、虜を追ひて塞垣を窮む。密塗萬里を互り、寧歲猶ほ七奔

- 【一】 主人。國君を指して言ふ。
- 【二】 賤子。老卒自ら謂ふ。
- 【三】 張校尉。張騫は漢の漢中の人、校尉を以て大將軍衛青に従ひて匈奴を撃つ。
- 【四】 占募。一本召募に作る。

- 【五】 李輕車。漢の李廣、輕車將軍となり、大將軍に隨つて匈奴の右賢王を撃つ。
- 【六】 塞垣。長城なり。
- 【七】 密塗。近途なり。



す。肌力鞍甲に盡き、心思涼温を歴。將軍既  
に【一〇】下世し、【一一】部曲亦存すること罕なり。時事  
一朝に異り、【一二】孤績誰か復た論せん。少壯家を  
辭して去り、窮老還りて門に入る。鎌を腰にし  
て【一三】葵藿を刈り、杖に倚りて【一四】雞狗を收ふ。  
昔は【一五】韞上の鷹の如く、今は【一六】檻中の猿に似  
たり。徒に【一七】千載の恨を結び、空しく百年の  
怨を負ふ。【一八】弃席君の幄を思ひ、【一九】疲馬君の軒  
を戀ふ。願くは【二〇】晉主の恵を垂れ、田子の魂  
に愧ぢざらんことを。

【大意】此れ從軍せる老卒に代り、苦を訴  
へ、郵を望むの詩なり。君公願くは吾が訴を  
聞き給へ。吾は寒村の産にして、出でて漢皇  
の恩を蒙り、張翥、李廣等の名將に従ひ、行

- 【八】寧歲。賊の來寇なき年。七奔は七度命に奔ること。
- 【九】涼温。春秋なり。
- 【一〇】下世。死すること。
- 【一一】部曲。部隊なり。
- 【一二】孤績。人に知られぬ功績。
- 【一三】葵藿。野菜の名。
- 【一四】雞狗。雞豚なり。收は一  
本に牧に作る。
- 【一五】韞上。韞は皮を以て作り  
手を蔽ひて鷹を載するもの。
- 【一六】檻中。檻は歌を入るるチ  
リ。
- 【一七】千載。千年なり。
- 【一八】弃席。棄てられし臥席。  
自ら喩ふ。韓子に「晉の文公  
河に至り令して曰く、籩豆は  
之を捐てよ、席藜は之を捐て  
よ、手足胼胝、面目黧黑なる  
者は之を後にせよと、笞犯之  
を聞きて夜哭す、公曰く寡人

出亡すること二十年、今乃ち  
國に返るを得、笞犯之を聞き  
喜ばずして哭す、意ふに寡人  
の國に反るを欲せざるかと、  
笞犯對へて曰く、籩豆は食ふ  
所以なり、而るに君之を捐つ、  
席藜は臥する所以なり、而る  
に君之を棄つ、手足胼胝面目  
黧黑なるは勞功ある者なり、  
而るに君之を後にす、今臣與  
りて後中に在り、其哀に勝へ  
ず故に哭すと、文公乃ち止むし  
とあり。幄は帳なり。  
【一九】疲馬。又自ら喩ふ。韓詩  
外傳に「昔田子方出でて老馬  
を道に見、喟然として志あり  
以て御者に問うて曰く、此れ  
何馬ぞと、曰くもと公家の畜  
なり、罷れて用をなさず、故  
に出て放つなりと、田子方曰  
く、少くして其力を盡し老い

きて外夷を攘ひ、近途を行くも猶ほ長さ萬里  
に互り、賊の來寇なきも、一歳に七たび奔命  
し、體力戦闘の間に盡き、悲傷の心を抱きて春秋を送れり。やがて將軍死亡し部隊敗亡し、時事一變  
するに及んで、微功爲に賞せられず。老年に至りて家郷に歸り、農牧を以て自ら養ふ。昔少壯の時  
には鷹の韞上に在るが如く、禽獸を攻むるの勇ありしも、今既に老いて猿の檻中に在るが如く、巧  
捷を肆にする能はず。徒に怨恨を抱くのみ。吾れ既に棄席疲馬に同じ、願くは晉主、田子の恵  
を垂れ、我を救郵せられんことを。

出自薊北門行

【三】羽檄邊亭に起り、【四】烽火咸陽に入る。騎を  
徵して【五】廣武に屯せしめ、兵を分ちて【六】朔方  
を救ふ。【七】嚴秋筋竿勁く、【八】虜陣精且つ彊。天  
子劍を按じて怒り、使者遙に相望む。【九】鷹行し  
て石徑に縁り、【一〇】魚貫して飛梁を度る。簫鼓  
【一一】漢思を流し、【一二】旌甲胡霜を被る。疾風【一三】塞

て其身を去るは、仁者はなき  
すと、遂に之を贖ふとあり。

【三〇】晉主。晉の文公。

- 【二】羽檄。兵を徵す文書。邊  
亭は邊地の宿驛。
- 【三】烽火。警を傳ふるノロシ。  
咸陽は京都。
- 【四】廣武。縣名、太原郡に屬  
す。
- 【五】朔方。郡名、邊地に在り。
- 【六】嚴秋。秋氣嚴厲の時。筋  
竿は弓箭なり。
- 【七】虜陣。匈奴の陣。
- 【八】鷹行。鷹列の如くならび  
て進むこと。
- 【九】魚貫。魚を貫きしが如く  
ならびて進むこと。飛梁は浮  
橋なり。
- 【一〇】漢思。漢を思ふこと。



を衝いて起り、砂礫自ら飄揚す。馬毛縮まりて、蝟の如く、角弓張るべからず。時危くして臣節を見、世亂れて忠良を識る。軀を投じて明主に報じ、身死して國殤と爲る。

【三】 旌甲。旗及び甲冑。胡霜は胡地の霜。  
【四】 蝟。城塞なり。  
【五】 蝟。獸名、はりねずみ。

【三】 角弓。角にて飾れる弓。  
【四】 國殤。王事に死せし者をいふ。

【大意】 薊は漁陽郡にして故の燕國なり。其北門を出て行きて功を邊塞に立てんと擬するの詩なり。邊城に羽檄飛び、警報京師に傳はる。乃ち兵を徵して廣武に駐屯せしめ、兵を分ちて朔方を救はしむ。匈奴は寒に慣れ、秋に乗じて益々猛威を振ふ。天子赫怒し、連に使を發して命を傳ふ。從軍の士或は鷹行して石山に登り、或は魚貫して浮橋を渡る。簫鼓の聲を聞いては漢土を思ひ、胡地に臥しては旌甲霜に露ひ、疾風沙礫を捲き、馬毛凍りて蝟の如く、角弓張る能はず。然りと雖も國難に遇ひて始めて忠良の節を見ずを得。願くは身命を棄てて國事に斃れんことを。

結客少年場行

【三】 驄馬。青白雜毛の馬。金絡頭は黄金のオモツラ。  
【四】 雙闕。宮門なり、兩兩相並んで立つ、故に雙闕といふ。  
【五】 表裏。内外といふが如し。  
【六】 皇州。畿内の地。

【三】 驄馬。青白雜毛の馬。金絡頭は黄金のオモツラ。  
【四】 雙闕。宮門なり、兩兩相並んで立つ、故に雙闕といふ。  
【五】 表裏。内外といふが如し。  
【六】 皇州。畿内の地。

【大意】 少年の時任侠の客に結びて遊樂をなし、晩年成ることなくして作れるなり。われ少年の時、肥馬に跨り、錦帶をまとひ、吳鉤を佩び、好んで豪侠の士と交る。忽ち酒杯の間に意を失ひ、遂に鬪争をなす。捕吏我を索むること急なり。因つて劍を負ひ遠行して之を避け、郷を去つて三十年にして復た還る。今高處に登りて四方を望めば、大道平なること水の如く、門闕高く聳え、將相の邸皇宮を挾み、王侯の宅道を夾み、日中には市朝人を以て埋まり、車馬の往來波瀾の如く、富貴の人鐘を撃ち（合圖をなすこと）鼎を陳ねて食ひ、車に駕して相尋求す。我れ獨り零落して成る事なく、不遇にして此憂を抱く。誠に悲むべきなり。

東門行

【大意】 少年の時任侠の客に結びて遊樂をなし、晩年成ることなくして作れるなり。われ少年の時、肥馬に跨り、錦帶をまとひ、吳鉤を佩び、好んで豪侠の士と交る。忽ち酒杯の間に意を失ひ、遂に鬪争をなす。捕吏我を索むること急なり。因つて劍を負ひ遠行して之を避け、郷を去つて三十年にして復た還る。今高處に登りて四方を望めば、大道平なること水の如く、門闕高く聳え、將相の邸皇宮を挾み、王侯の宅道を夾み、日中には市朝人を以て埋まり、車馬の往來波瀾の如く、富貴の人鐘を撃ち（合圖をなすこと）鼎を陳ねて食ひ、車に駕して相尋求す。我れ獨り零落して成る事なく、不遇にして此憂を抱く。誠に悲むべきなり。



傷禽（一）は、弦驚（二）を惡み、倦客（三）は、離聲（四）を惡む。離聲（五）客情（六）を斷ち、賓御（七）皆涕零（八）つ。涕零（九）ちて心斷（十）絶し、將（十一）に去らんとして復た還りて訣る。一息（十二）相知らず、何ぞ況んや異郷（十三）の別をや。遙遙（十四）として征駕（十五）遠く、杳杳（十六）として落日（十七）晚る。居人は閨（十八）を掩ひて臥し、行子は夜中に飯す。野風（十九）秋木を吹き、行子心腸斷つ。梅を食ひて常に酸（二十）きに苦み、葛を衣て常に寒（二十一）きに苦む。絲竹（二十二）徒（二十三）に坐（二十四）に滿（二十五）つるも、憂人顔（二十六）を解（二十七）かず。長歌（二十八）して自ら慰（二十九）めんと欲（三十）すれば、彌（三十一）長恨（三十二）の端（三十三）を起（三十四）す。

【大意】 禽弓に傷けば弦聲を聞くを惡み、客行旅に倦みては、離聲を聞くを惡む。離聲一たび起れば客心忽ち悲み、送客僕御亦皆涙を垂る。夫れ涕垂れて心斷絶す。去らんと欲して忍びず。還りて更に別辭を述ぶ。暫時の別すら尙ほ悲んで自ら知らざる事此の如し。況んや他郷に於て遠く別るるをや。既に去りて征途遠く、日將に暮れんとす。家人の寢に就く頃吾獨り飯を食ひ、野風の吹くを聞きて獨り心腸を斷つ。吾れ梅を食ひて酸（三十五）きに苦み、葛衣（三十六）を著て寒（三十七）きに苦むが如く、衣食共に其所を得ず。絲竹の樂なきにあらざるも、吾が情を樂（三十八）ましむるに足らず。長歌して自ら慰めんと欲すれば、ただ長恨の端を催すのみ。

苦熱行

- 【四】 弦驚。弦聲の發すること。
- 【五】 離聲。別離の歌。
- 【六】 賓御。送客と馭者。
- 【七】 一息。暫時なり。
- 【八】 遙遙。行く貌。征駕は行車なり。
- 【九】 杳杳。暮るる貌。
- 【十】 行子。行客なり。

赤阪（一）西阻（二）に横（三）はり、火山（四）南威（五）に赫（六）なり。身熱（七）くして頭且（八）つ痛（九）み、鳥墮（十）ちて魂來歸（十一）す。湯泉（十二）雲潭（十三）に發（十四）し、焦煙（十五）石折（十六）に起（十七）る。日月（十八）恆（十九）に昏（二十）きあり、雨露（二十一）未だ常（二十二）て晞（二十三）かず。丹蛇（二十四）百尺（二十五）に踰（二十六）え、玄蜂（二十七）十圍（二十八）に盈（二十九）つ。沙（三十）を含（三十一）んで、流影（三十二）を射（三十三）、吹蠶（三十四）行暉（三十五）を痛（三十六）ましむ。障氣（三十七）書體（三十八）に熏（三十九）じ、菑露（四十）夜衣（四十一）を沾（四十二）す。饑（四十三）援（四十四）も下（四十五）り食（四十六）するなく、晨禽（四十七）も敢（四十八）て飛（四十九）ばず。溼（五十）に毒（五十一）するすら尙ほ多く死（五十二）す。瀘（五十三）を渡りて寧（五十四）る具（五十五）に腓（五十六）まんや。生軀（五十七）死地（五十八）を蹈（五十九）み、昌志（六十）禍機（六十一）に登（六十二）る。戈船（六十三）榮（六十四）既に薄（六十五）く、伏波（六十六）賞亦微（六十七）なり。爵（六十八）輕（六十九）きも君尙ほ惜（七十）む、士（七十一）の重（七十二）んずる所安（七十三）んぞ希（七十四）ふべけん。

【大意】 南方瘴癘の地に往き、節を盡して征伐し、然も國家の之を賞すること甚だ薄きをいふ。西方に赤土身熱の阪あり。南方に火山の滅えざるあり。此を過ぐれば身熱し頭痛み、鳥死して魂獨り歸る。湯泉山に流れ焦煙岸に起り、

- 【一】 赤阪。西方の山。
- 【二】 西阻。南方の地。
- 【三】 南威。南方の地。
- 【四】 火山。山泉なり。
- 【五】 雲潭。熱氣なり。石折は石岸。
- 【六】 丹蛇。赤き蛇。
- 【七】 玄蜂。黒き蜂。
- 【八】 流影。人影なり。搜神記に「物あり江水に處る、其名を滅といふ、一に短狐といふ、能く沙を含みて人を射、中る所の者頭痛發熱し、劇しき者は死に至る」とあり。
- 【九】 吹蠶。毒蟲の名。行暉は行人の光。
- 【十】 障氣。一本に瘴氣に作る。
- 【十一】 菑露。南方熱地の川の名。
- 【十二】 夜衣。壯心なり。
- 【十三】 昌志。漢書に「歸義侯嚴戈船將軍となり零陵を出で離水を下る」とあり。
- 【十四】 伏波。後漢書に「馬援を拜して伏波將軍となし交趾を撃たしむ」とあり。
- 【十五】 士の重。節に死すること。



熱氣上騰して日月常に暗く、雨露冬夏常に乾かず。赤蛇黒蜂あり。其大なること百尺十圍に餘り、水中に短狐あり、沙を含んで人を射、吹蠱ありて人を害し、瘴氣南露衣體に熏じ、猿鳥も之を畏れて近づかず。昔秦人涇水に毒を流せるすら、多く人を殺すを得たり。況んや瀘水を渡るをや。人皆死に至る。管に病むのみにあらざるなり。ああ生軀と壯志とを以て此の死亡の地を踏ましむ。何ぞ禍の機兆とならざらん。戰士苦熱の状かくの如し。然も國家の之を賞すること甚だ薄し。夫れ君の輕んずる所のものは爵なり。然も君尙ほ之を惜めり。何ぞ戰士をして身命を棄てて節に死せしむるを得んや。

白頭吟

直きこと 朱絲の繩の如く、清きこと玉壺の氷の如し。何ぞ 宿昔の意に慙ぢん、猜恨坐に相仍る。人情恩舊を賤み、世議衰興を逐ふ。(七) 毫髮一たび瑕をなせば、丘山も勝ふべからず。苗を食ふは實に 碩鼠、白を玷すは信に 蒼蠅。鳧鵠遠くして美を成し、薪芻

- 【七】朱絲。琴瑟の朱絃なり。
- 【六】宿昔。昔時なり。
- 【六】猜恨。疑恨なり。
- 【七】世議。世人の批評。
- 【七】毫髮。些細なり。
- 【七】碩鼠。大鼠なり。讒人に比す。詩經に「碩鼠碩鼠、我が苗を食ふなかれ」とあり。
- 【七】蒼蠅。讒人に比す。詩經

に「蒼蠅の蟲たる、白を汚して黒からしむ」とあり。  
【七】鳧鵠。水鳥の名。韓詩外傳に「田饒、魯の哀公に事へて察せられず、哀公に謂つて曰く、雖に五徳あり、君猶ほ日に淪して之を食ふは、其の從來する所のもの近きを以てなり、黄鵠は一擧千里、君の

前は陵がる。申黜けられて褒女進み、班去りて趙姬昇る。周王日に淪惑し、漢帝益々嗟稱す。心賞猶ほ恃み難し、貌恭豈憑み易からんや。古來共に此の如し、君のみ獨り膺を撫つにあらず。

【大意】此れ棄婦の自ら傷むに擬せる詩なり。吾れ清直にして昔時の意に慙ぢざるも、

夫君の心 忽ち疑恨を生ず。人には舊を厭ふの情あり、世評は身の盛衰に應じて異なる。故に些細の過失あれば忽ち丘山の太となる。夫君の心の移れるも、畢竟この讒人の致す所なり。遠き者は貴ばれ、前者は後者の輕侮を受くるは世の習なり。故に幽王は申后を黜けて褒姒を愛し、日に以て沈溺迷惑し、成帝は班婕妤を去りて趙飛燕を寵し、益々以て嗟嘆稱美す。深心相賞するすら、尙ほ恃み難し。ただ外貌に敬美するは、豈憑むに足らんや。古來皆此の如し。胸を拊ちて棄てられしを悲む者、獨り我のみにあらざるなり。

放行歌

- 園地に止り君の梁稻を食ひ、この五徳なくして之を貴ぶは、其の從來する所のもの遠きを以てなり云云」とあり。
- 【七】薪芻。芻は草なり。漢書に「汲黯武帝に謂つて曰く、陛下の羣臣を用ふるは薪を積むが如く、後れて至る者上に居ると」とあり。
- 【七六】申。毛詩の序に「幽王申
- 【八〇】君。已を指して言ふ。

女を取りて后となし、褒姒を得て申后を黜く」とあり。  
【七】班。班婕妤なり。漢の成帝班婕妤を去りて趙飛燕を寵す。  
【七六】心賞。心に深く相賞すること。  
【七九】貌恭。外貌のみ恭敬すること。



【八二】 蓼蟲は葵莖を避け、苦きに習ひて非を言はず。小人は自ら 齷齪たり、安んぞ 曠士の懐を知らんや。雞 洛城の裏に鳴き、禁門平旦に開く。冠蓋縦横に至り、車騎四方より來る。素帶長臙を曳き、華纓遠埃を結ぶ。日中安んぞ能く止まん、鐘鳴りて猶ほ未だ歸らず。夷世逢ふべからず、賢君信に才を愛す。明慮 天より斷じ、外の 嫌猜を受けず。一言 珪爵を分かち、片善 草萊を辭す。豈伊れ白璧の賜のみならんや。將に 黄金の臺を起さんとす。今 君何の疾あり、路に臨んで獨り 遲廻する。

【大意】 小人の曠士の心を知らざるを慨するなり。小人の名利に奔競して曠士の心を知らざるは、猶ほ蓼蟲の苦に習ひて甘菜あるを知らざるが如し。彼の小人は、雞鳴いて禁門の開くを待ち、車騎を連ねて四方より來り、帶を長風に曳き、冠纓を遠塵に結び、晚鐘を聞くも猶ほ未だ歸らず、名利に齷齪たること此の如し。然も自ら恥づる。

- 【八二】 蓼蟲。蓼は苦菜、たて。葵莖は甘菜。
- 【八三】 齷齪。名利に奔競する貌。
- 【八四】 曠士。達人なり。
- 【八五】 洛城。洛陽城。
- 【八六】 禁門。宮門なり。
- 【八七】 冠蓋。衣冠と車蓋。
- 【八八】 素帶。大夫の帶。長臙は長風。
- 【八九】 華纓。美しき冠の紐。遠埃は遠方より飛び來る塵。
- 【九〇】 天。君を指して言ふ。
- 【九一】 嫌猜。嫌疑なり。
- 【九二】 珪爵。珪は公侯の執る所の玉。
- 【九三】 草萊。草野なり。
- 【九四】 黄金臺。燕の昭王、黄金臺を築き、千金を臺上に置き以て天下の士を延く。
- 【九五】 君。曠士の仕へざる者を指して言ふ。
- 【九六】 遲廻。躊躇して仕へざること。

を知らず。却つて我に謂ひて曰く、今や太平にして復た逢ふべからざるの時なり。且つ天子誠に賢才を愛す。故に天子の明慮によりて我等を登庸し、外間の嫌疑を容れず。一言半善の君意に合ふものなれば、珪爵を賜ひ草野を出でて仕へしむ。ただに白璧を賜ふのみにあらず、又黄金臺を起して之を待たんとす。君何を苦んで躊躇して仕へざると。

升天行

家世 關輔に宅り、帶に勝へて王城に官す。備に 十帝の事を聞き、兩都の情を委曲にす。物の興衰を見るに倦み、驟俗の屯屯平を觀る。翩翩として 廻掌に類し、悦惚として朝榮に似たり。窮塗短計を悔い、晚志長生を重んず。師に従つて遠岳に入り、友を結んで仙靈を事とす。五圖金記を發し、九籥丹經を隱す。風餐松宿に委し、雲臥天行を恣にす。霞を冠して 綵閣に登り、玉

- 【九七】 升天行。仙を學ぶをいふ。
- 【九八】 關輔。畿内なり。關は關中。右扶風。左馮翊。京兆を三輔といふ。
- 【九九】 帶に勝へ。冠帶に勝ふるの時。
- 【一〇〇】 十帝。前後漢ともに十餘帝。
- 【一〇一】 兩都。漢の西京長安、東京洛陽。
- 【一〇二】 屯屯。難易なり。
- 【一〇三】 廻掌。掌を運らすこと。
- 【一〇四】 悦惚。速なる貌。朝榮は朝花。
- 【一〇五】 窮塗。窮途なり。短計は拙謀。
- 【一〇六】 晚志。晩年の志。
- 【一〇七】 五圖。仙書なり。五岳眞形圖。金記も仙書の名、太清金匱記。
- 【一〇八】 九籥。籥は書を藏する管なり。仙經に九轉金液丹法あり、故に九籥といふ。
- 【一〇九】 綵閣。仙居なり。



を解いて 椒庭に飲む。暫く遊んで萬里に越え、近く別れて 數千齡。鳳臺還駕なく、簫管遺聲あり。何時にか 爾が曹と與に、腐を啄んで共に腥を呑まん。

【大意】 われ世世京畿の間に住み、冠帯するに及んで王城に仕官す。兩漢の情事盡く之を聞知し、屢々世の盛衰難易を見る。その倏忽なること廻掌の反覆するが如く、朝花の開落するに似たり。是に於て從來の拙謀を悟り、長生を希ふの志を立て、遠く山中に入りて仙道を修め、日夕仙書を侶とし、風雲の之く所に任せて、或は松下に宿し或は天上を行き、霞を冠し玉珮を解いて、仙居に玉醴を飲み、一擧千萬里、一別數千年。ただ鳳臺を現世に留め、簫聲永く絶えざるのみ。又腐を食ひ腥を呑むの俗輩と相伍せず。

【一〇】椒庭。仙居なり。

【一一】數千齡。數千年。

【一二】鳳臺。列仙傳に「籟史は秦の穆公の時の人なり、よく簫を吹く、穆公女あり弄玉と號す、公遂に以て妻す、遂に弄玉に教へて鳳鳴をなさしむ。

【一三】籟管。樂器の名。

【一四】爾。世俗の人を指す。

居ること數十年、鳳凰來りて其屋に止る、爲に鳳臺を作る、夫婦其上に止り下らざることを數年、一旦皆鳳凰に隨つて飛び去る」とあり。

【一三】籟管。樂器の名。

【一四】爾。世俗の人を指す。

鼓吹曲

謝玄暉

江南佳麗の地、金陵帝王の州。逶迤として淶水を帶び、迢遞として朱

【一】鼓吹曲。軍樂なり。玄暉の集に「隋王の教を奉じ古入朝曲を作る」とあり。

【二】金陵。地名。

樓を起す。飛甍馳道を夾み、垂楊御溝を蔭ふ。筋を凝らして高蓋を翼り、鼓を疊ねて華輶を送る。雲臺の表に獻納すれば、功名良に收むべし。

【大意】 金陵は佳麗の地にして、帝王の居るべき處なり。淶水遠く繞り樓閣高く聳え、屋檐馳道を夾み、楊柳溝渠に垂る。今鼓を鳴らし簫を吹きて、王が入朝の車を送る。往きて忠直を天子に獻納せば、其功名天子の收録する所となるべし。

- 【三】逶迤。長き貌。淶水は清き川流。
- 【四】迢遞。高き貌。朱樓は朱塗の樓閣。
- 【五】飛甍。高き屋檐。馳道は天子の御成道。
- 【六】御溝。宮城を繞る溝。
- 【七】筋。簫なり。高蓋は車蓋。
- 【八】華輶。車の輦。
- 【九】雲臺。天子の宮。

挽歌

挽歌の詩

繆熙伯

生時國都に遊び、死没して中野に奔らる。朝に高堂の上を發し、暮に黃泉の下に宿す。白日虞淵に入り、車を懸けて駟馬を息はしむ。造化神明なりと雖も、安んぞ能く復た我を存せ

【一】挽歌。喪を送る詩なり。柩を挽く者をして之を歌はしむ。

【二】繆熙伯。名は襲、字は熙伯、魏の東海蘭陵の人。

【三】虞淵。日の入る處。

【四】車を懸け。淮南子に「日暘谷を出て悲泉に至り、爰に其馬を息はしむ、是を懸車となす、虞淵に至る、是を黃昏



ん。形容稍 歌滅せば、齒髮行ふ當に墮つべし。古より皆然るあり、誰か能く此を離るる者ぞ。

【大意】 生時には都邑に遊樂するも、死すれば草野の間に棄てらる。即ち朝に高堂の上を發し、夕に黄泉の下に宿するなり。是れ恰も日の虞淵に入り、車を懸け馬を息はしむるが如し。造化の理は神明なりと雖も、焉んぞ能く我を長存せしむるを得んや。形容稍衰ふれば、齒髮程なく抜け墮ち、遂に死に入るなり。古より皆然らざるはなし。誰か能く此理に漏るる者あらん。

挽歌の詩三首

陸士衡

ト擇休貞を考へ、嘉命咸茲に在り。夙に駕して 徒御を警め、轡を結んで 重基を頓す。龍輓廣柳を被ひ、前驅輕旗を矯ぐ。殯宮何ぞ嘈嘈たる、哀響 中關に沸く。中關且く謹しうする勿れ、我が 薤露の詩を聽け。死生各々 倫を異にす。 祖載當に時あるべし 爵

- 【一】 卜擇。卜筮によりて葬地を擇ぶこと。休貞は貞吉。
- 【二】 嘉命。善美なる命。
- 【三】 徒御。僕御なり。
- 【四】 重基。山なり。頓は上下すること。
- 【五】 帷輓。輓は蒙なり、傍に在る帷といひ、上に在るを輓といふ、龍を畫きし帷。廣柳は棺車なり。
- 【六】 殯宮。天子崩じて葬送するまで暫く靈柩を置く宮殿。嘈嘈は衆哭の聲。
- 【七】 中關。殯宮の門。
- 【八】 薤露。喪詩なり。
- 【九】 倫。理なり。

を 兩楹の位に含き、殯を啓いて 靈輓を進む。 飲餞して 觴擧ぐるなく、出宿して歸ること期なし。 帷棺曠しく影を遺し、棟宇子と辭す。 周親咸奔湊し、友朋遠きより來る。 翼翼として輕軒を飛ばし、駸駸として素騏に策うつ。 轡を按じて 長薄に遵ひ、子に泣けども子知らず。 重櫬の 側に歎息し、我が 疇昔の時を念ふ。 三秋猶ほ收むるに足る。 萬世安んぞ思ふべき。 没に殉して身亡し易し、子を 殺すは能くする所にあらず。 言を含めば言 嗟咽し、涕を揮へば涕 流離たり。

- 【一〇】 祖載。柩車を移して葬行の始をなすこと。
- 【一一】 兩楹。二本の圓柱。葬るに先だち柩を兩楹の間に置き酒食を奠するを禮とす。
- 【一二】 靈輓。柩車なり。
- 【一三】 飲餞。離杯を擧ぐるること。
- 【一四】 帷棺。帳帷及び臥席。
- 【一五】 子。死者を指して言ふ。
- 【一六】 周親。至親の人。奔湊は來り集ること。
- 【一七】 翼翼。車の輕き貌。輕軒は輕車。
- 【一八】 駸駸。馬の奔る貌。素騏は白馬。
- 【一九】 長薄。草木の叢生する處を薄といふ。
- 【二〇】 長夜の臺。墳墓をいふ。
- 【二一】 重櫬。棺なり。
- 【二二】 疇昔。生前なり。
- 【二三】 三秋。三年なり。詩經に「一日見ずんば三秋の如し」とあり。
- 【二四】 殺。一本に救に作る。
- 【二五】 嗟咽。涙にむせぶこと。
- 【二六】 流離。涙の流るる貌。

【大意】 卜筮して葬地を擇び、其の貞吉を考ふるに、吉命此土に在り、かくて葬地を定め、早く僕御を戒めて山丘を上下し、以て墳穴を掘り、帷帳を以て棺車を掩ひ、前驅旗を擧げて葬列を促す。然も殯宮の中には尙ほ衆哭の聲嘈嘈たり。我れ因つて挽歌を歌ふ。夫れ死生は理を異にす。永く歎



くも又詮なし。葬行當に始まらんとす。柩を兩楹の間に置き、酒食を奠し終れば、殯宮を開いて柩車を進む。死車能く杯を擧ぐるなく、一たび去りて復た還らず。ただ帷帳を留むるのみにして、舊居復た見るべからず。親戚朋友遠く來りて相送り、輕車を飛ばし白馬に鞭うち、長林に循ひ行き、死者を墳墓の中に送る。呼べども答へず泣けども知らず。ただ棺側に嘆息して、生時の交游を念ふのみ。三年相見ざるの念は、猶ほ收むるに足る。萬世永く絶ゆるは、何ぞ思ふに堪へんや。死者に殉するは甚だ易きも、死者を救ふは人力の能くする所にあらず。言はんと欲するも言咽んで出でず、涙を拭へば涙潸然たり。

流離たり親友の思、惆悵して神泰からず。素驂輻軒を佇ち、玄駟飛蓋を驚す。哀鳴殯宮に興り、廻遲して野外に悲む。魂輿寂として響なく、但冠と帶とを見る。物を備ふること平生に象たり、長旌誰が爲にか旆する。悲風行軌を微め、傾雲流瀟を結ぶ。策を振げて靈丘を指し、駕して言に此れより逝かん。

【大意】親友の死を悲みて心安からず。馬を馳せて葬を送る。殯宮に啼泣して野外に低回すれば、

- 【一七】素驂。白馬なり。輻軒は柩車。
- 【一八】玄駟。黒馬なり。飛蓋は車蓋。
- 【一九】廻遲。躊躇なり。
- 【二〇】魂輿。柩車なり。
- 【二一】長旌。銘旗なり。
- 【二二】行軌。行車なり。
- 【二三】流瀟。行車の蓋なり。
- 【二四】靈丘。墓なり。

柩車寂として聲なく、ただ冠帶の垂るるを見る。服用の物生時に變らざれども、銘旗は正に親友の死を語れり。悲風吾が車を止め、傾雲吾が車蓋に交り、墳墓を指して葬を送る。重阜何ぞ崔嵬たる、玄廬其間に竄る。旁薄として四極を立て、穹隆として蒼天に放ふ。側に聽く。陰溝の湧くを、臥して觀る。天井の懸るを。廣宵何ぞ寥廓たる、大暮安んぞ晨くべき。人往いて反歲あり、我行いて歸年なし。昔は四民の宅に居り、今は萬鬼の鄰に託す。昔は七尺の軀たり、今は灰と塵となる。金玉素より佩ぶる所、鴻毛今振らず。豐肌虯蟻に饗し、妍骸永く夷浪す。壽堂螭魅を延き、虛無自ら相賓す。螻蟻爾何をか怨む。螭魅我れ何の親ある。心を拊ちて茶毒を痛む。永歎爲に陳ぶるなし。

【大意】わが墓は高岡の間に在り、穴中に天地を象り、側に陰溝の湧くを聴き、臥して天象の懸る

- 【三五】重阜。高岡なり。崔嵬は高き貌。
- 【三六】玄廬。墓なり。
- 【三七】旁薄。四方に廣がること。地の形なり。四極は四方。
- 【三八】穹隆。弓形をなすこと。天の形なり。
- 【三九】陰溝。墓穴の中に作れる溝。
- 【四〇】天井。天象なり。墓穴の中に作るなり。
- 【四一】廣宵。墓穴をいふ。寥廓は深空なり。
- 【四二】大暮。墓穴をいふ。
- 【四三】反歲。還る年。
- 【四四】四民。士農工商。
- 【四五】鴻毛。輕き物の稱。
- 【四六】虯蟻。蟲の名。
- 【四七】妍骸。美姿なり。夷浪は消滅なり。
- 【四八】壽堂。祭祀の處。螭魅は邪鬼なり。
- 【四九】茶毒。苦痛なり。



を觀る。一たび穴中に入りては又出づべからず。生人の往く者は皆其家に還れども、死者は一たび去りて歸り生くる能はず。昔は生きて人間に在り、今は死して萬鬼と鄰す。生きては金玉を佩びて重しとせず、死しては鴻毛の輕きも尙ほ擧ぐる能はず。美好の姿を以て螻蟻の餌食となし、祭祀の場には邪鬼と虚無と相延いて賓主となる。ああ螻蟻は何の怨ありてか我を食ふ。邪鬼何の親ありて我に就く。わが胸中の苦痛一一述べ盡し難し。

挽歌の詩

陶淵明

荒草何ぞ 茫茫たる、白楊亦蕭蕭たり。嚴霜九月の中、我を送りて遠郊に出づ。四面人居なく、高墳正に 嶮嶮たり。馬爲に天を仰いで鳴き、風爲に自ら 蕭條たり。幽室一たび已に閉ぢ、千年復た朝あらず。千年復た朝あらず、賢達奈何ともするなし。向來相送りし人、各々已に其家に歸る。親戚餘悲あり、他人亦已に歌ふ。死去何の道ふ所ぞ、體を託して山阿に同じ。

【大意】 墳墓の在る所を見れば、荒草茫茫として白楊蕭蕭たり。悲秋嚴

- 【一】 茫茫。廣大なる貌。
- 【二】 白楊。木の名、墳墓に植
- 【三】 蕭蕭は風の吹く聲。
- 【四】 我。死者自ら謂ふ。
- 【五】 蕭條。淋しき貌。
- 【六】 嶮嶮。墳墓なり。
- 【七】 向來。先刻といふが如し。
- 【八】 山阿。山陵なり。

霜の時、親戚朋友我を送りて此處に来る、四方に人家を見ず、ただ高墳の聳ゆるのみ。馬も之が爲に悲鳴し、風も之が爲に蕭條たり。吾が墓一たび閉ぢて、復た生くべからず。賢達之士も如何ともすべからず。向に我を送りし者皆其家に歸り、我が死を悲しんで長歌す。死何ぞ道ふに足らん、身を山陵に託して同じく土に化するのみ。

雜歌

荆軻の歌

燕の太子丹、荆軻をして 秦王を刺さしむ。丹 易水の上に祖送す。高漸離筑を撃ち、荆軻歌ひ、宋如意之に和す。曰く、風蕭蕭として易水寒し。壯士一たび去りて復た還らず。

【大意】 われ此地を去らんとすれば、風蕭蕭として物凄く、易水の流特に寒きを覺ゆ。われ一たび去りては事の成敗に拘はらず、生還を期せざるなり。

- 【一】 荆軻。衛の人なり、燕の太子の爲に秦王を刺し、克たずして秦に誅せらる。
- 【二】 秦王。秦の始皇帝。
- 【三】 易水。川の名。祖送は送別すること。
- 【四】 高漸離。人名。筑は樂器の名。
- 【五】 宋如意。人名。
- 【六】 蕭蕭。風の聲。
- 【七】 壯士。軻自ら謂ふ。



漢の高祖の歌

高祖 還りて沛を過り、留りて沛宮に 置酒し、悉く 故人父老子弟を召し、酒を佐けしむ。沛中の 兒を發して百二十人を得、之に歌を教ふ。酒酣なるとき 上筑を擊ちて自ら歌つて曰く、  
 大風起りて 雲飛揚す。威海内に加はりて故 郷に歸る。安にか猛士を得て四方を守らしめ ん。

【大意】 我れ起ちて風の雲を吹拂へるが如く 世の禍亂を平定せり。吾が威今や海内に徧く、ここに錦を着て故郷に歸るを得たり。願くは勇猛の 士を得て、四方を守禦せしめんことを。

扶風歌

劉越石

朝に 廣莫の門を發 し、暮に 丹水の山

【一】 扶風歌。扶風は地名、蓋し古曲なり。越石之に擬して

【二】 廣莫。洛陽城門の名。

【三】 丹水。川の名、その水源の山なり、故に丹水の山とい

自ら喻ふるなり。

に宿す。左手に 繁 弱を彎り、右手に 龍淵を揮ふ。顧瞻 して宮闕を望み、俯 仰して 飛軒に御

【四】 繁弱。弓の名。  
 【五】 龍淵。劍の名。  
 【六】 顧瞻。顧望なり。  
 【七】 飛軒。廊宇なり。  
 【八】 烈烈。風の聲。

【九】 泠泠。水の聲。澗は溪谷なり。  
 【一〇】 哽咽。涙にむせぶこと。  
 【一一】 摧藏。憂傷なり。  
 【一二】 麋鹿。麋も鹿の類。  
 【一三】 薇蕨。草の名。わらび。

【一四】 徒侶。從者なり。  
 【一五】 夫子。孔子なり。  
 【一六】 李。漢將李陵なり。  
 【一七】 漢武。漢の武帝。  
 【一八】 此曲。此歌なり。

る。鞍に據りて長く歎息し、涙下りて流泉の如し。馬を長松の下に繋ぎ、鞍を高岳の頭に發す。  
 烈烈として悲風起り、泠泠として澗水流る。手を揮つて長く相謝し、哽咽して言ふ能はず。浮雲 我が爲に結び、歸鳥我が爲に旋る。家を去りて日已に遠し。安んぞ存と亡とを知らん。窮林の中に慷慨し、膝を抱いて獨り 摧藏す。(三) 麋鹿我が前に遊び、猿猴我が側に戯る。資糧既に乏盡し、(四) 薇蕨安んぞ食ふべけん。嚮を攬りて 徒侶に命じ、絶巖の中に吟嘯す。君子の道微なれば、(五) 夫子も故に窮するあり。惟れ昔 李期を薦り、寄せて匈奴の庭にあり。忠信反りて罪を獲、(六) 漢武明されず。我れ 此曲を競はんと欲すれば、此曲悲くして且つ長し。棄て置いて重ねて陳ぶるなけん。重ねて陳ぶれば心をして傷ましむ。

【大意】 朝に洛陽の城門を發し、暮に丹水山に宿し、左手に弓を執り、右手に劍を携へ、往きて



胡虜を掃滅せんとす。高廊に登りて宮闕を望み、馬に跨りて高岳を發す。時に悲風烈烈として湖水冷冷たり。手を揮つて別れんとすれば、涙に咽んで聲出でず。雲鳥亦吾が宮闕を戀ふの情を助くるが如し。家を去りて已に遠く、家人の存亡亦知るに由なし。林中に膝を抱いて獨り長歎すれば、麋鹿猿猴遊戯して吾が心の悲しきを知らず。食物既に盡くれども吾れ伯夷にあらず、何ぞ薇蕨を食ふべけんや。從者を顧みて吟嘯す。君子の道消するの時に當りては、孔子すら猶ほ窮厄せり。窮厄何ぞ顧慮するに足らん。昔李陵は期を誤りて匈奴に捕へられ、固く忠信の節を執りしも、武帝其の志を明にせずして其親族を誅せり。誠に慨嘆すべきなり。我れ此歌を歌はんとすれば、心悲傷して歌ふべからず。

中山王孺子妾の歌

陸 韓 卿

如姬臥内に寝ね、班婕坐して車を同うす。洪波飲帳に陪し、林光秦餘に宴す。歲暮れ寒飈及び、秋水芙蓉に落つ。子瑕後駕を矯り、安陵前魚に泣く。賤妾終に已ぬるか

- 【一】 中山王。漢の中山靖王噲なり。孺子妾は王の宮人なり。
- 【二】 如姬。魏王の寵姫。
- 【三】 班婕。班婕妤なり、漢の成帝の寵姫。
- 【四】 洪波。趙閼子の臺の名。
- 【五】 林光。秦の殿の名。漢之に因る、故に秦餘といふ。
- 【六】 寒飈。寒風なり。
- 【七】 芙蓉。芙蓉なり。

な 君子定めて焉にか如かん。

【大意】 昔如姬は常に魏王の臥内に入し、班婕妤は成帝と車を同うし、洪波臺の宴に侍し、林光殿の飲に陪し、一時の寵幸を專にせり。然も年漸く老い色稍衰ふるに至りて則ち棄てらる。これ孺子瑕、安陵の寵の衰へんことを悲みし所以なり。我れ亦色衰へて將に棄てられんとす。君王の心果して何人に移り行かんを知らず。悲しいかな。

- 【八】 子瑕。韓子に「孺子瑕衛君に寵あり、衛國の法に窃に君の車に駕する者は則る。孺子瑕の母病む、人夜孺子瑕に告ぐ、孺子瑕矯りて君の車に駕し以て門を出づ、衛君聞きて之を賢として曰く、孝なるかな母の爲の故に刑罪を犯せりと」とあり。
- 【九】 安陵。戰國策に「魏王龍陽君と船を共にして釣る、龍陽君十餘魚を釣り得、之を棄てて泣下る、王曰く安んぜざる所あるかと、對へて曰く、

臣始め魚を得て甚だ喜ぶ、後得ると益多くして、前に得し所を棄てんと欲す、今臣の凶惡を以て枕席を拂ふを得、四海の内其れ美人甚だ多し、臣の幸を王に得るを聞かば、畢く裳を棄げて王に趨らん、臣も亦曩に得し所の魚に同じ、亦將に棄てられんとすと」とあり。今安陵となすは龍陽の誤なり。

【一〇】 君子。孺子妾、中山王を指して言ふなり。



卷の第十五

詩己

雜詩

古詩十九首

行き行いて重ねて行き行き、君と生別離す。相去ること萬餘里、各々天の一涯に在り。道路阻りて且つ長し。會面安んぞ知るべけん。胡馬北風に依り、越鳥南枝に巢ふ。相去る日に已に遠く、衣帶日に已に緩し。浮雲白日を蔽ひ、游子顧返せず。君を思へば人をして老いしむ。歲月忽として已に晩る。棄捐復た道ふことなけん、努力して餐飯を加へよ。

【大意】 此れ遠行の夫を思ふ詩なり。吾が夫は遠行して止まず、吾ここに生離別の悲に遇ふ。今や相去ること萬里なれば、面會の期も知るべからず。夫は北に在りて胡馬の北風に依望するが如く、吾は南に在りて越鳥の南枝に巢ふが如し。日

- 【一】 君。夫をいふ。
- 【二】 胡馬。北方胡地に産する馬。
- 【三】 越鳥。南方越國に産する鳥。
- 【四】 浮雲云。夫の惑ふ所あるに喩ふ。
- 【五】 游子。遠行せる夫を指す。
- 【六】 棄捐。夫に棄てられし。

を經るに隨ひて吾身益々瘦するも、夫は他の美女に惑へるにや、一たび去りて復た返らず。之を思へば吾をして益々衰老せしむ。況んや歳將に暮れんとするをや。然れども我が身の棄てられしは敢て言ふに足らず。ただ偏に夫の攝養を加へ疾病に侵されざらんことを望むのみ。

青青たる河畔の草、鬱鬱たる園中の柳。盈盈たる樓上の女、皎皎として窓牖に當る。(一) 娥娥たる紅粉の粧、(二) 纖纖として素手を出す。昔は倡家の女たり、今は蕩子の婦となる。蕩子行いて歸らず、空牀獨り守り難し。

【大意】 河畔には春草萋萋たり。園中には新柳萋萋たり。樓上に美女あり。窓に憑りて之を觀る。紅粉の粧をこらし、玉の如き纖手を露せり。此女はもと遊女にして今は遊冶郎の妻たるも、夫は遠行して歸らざるを以て獨り空閨を守る能はず。故に冶容をなして、人を誘はんとするなり。

青青たる 陵上の柏、磊磊たる澗中の石。人天地の間に生れ、忽として遠行の客の如し。斗酒相娛樂し、聊か厚しとして薄しとなさず。車を驅りて駑馬に策うち、宛と洛とに遊戲す。洛中何ぞ

- 【七】 鬱鬱。茂盛の貌。
- 【八】 盈盈。容貌充美の貌。
- 【九】 皎皎。白き貌。
- 【一〇】 娥娥。美なる貌。紅粉はベニカシロイ。
- 【一一】 纖纖。細くしなやかなる貌。素手は白き手。
- 【一二】 倡家。遊女屋。
- 【一三】 蕩子。遊冶郎。
- 【一四】 空牀。空閨なり。
- 【一五】 陵上。丘上なり。
- 【一六】 磊磊。衆石の貌。澗は溪流。
- 【一七】 宛。縣名、後の南陽なり。洛は洛陽。



鬱鬱たる、冠帶自ら相索む。長衢夾巷に羅り、王侯第宅多し。兩宮遙に相望み、雙闕

鬱鬱。盛なる貌。  
冠帶。貴人をいふ。相索は相訪求すること。  
夾巷。狹巷なり。  
兩宮。洛陽に南北二宮あり。

【大意】此れ行樂を以て興を遣るの詩なり。丘上の柏、澗中の石は、常に存して變ることなしと雖も、人の世に在るは遠行の客の如く、一たび去つて復た還らず。如かず時に及んで行樂せんには、因つて斗酒相娛んで以て薄しとなさず。時ありて車馬を驅り宛洛の間に遊ぶ。洛陽には貴人の往來して相訪ふあり。王侯の邸宅街衢に列るあり。南北二宮遙に相望み、宮門の高き百餘尺なるあり。亦以て心目を娛ましむるに足る。人宴樂して心を娛ましめば、何の憂か來り追らん。

今日良宴會、歡樂具に陳べ難し。箏を彈じて、逸響を奮ひ、新聲妙にして神に入る。令徳高言を唱ふるも、曲を識りて其眞を聽く。心を齊うし願ふ所を同うするも、意を含んで俱に未だ申せず。人生一世に寄り、奄忽として塵塵の若し。何ぞ高足以策うち、先づ要路の津に據らざる。無爲し窮賤を守り、轉軻して長に苦辛す。

【二八】鬱鬱。盛なる貌。  
【二九】冠帶。貴人をいふ。相索は相訪求すること。  
【三〇】夾巷。狹巷なり。  
【三一】兩宮。洛陽に南北二宮あり。  
【三二】雙闕。左右對立する宮門。  
【三三】戚戚。憂思なり。  
【三四】逸響。高調なり。  
【三五】新聲。新曲なり。  
【三六】令徳。善徳ある人。高言は高尚なる言。  
【三七】奄忽。迅速なること。塵塵は風に吹かる塵。  
【三八】高足。駿馬なり。  
【三九】要路の津。權要の地位をいふ。  
【四〇】轉軻。不遇なり。

【大意】盛宴に列し豪華の曲を聞きて、自ら貧賤を嘲る詩なり。今日盛宴に列し、箏を彈じて高調を發し、新曲の妙神に入るを聽き、其樂具に述べ盡し難し。古人は善徳の貴ぶべきを言へども、豪華の曲を聽けば、人皆之を以て信となし、心を一にして富貴を願はざるはなし。ただ意を含んで未だ之を言はざるのみ。ああ人の此世に在るは、塵の風に吹かるるが如し。須く一躍して富貴に登るべし。貧賤を守りて永く苦辛すべきにあらざるなり。

【一】西北。乾の方角にて君位なり。高樓は高位に居るをいふ。  
【二】交疏。刻鏤疏通なり。綺窓は丹青を以て綺文を飾りし窓。  
【三】阿閣。阿は隅なり。閣に四隅あるをいふ。階は梯なり。階三重なれば閣も亦三重なり、以て樓の高きを知るべし。  
【四】絃歌。忠言に喩ふ。  
【五】杞梁。琴操に「杞梁妻嘆は齊の杞梁殖が妻の作る所なり」とあり。  
【六】清商。悲哀の調。  
【七】中曲。曲のなかごろ。徘徊は音の高低遠近あること。  
【八】知音。音楽を知る人、以て君主に喩ふ。

【三】西北。乾の方角にて君位なり。高樓は高位に居るをいふ。  
【四】交疏。刻鏤疏通なり。綺窓は丹青を以て綺文を飾りし窓。  
【五】阿閣。阿は隅なり。閣に四隅あるをいふ。階は梯なり。階三重なれば閣も亦三重なり、以て樓の高きを知るべし。  
【六】絃歌。忠言に喩ふ。  
【七】杞梁。琴操に「杞梁妻嘆は齊の杞梁殖が妻の作る所なり」とあり。  
【八】清商。悲哀の調。  
【九】中曲。曲のなかごろ。徘徊は音の高低遠近あること。  
【十】知音。音楽を知る人、以て君主に喩ふ。



【大意】此れ忠言の用ひられざるを悲み、遠引を思ふの詩なり。通首比喩を以て成る。西北に高樓あり。其高さ雲と齊し。結窓重階の飾あり。(讒諂の明を蔽ふに喩ふ)樓上に絃歌の聲あり。其調極めて悲し。(忠言の用ひられざるに喩ふ)此曲を作る者は必ず杞梁の妻なるべし。(孤臣の悲嘆するに喩ふ)一彈三嘆、慷慨して餘哀を含み、歌ふことの苦しきを痛まず、ただ知音の少きを傷む。(忠諫の苦を思はず、ただ君主の用ひざるを痛むに喩ふ)願くは鳴鶴となりて、天上に飛び去らんことを。(已むを得ずして、引退せんことを欲するに喩ふ)江を涉りて、芙蓉を采る。蘭澤芳草多し。之を采りて誰にか遺らんと欲する、思ふ所遠道に在り。還顧して舊郷を望めば、長路漫として、浩浩たり。心を同うして離居し、憂傷して以て老を終ふ。

【大意】此れ人を懷ふ詩なり。江澤に往きて蓮花と苜草とを採り、遠地に在る知友に贈らんとするも、路遠くして致すに由なし。思ふに友も亦必ず故郷を回顧して、長途を嘆じつつあらん。ああ同心の友東西に離居し、憂傷して終老するは、誠に悲に堪へず。明月夜光皎たり。(一)促織東壁に鳴く。(二)玉衡孟冬を指し、衆星何ぞ歴歴たる。(三)白露野草を露し、

- 【三九】芙蓉。蓮花なり。
- 【四〇】浩浩。廣き貌。
- 【四一】促織。蟲の名、蟋蟀なり。禮記に「季夏に蟋蟀壁に居るとあり。」
- 【四二】玉衡。北斗七星の第五星をいふ。孟冬は初冬。漢は十月を以て歳首となす。漢の孟冬は夏正の七月なり。
- 【四三】歴歴。明なる貌。
- 【四四】白露。禮記に「孟秋の月白露降る」とあり。

時節忽ち復た易る。(一)秋蟬樹間に鳴き、(二)玄鳥逝きて安にか適く。昔我が同門の友、(三)高舉して六翻を振ふ。手を攜へし好を念はず、我を棄つること遺跡の如し。南に(四)箕あり北に斗あり、(五)牽牛軛を負はず。良に盤石の固なし。虚名復た何の益かあらん。

【大意】此れ貴人の舊交を念はざるを刺れる詩なり。月明かに露零ち、蟲鳴き燕歸り、時節忽ち復た易りて、皆秋景ならざるはなし。炎に就き涼を去る交情の變幻亦此の如し。我が友今高位に登り、勢力を振ふ者あり。然も昔日の交を念はず。我を棄てて復た顧みず、猶ほ天に箕あるも以て簸揚すべからず、斗あるも以て酒漿を挹むべからず、牽牛あるも以て車に駕し軛を負はざるが如く、ただ朋友の虚名ありて堅交の實なし。

(一)冉冉たる孤生の竹、根を(二)泰山の阿に結ぶ。君と新婚を爲し、(三)兔絲女蘿に附かん。兔絲の生ずること時あり、夫婦の會すること宜しきあり。千里遠く婚を結び、(四)悠悠として山陂を隔つ。(五)君を思へば人をして老い

- 【四五】秋蟬。禮記に「孟秋寒蟬鳴く」とあり。
- 【四六】玄鳥。燕なり、禮記に「仲秋の月、玄鳥歸る」とあり。
- 【四七】高舉。高位に登るをいふ。鳥に喩ふ。翻は羽莖。
- 【四八】箕。星の名、斗は北斗星、又箕は物を簸揚する具にして斗は酒漿を酌む具なり。
- 【四九】牽牛。星の名。軛はリビキ、牛車に駕すれば之を負ふ。
- 【五〇】冉冉。漸く生長する貌。竹は以て婦人に喩ふ。
- 【五一】泰山。山の名、以て夫に喩ふ。
- 【五二】兔絲。女蘿。共に蔓草の名、松に附くを女蘿といひ、草に纏ふを兔絲といふ。
- 【五三】悠悠。遠き貌。山陂は阪なり。
- 【五四】君。夫を指す。



しむ。軒車來ること何ぞ遅き。傷む彼の蕙蘭の花、英を含んで光輝を揚ぐるを。時を過ぎて采らずんば、將に秋草に随つて萎まんとなす。君亮に高節を執らば、賤妾亦何をか爲さん。

【大意】此れ女子自ら結婚の遅きを傷む詩なり。孤生の竹の根を泰山に託し、兔絲の女蘿に纏ふが如く、女子嫁して人の妻となるは、人の道なり。然れども兔絲の生ずるに季節あるが如く、夫婦の會合にも亦宜しき時あり。今千里遠く離れ山阪之を隔て、婚を結ばんとするも能はず。我を迎ふるの車その來ること甚だ遅し。之を思へば我をして老いしむ。彼の蕙蘭正に内に芳華を含んで外に光華を揚ぐ、早く之を探らずんば、秋草と同じく萎まん。(盛年の逝き易きに喩ふ)然れども君ただ貞節を執りて心を移さずんば、我れ亦何ぞ憂ふるをなさんや。

- 【五】 軒車。馬車なり。
- 【六】 蕙蘭。香草なり。婦人自ら喩ふ。
- 【七】 華滋。潤澤ある花。

庭中に奇樹あり、綠葉華滋を發く。條を攀ちて其榮を折り、將に以て思ふ所に遺らんとす。馨香懷袖に盈つれども、路遠くして之を致すなし。此物何ぞ貴ぶに足らん、但別れて時を経たるを感ず。【大意】此れ亦人を懷ふ詩なり。庭中に奇樹あり、其花潤澤ありて正に盛なり。之を折りて思ふ所の人に贈らんとす。芳香袖に盈つれども、路遠くして致すに由なし。我の之を贈らんとするは、此花の貴きが爲にあらす、ただ相別れて日久しく、時物改まりて復た此花を見るに至り、感念特に深ければなり。

迢迢たる牽牛星、皎皎たる河漢の女。織織として素手を擡げ、札札として機杼を弄す。終日章を成さず、泣涕零ちて雨の如し。河漢清く且つ淺し。相去ること復た幾許ぞ。盈盈として一水間り、脈脈として語るを得ず。

【大意】此詩は二星を借りて男女の間を詠じたるなり。牽牛星と織女星と天河を隔てて相對し、織女星は白き腕を擡げ、孜孜として布を織りつつあれども、牽牛星を思ふこと頻なるを以て、終日織れども章を成さず、ただ涙を垂るのみなり。天河は清くして且つ淺く、相去ること亦遠きにあらず。然れども一語を交ふる能はず、之を隔てて相凝視するのみ。車を廻らし駕して言に邁き、悠悠として長道を渉る。四顧何ぞ茫茫たる、東風百草を搖かす。遇ふ所故物なし。焉んぞ速に老いざるを得ん。盛衰各々時あり、身を立つること早からざるを苦む。人生金石にあらす、豈能く長く壽考ならんや。奄忽として物に随つて化す。榮名以

- 【五】 迢迢。遠き貌。牽牛星は星の名。夫に喩ふ。
- 【六】 皎皎。明なる貌。河漢は天河。女は織女星なり、天河を隔てて牽牛星と相對す。
- 【七】 織織。細くしなやかなる貌。素手は白き手。
- 【八】 札札。機杼の聲。機はハタ、杼はヒ。
- 【九】 章。織布の文章。
- 【十】 泣涕。涙なり。
- 【十一】 盈盈。水の滿つる貌。
- 【十二】 脈脈。相望んで凝視する貌。
- 【十三】 茫茫。廣遠の貌。
- 【十四】 東風。春風なり。
- 【十五】 故物。舊き物。
- 【十六】 壽考。長壽を保つこと。
- 【十七】 奄忽。倏忽なり。



て寶となさん。

【大意】 此れ自ら警むる詩なり。車を廻らして遠く出遊すれば、四顧茫茫として春風の百草を揺かすを見る。目の觸るる所皆青春の装を成し一も舊物を見ず。人亦何ぞ速に老いざるを得ん。ああ盛時將に遷らんとす。事功を立つるの早からざるを恐る。人生は金石にあらず、誰か千歳の壽を保つを得ん。ただ榮名獨り不朽なるを得るのみ。

東城高く且つ長く、(七二) 委迤として自ら相屬す。廻風地を動かして起り、秋草(七三) 萎として已に緑なり。四時更々變化し、歳の暮るる一に何ぞ速なる。(七四) 晨風苦心を懷き、(七五) 蟋蟀局促を傷む。(七六) 蕩滌して情志を放(七七) せんに、何爲れぞ自ら(七八) 結束する。燕趙佳人多く、美なる者(七九) 顔玉の如し。羅の裳衣を被服し、(八〇) 戸に當りて(八一) 清曲を理む。音響一に何ぞ悲しき、(八二) 絃急にして柱の(八三) 促なるを知る。情を馳せて巾帯を整へ、(八四) 沈吟して聊か躑躅す。思ふ(八五) 雙飛燕となり、泥を銜んで君が屋に巢くはんことを。

【大意】 此れ歲月逝き易く、未だ君に事ふるを得ざるを傷む詩なり。城高く且つ長く、自ら相連續

【七二】 委迤。長き貌。相屬は連ること。

【七三】 萎。草の盛なる貌。

【七四】 晨風。詩經の篇の名。君子を思へども見るを得ずして作る、故に苦心を懷くといふ。

【七五】 蟋蟀。詩經の篇の名。晉の僖公の儉にして禮に中らざるを刺る。故に局促を傷むといふ。局促は器量の小き貌。

【七六】 蕩滌。汗穢を洗ひ去ること。

【七七】 結束。拘束なり。

【七八】 清曲。清商曲なり。

【七九】 促。柱と柱と近く相迫れること。

【八〇】 沈吟。思案すること。躑躅は、ためらふこと。

す。城に登りて以て望めば、秋風地を動かして起り、秋草萎然として緑なり。之を見て坐に四時の更變を感ず。ああ歲月の移る何ぞ此の如く速なる。因つて思ふに晨風の詩は君を見んことを欲して得ざるの苦心を述べ、蟋蟀の詩は局量の狭小なるを傷めり。徒に苦心を抱き局促を傷むも益なきなり。宜しく心情を蕩開して、自ら放(八四) にすべきのみ。自ら拘束すべきにあらざるなり。燕趙には美女多く、顔貌玉の如く被服鮮麗なり。窓に當りて清曲を奏す。その聲極めて悲し。聽く者絃の急にして柱の促れるを知る。(賢士才學ありて未だ仕へず、徒に歳暮の嘆を發するに比す) 我れ之を聽きて心動き情馳せ、衣帯を整へ往きて之に従はんと欲するも、亦沈吟して躊躇す。願くは雙飛燕となり、共に泥を銜んで巢を作り、以て君が室に依棲せんことを。

車を(八〇) 上東門に驅り、遙に(八一) 郭北の墓を望む。(八二) 白楊何ぞ蕭蕭たる、(八三) 松柏廣路を夾む。下に(八四) 陳死の人あり、(八五) 杳杳として長暮に即く。黄泉の下に(八六) 潛み寐ね、(八七) 千載永く寤めず。(八八) 浩浩として陰陽移り、(八九) 年命朝露の如し。人生忽として(九〇) 寄るが如く、(九一) 壽金石の固きなし。萬(九二) 歳更々相送り、(九三) 聖賢も能く度るなし。(九四) 服食して神仙を求むれば、(九五) 多くは藥の爲に(九六) 悞らる。如かず美

- 【八〇】 上東門。洛陽城門の名。
- 【八一】 郭北。洛陽の北に北邙山あり、墳墓多し。
- 【八二】 白楊。木の名。墓に植う。蕭蕭は風の淋しき貌。
- 【八三】 陳死。死して久しき人。
- 【八四】 杳杳。暗き貌。長暮は墓中なり。
- 【八五】 千載。千年なり。
- 【八六】 浩浩。流るる貌。
- 【八七】 服食。仙薬を服用すること。



酒を飲み、(八) 素とを被服せんには。

【大意】 上東門より北邙山上の墳墓を望めば、松柏墓道を夾みて植ち、墓上には白楊蕭蕭として立てり。其下に久死の人あり、黄泉の下に眠りて復た寤むるの期なし。陰陽二氣流轉して已まず。人生亦倏忽にして宿れるが如し。古より生死遞に送り、聖賢と雖も此分を脱すること能はず。夫れ死は人の常分なり。不死を求めて仙薬を服すれば、却つて薬の悞る所となりて死を速く。如かず生時に於て美酒を飲み美服を纏ひ、以て適を目前に取らんには。

去る者は日に以て疎く、生るる者は日に以て親し。郭門を出でて直視すれば、但丘と墳とを見る。古墓葬かれて田となり、松柏摧かれて薪となる。

【八】 純素。白き薄絹。美服をいふ。

白楊悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す。故の里間に還らんことを思ふ。歸らんと欲するも道因るなし。【大意】 此れ客中墳墓を過ぎ、感ありて歸らんことを思ふ詩なり。死して世を去る者は日に疎く、生れて我と相接する者は日に親む。郭門を出でて直視すれば、墳墓の纍纍たるあり。甚しきに至りては、古墓開墾せられて田圃となり、墓上の松柏摧かれて薪となるもあり。ただ白楊の蕭蕭として人を愁へしむるのみ。ああ死しては萬事休す。生時宜しく相親むべきなり。因つて故郷に歸らんと欲するも、道の因るべきなし。

生年百に満たず、常に千歳の憂を懐く。晝短くして夜の長きを苦む。何ぞ燭を秉りて遊ばざる。樂をなすは當に時に及ぶべし、何ぞ能く 來茲を待たん。愚者は費を愛惜して、但後世の嗤となる。仙人 王子喬、與に期を等うすべきこと難し。

【大意】 人生は百年に満たず。然も人みな千歳の計を營み、以て憂となすは愚の至なり。日の短くして夜の長きを苦まば、宜しく燭を張りて

【八九】 來茲。來年なり。  
【九〇】 王子喬。仙人の名。  
【九一】 寢凜。寒き貌。  
【九二】 蝶蛄。寒吟蟲なり。  
【九三】 游子。他郷に在る夫を指す。

夜遊び、以て日の短きを補ふべし。當に時に臨んで樂を取るべく、徒に後日を待つべきにあらず。ただ愚人は遊樂の費を惜んで後世の笑となる。王子喬と長壽を競はんとするは、人力の能くする所にあらず。

【九四】 洛浦。神女宓妃の居る處、己の處に喩ふ。  
【九五】 同袍。袍を共にする人、夫をいふ。  
【九六】 容輝。夫の美貌。  
【九七】 良人。夫をいふ。古慣は舊好。

漂凜として歳云に暮れ、(九) 蝶蛄夕に鳴き悲む。涼風率に已に厲しく、游子寒くして衣なし。錦衾 洛浦に遺り、(一〇) 同袍我と違ふ。獨宿して

【九八】 前綏。車前の把索。  
【九九】 重闌。閨中なり。  
【一〇〇】 晨風。鳥の名、鷓なり。  
【一〇一】 眈眈。斜に視ること。  
【一〇二】 徒倚。行きて進まざる貌。

長夜を累ね、夢想して 容輝を見る。(九) 良人古慣を惟ひ、駕を枉げて 前綏を恵む。願くは常に巧笑するを得て、手を攜へ車を同うして歸らん。既に来りて須臾ならず、又 重闌に處らず。亮に 晨風の翼なし。焉んぞ能く風を凌いで飛ばん。(一〇) 眈眈して以て意に適へ、領を引きて遙に相睇む。(一〇) 徒倚して感傷を懐き、

徒倚して感傷を懐き、



涙を垂れて雙扉を霑す。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。寒氣凜冽として歳ここに暮れんとし、蟬蛸夕に哀鳴す。近來寒風俄に嚴厲を加へたれば、客地の夫君は定めて寒に苦みつつあらん。夫君は空しく錦衾を吾が許に留め、獨り去りて他郷に在り。我れ獨り空間を守りて長夜を累ね、一夜夢に夫君の姿を見たり。夫君は舊好を思ひ車を以て我を迎へんとするなり。因つて常に愛好するを得んことを思ひ、我れ夫君と車を同うして歸る。暫くにして覺むれば夫君また閨中に居らず。ああ我に鶴の翼なし。如何ぞ夫君の許に飛び往くを得ん。眷顧して心を慰め、頸を延べて遙に望めば、涙流れて門扉を沾しぬ。

孟冬寒氣至り、北風何ぞ (一〇四) 慘慄たる。愁多くして夜の長きを知り、仰いで衆星の列るを觀る。(一〇五) 三五明月滿ち、(一〇六) 四五蟾兔缺く。客遠方より來り、我に (一〇七) 一書札を遺る。上には長く相思ふを言ひ、下には久しく離別するを言ふ。書を懷袖の中に置く、三歳字滅えず。一心 (一〇八) 區區を抱くも、(一〇九) 君の識察せざらんことを懼る。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。今や冬の初となり、寒氣厳しく、北風凜冽たるの時、夫君を思ふのあまり、特に夜の長きを感じ、仰いで衆星の天に列るを見れば、過ぎし十五夜には満月なりしも、

- 【一〇三】孟冬。初冬なり。
- 【一〇四】慘慄。寒氣甚しき貌。
- 【一〇五】三五。十五日なり。
- 【一〇六】四五。二十日なり、蟾兔は月の異名。
- 【一〇七】一書札。一封の手紙。
- 【一〇八】區區。夫に對する愛情。
- 【一〇九】君。夫を指す。

二十日には漸く缺けぬ。(月の満ち月の缺くるを以て昔合ひ今離るるに比す) 之を見て坐に歳月の移り易きを感じぬ。憶へば三年の前、客遠方より來り、我に一封の書信を遺りぬ。そは夫君よりの音信なりき。その始には長く我を思ひつつある由を言ひ、終には久しく離別するの悲を言へり。我れ此書を懷中にして今日に至り、既に三年を経たるも、其字猶ほ滅えず。我れ區區として夫君を思ひつつあれども、夫君は之を察知せざるにや、今尙ほ歸り給はず。誠に悲むべきなり。

客遠方より來り、我に一端の綺を遺る。相去ること萬餘里、(一〇一) 故人心尙ほ爾り。(一〇二) 文綵鴛鴦を雙ぶ。裁ちて (一〇三) 合歡被となす。(一〇四) 著するに長く相思ふを以てし、(一〇五) 縁するに結んで解けざるを以てす。膠を以て漆中に投ず。誰か能く此を別離せん。

- 【一〇一】故人。舊好ある人、こゝは夫を指す。
- 【一〇二】文綵。綺の模様。
- 【一〇三】合歡被。夫妻同歡の夜具。
- 【一〇四】著。綿を入ること。綿綿不盡の意あるにより長相思といふ。
- 【一〇五】縁。へりを縫ひつくること。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。夫君の使者來りて我に一端の綺を遺りぬ。夫君と我とは相去ること萬餘里なれども、夫君の愛昔に變らざれば、かくは綺を贈り越したるなり。この綺には番離れの鴛鴦を織出せり。我れ乃ち之を裁ちて同寢の夜具となし、綿を入るるに綿綿として相思ふの意を籠め、縁を綴るに結んで解けざるの意を籠めたり。夫君と我との間は膠漆の堅きに同じ。誰か其間を裂く



者あらんや。願くは早く歸りて此被を共にせんことを。

明月何ぞ皎皎たる、我が羅の牀帷を照す。憂愁して寐ぬる能はず、衣を攪げて起ちて徘徊す。客行樂しと云ふと雖も、早く旋歸するに如かず。戸を出でて獨り、房に入れば、涙下りて裳衣を霑す。

- 【一五】皎皎。明なる貌。
- 【一六】牀帷。閨の帳。
- 【一七】旋歸。故郷に歸ること。
- 【一八】徘徊。徘徊に同じ。
- 【一九】房。閨なり。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。明月皎皎として閨の帳を照すにより、坐に夫君を思ひて寐ぬる能はず、衣を攪げ起ちて徘徊す。夫君は客地に在りて樂かるべきも、早く故郷に歸るの勝れるに如かず。戸を出でて獨りさまよふも愁思を告ぐべき人なし。心を抑へて閨に歸れば、涙流れて衣裳を沾しぬ。

蘇武に與ふる詩三首

李少卿

良時再び至らず、離別須臾に在り。衢路の側に屏營し、手

【一】蘇武。漢の杜陵の人、字は子卿。武帝の時、中郎將を以て匈奴に使し、留められて海上に居り、匈奴に在ること

十九年にして漢に還るを得たり。

【二】李少卿。名は陵、字は少卿、漢の李廣の孫なり、天漢

【三】屏營。恐懼して安んぜざ

を執りて野に踟蹰す。仰いで浮雲の馳

【四】踟蹰。躊躇なり。

【五】奄忽。倏忽なり。

【六】斯須。須臾に同じ。

【七】晨風。鳥の名、鷓鴣なり。

【八】賤軀。いやしき身。

するを視るに、奄忽として互に相踰ゆ。風波一たび所を失へば、各々天の一隅に在り。長く當に此より別るべし。且く復た立ちて斯須す。晨風の發するに因りて、子を送るに賤軀を以てせんと欲す。

【大意】蘇武の漢に歸るを送る詩なり。好會の期は再び來らざるに、暫時の後君と相別れざるを得ず。因つて路傍に恐懼し、手を執りて彷徨す。仰いで浮雲を視れば彼此交々馳せて相踰越し、茫として定りなし。人も亦此の如し。風波一たび所を失へば、相離れて各々天の一角に在り。今日の別必ず當に久しかるべし。暫く立ちて復た須臾の歡を盡さん。鷓鴣の翼に乗り子を送りて共に行かんとするも能はず。悲しいかな。嘉會再び遇ひ難し。三載千秋をなさん。河に臨んで長櫻を濯ひ、子を念ひ悵として悠悠たり。遠く悲風の至るを望み、酒に對して酬ゆる能はず。行人往路を懷ふ。何を以てか我が愁を

【九】嘉會。好會といふが如し。

【一〇】三載。三年なり、千秋は

【一一】長櫻。冠の紐、別涙に汗

【一二】行人。蘇武を指す。

【一三】悠悠。遠き貌。

【一四】悵。返杯すること。

【一五】行人。蘇武を指す。



慰めん。獨り觴に盈つるの酒あり、子と 綢繆を結ばん。

【大意】 蘇武の出でて匈奴に使用するを送る詩なり。一別の後再會復に期すべからず、若し別れて三年を経ば、恰も千年を経るが如き思をなさん。故に今別るるに際し、河に臨んで遠きを望めば、緒に觸れて悲來り、酒に對するも酬い難し。行く者は往路を思ひて悲む。何を能く我が悲を慰むるを得ん。ただ暫く留り共に樽酒を酌んで纏綿の情を敘せん。

手を攜へて 河梁に上る。遊子暮に何にか之く。蹊路の側を徘徊し、  
恨恨として辭する能はず。行人久しく留り難し。各々長く相思ふを言ふ。安んぞ日月にあらざるを知らん。弦望自ら時あり。努力して明德を崇くし、皓首以て期となさん。

【大意】 是れ亦匈奴に使用するを送る詩なり。君が行を送りて橋上に至れば日將に暮れんとす。君今何處に行かんとする。相俱に路傍に徘徊して別辭を述ぶる能はず。然れども朝命を奉じて使用する身は、久しく留るべきにあらす。因つて生死相忘れざらんことを誓ふ。夫れ人の離合は日月の如し。月に弦時あり望時あり。今暫く相離るるも、終に當に會合すべし。ただ各々務めて明德を高くし、晩年の功を期せん。

- 【一】 綢繆。纏綿といふが如し、交情の密なること。
- 【二】 河梁。橋なり。
- 【三】 遊子。蘇武を指す。
- 【四】 蹊路。徑路なり。
- 【五】 恨恨。眷眷の貌。
- 【六】 行人。蘇武を指す。
- 【七】 弦望。弦は半月、望は満月。
- 【八】 皓首。白頭なり。

詩 四 首

蘇

子 卿

骨肉枝葉に緣り、交を結ぶも亦相因る。四海皆兄弟なり、誰か行路の人となさん。況んや我が連枝の樹、子と同一身なるをや。昔は 駕と鴛となり、今は 參と辰となる。昔者は常に相近づく。邈として胡と秦との若し。惟念ふ離別に當り、恩情日に以て新なるを。鹿鳴いて野草を思ふ。以て嘉賓に喩ふべし。我に 一罇の酒あり、以て 遠人に贈らんと欲す。願くは子留りて 斟酌し、此の平生の親を敘せよ。

【大意】 此れ遠く遊びて友に交らんとし、兄弟に別るる詩なり。兄弟は幹を同する枝葉なれば、固より至親なり。然れども朋友の情亦相親むべきなり。古人も四海の内皆兄弟なりといへり。何ぞ路人と同一視すべけんや。況んや我と君とは兄弟にして枝を連ね幹を同するをや。されば兄弟と朋友とは、固より輕重なきなり。我と君とは嘗て鴛鴦の如く相離れざりしも、今や參辰二星の如く離れ去らんとす。昔は相親近せし

- 【一】 骨肉。兄弟をいふ。
- 【二】 鴛鴦。をしどり、常に相離れざる鳥なり。
- 【三】 參辰。二星の名、此の二星常に出没して相見ることなし。
- 【四】 邈。遠き貌。胡は北にあり、秦は西にあり、相隔るをいふ。
- 【五】 鹿鳴。詩經の篇の名、呦呦として鹿鳴き、野の草を食ふ、我に嘉賓あり、瑟を鼓し笙を吹く」とあり。
- 【六】 一罇。一樽なり。
- 【七】 遠人。遠く送り來りし兄弟。
- 【八】 斟酌。酒を酌みて飲むこと。



も、今や胡と秦との如く遠ざからんとす。然りと雖ま請ふ悲むを休めよ。相離れて後始めて恩情の日に濃なるを得べければなり。今鹿鳴を聞きて嘉賓を宴すべきを想ふ。我一樽の酒あり、願くは此酒を酌んで、平生の親情を敘べられよ。

黄鶴一たび遠く別れ、千里顧みて徘徊す。胡馬其羣を失ひ、思心常に依依たり。何ぞ況んや 雙飛龍、羽翼垂くべきに臨めるをや。幸に絃歌の曲あり、以て中懷を喻すべし。請うて游子の吟をなせば、泠泠として一に何ぞ悲しき。絲竹清聲を厲くし、慷慨餘哀あり。長歌正に激烈、中心 槍として以て摧く。清商の曲を展べんと欲して、子の歸る能はざるを念ふ。俛仰して内に心を傷ましめ、涙下りて揮ふべからず。願くは雙黃鶴となり、子を送りて俱に遠く飛ばん。

【大意】 此れ匈奴より漢に歸る時、李陵に別れし詩なり。黄鶴遠く別るも、猶ほ願戀して進まず、胡馬羣を離るるも、常に故土に戀戀たり。何ぞ況んや君と我と遠く相別れんとするをや。幸に絃歌の中情を慰むべきあり。因つて游子吟（游子故郷を思ふの歌）をなせば、音聲淒涼にして悲哀に堪へず。是れ己歸りて君と乖くを悲むが爲なり。乃ち更に清商悲痛の曲

- 【九】 胡馬。北方胡地に産する馬。
- 【一〇】 依依。思戀の貌。
- 【一一】 雙飛龍。己と李陵とに喩ふ。
- 【一二】 中懷。心中なり。
- 【一三】 泠泠。音聲の盛なる貌。
- 【一四】 絲竹。管絃なり。
- 【一五】 槍。傷むなり。
- 【一六】 清商。聲の澄み調の悲しき曲。
- 【一七】 俛仰。俯仰に同じ。

を奏せんと欲し、忽ち君の歸る能はずして我と乖くの一層悲しかるべきを思ひて止みぬ。俯仰して心を傷ましめ、涙下りて拭ふべからず。ただ君と我と、相與に手を攜へて歸るを得ば、則ち會心の至なるも、是れ不可能の事なり。悲しいかな。

【大意】 結髮して夫妻となり、恩愛兩ながら疑はず。歡娛今夕に在り、嬋婉良時に及ばん。征夫往路を懷ひ、起ちて夜の何其を視る。參辰皆已に没しぬ。去去して此より辭せん。行役して戰場に在り、相見んこと未だ期あらず。手を握りて一たび長歎すれば、涙生別の爲に滋し。努力して春華を愛し、歡樂の時を忘るるなかれ。生きては當に復た來り歸るべく、死しては當に長く相思ふべし。

【大意】 此れ匈奴に使用する時、妻に別るる詩なり。汝と夫妻となり、互に恩愛を盡し來りしも、今や匈奴に使用する事となり、歡娛今夕を以て限となる。務めて此の良時に負くことなかるべきなり。我れ前途を思ひ、起ちて窓外を見れば、星既に没して夜將に明けんとす。いざ此より別れ去らん。夫れ使命を奉じて戦地に往く。再會復た期すべからず。手を握りて長嘆し、互に生別の涙を濺ぐ。願くは今の容姿を失はざらんことを勉め、平生の歡を忘るるなかれ。

- 【一八】 結髮。成人となること。男年二十、女年十五にして髮を結んで成人となる。
- 【一九】 嬋婉。歡好なり。
- 【二〇】 征夫。行人なり、蘇武自ら謂ふ。往路は前途。
- 【二一】 參辰。二星の名。
- 【二二】 行役。使命を奉じて遠行すること。
- 【二三】 春華。少時の美貌に喩ふ。



幸さいはひに生いくるを得えば、必かならず復またた歸かへり來きたるべく、不ふ幸さいにして死しせば、地ち下かに長ながく汝なんぢを相あひ思おもはん。

燭しよく燭しよくたる晨あしたの明月めいげつ、〔一〕覆ふく覆ふくたる我わが蘭らん芳ほう。芬ふん馨けい良りやう夜やに發はつし、風かぜに隨したがつて我わが堂だうに聞きこゆ。〔二〕征せい夫ふう遠えん路ろを懷おもひ、〔三〕游いうし子こ故こ郷きやうを戀こふ。〔四〕寒かん冬とう十二月じふにがつ、晨あしたに起おきて嚴げん霜そうを踐ふむ。俯ふして〔五〕江かう漢かんの流ながるるを觀み、仰あいで浮ふう雲うんの翔かけるを視みる。良りやう友ゆう遠えんく離り別べつし、各おの天てんの一方いほうに在あり。〔六〕山さん海かい中ちゆう州しゆうを隔へだて、相あひ去さること悠よほく且かつつ長ながし。〔七〕嘉か會かい再さいび遇あひ難がたく、歡くわん樂らく殊じゆに未いまだ央あきす。願ねがはくは君きみ令れい德とくを崇たかくし、時ときに隨したがつて〔八〕景けい光くわうを愛あいせよ。

【大意】 此れ出でて匈奴きやうとに使用する時とき、李陵りりやうに別わかれる詩しなり。我れ今いま君きみと別わかれんとすれば、晨しん月げつ明めいにして秋しゆう蘭らん芳ほうしく、芳ほう香かう風ふうに隨したがつて堂だう中ちゆうに至いたり時物じぶつの感かん殊じゆに深ふかし。是こゝに於おいて一いには往わう路ろの難なんを想おもひ、一いには故郷こきやうの樂たのしみを戀こふ。然しかも君命くんめいもだし難がたく、嚴霜げんそうを踐ふんで北行ほくかうせんとす。一別いべつの後のちは江流かうりゆう流ながれて息やすまず、浮雲ふううん去さつて歸かへらざるが如ごとく、君きみと我われと相離あひなれて各おの天てんの一方いほうに在あり。我れ帝都ていとを顧かへりるも遠とほく幾山いくさん川せんを隔へだつるならん。好會かうかい再さいび期きし難がたく、歡樂くわんらく猶なほは

- 【一】 燭燭。明なる貌。
- 【二】 覆覆。芳ばしき貌。我の字、一本に秋に作る、之に従へば秋蘭芳しと讀む。
- 【三】 征夫。行人なり、蘇武自ら謂ふ。
- 【四】 游子。蘇武自ら謂ふ。
- 【五】 寒冬。漢書に「武帝の太初元年、改めて夏正に従ふ」とあり。
- 【六】 江漢。この二句は水流れ雲散するをいひ、以て良友の遠く離れ長く隔るに喩ふ。
- 【七】 山海。往路をいふ。中州は帝都。
- 【八】 嘉會。好會なり、歡會なり。
- 【九】 令德。善徳なり。
- 【一〇】 景光。光景に同じ。

未いまだ盡つきす。願ねがはくは善徳ぜんとくを積つみ、時ときに隨したがつて光景くわうけいを賞愛しやうあいし、我われを以もつて憂うれとなすこと勿なかれ。

四愁の詩四首

張子平

張衡ちやうかうひさ久ひさしく機密きみつに處をるを樂たのまず。〔一〕陽嘉やうか中ちゆう、出いでて河間かかんの相しやうとなる。時ときに國王こわうけう驕奢けうしやにして法度はふどに遵したがはず。又また豪右かういゆう并兼へいけんの家多いへおほし。衡車かうぐるまを下くだりて治威ちゐ嚴げんあり、能よく内うちに屬縣ぞくけんを察さつす。姦猾かんわつ巧劫かうけつを行おこなへば皆密みなひそに名なを知しり、吏りに下くだして收捕しゆうほし、盡ことごとく擒とりこつて服ふくす。諸もろもろの豪俠かうけい游客ゆうかく悉くわく惶懼くわうくし、逃のがれて境さかひを出いで、郡中大ぐんちゆうに治をさま、爭訟さうしやう息やすんで獄ごくに繫けい囚しゆうなし。時ときに天下てんか漸ぜんく弊へいえ、鬱鬱うつうつとして志こころを得えず。四愁ししゆうの詩しを爲つくる。屈原くつげん美人びじんを以もつて君子くんしとなし、珍寶ちんぼうを以もつて仁義じんぎとなし、水深すいしん雪雰せつぶんを以もつて小人せうじんとなす。道術だうじゆつを以もつて相報あひはうじ、時君じきんに賂かくらんことを思おもふ。而しかも讒邪ざんじやの以もつて通つうずるを得えざらんことを懼おそる。其辭そのじに曰いはく、一思いしに曰いはく、我わが思おもふ所ところ泰山たいざんに在あり。往ゆいて之これに従したがはんと欲ほつすれば、梁父りやうふ艱かんなり。身みを側そばてて東

- 【一】 張衡。字は子平、後漢の南陽西鄂の人、安帝の時徴されて郎中となり太史令に遷り、順帝の陽嘉中、侍中に遷る、宦官其の己を毀らんことを懼れ、共に之を讒す、出でて河間王の相となり、徴されて尙書に拜せられて卒す。
- 【二】 陽嘉。後漢の順帝の年號。
- 【三】 河間。國名、王は和帝の子なり。
- 【四】 豪右并兼。富みて權勢ある家。
- 【五】 雪雰。雪氣なり。
- 【六】 泰山。泰山なり、東方に在り、以て時君に喩ふ。
- 【七】 梁父。泰山の下の小山の名。讒邪の小人に喩ふ。



望すれば涕 翰を霑す。美人我に金錯刀を贈る。何を以てか之に報いん、(一〇) 英瓊瑤、路遠くして致すなく倚りて逍遙す。何爲れぞ憂を懷いて心煩勞する。

【大意】 我れ君側に近づかんことを思へども、襟を沾す。君已に我を待つこと甚だ厚し。我亦厚く之に報いんと欲するも、倦倦の忠遠くして達し難し。是を以て常に憂を抱くのみに。

二思に曰く、我が思ふ所、桂林に在り。往いて之に従はんと欲すれば、(一一) 湘水深し。身を側て南望すれば涕襟を霑す。美人我に、(一二) 金

路遠くして致すなく倚りて惆悵す。何爲れぞ憂を懷いて心煩傷する。

【大意】 第一首に同じ。

三思に曰く、我が思ふ所、漢陽に在り。往いて之に従はんと欲すれば、(一六) 隴阪長し。身を側

路遠くして致すなく倚りて惆悵す。何爲れぞ憂を懷いて心煩傷する。

【大意】 第一首に同じ。

て西望すれば涕裳を霑す。美人我に、(一七) 貂

襜褕を贈る。何を以てか之に報いん、(一八) 明月の珠。路遠くして致すなく倚りて、(一九) 踟躕す。何爲

れぞ憂を懷いて心煩紆する。

【大意】 第一首に同じ。

四思に曰く、我が思ふ所、鴈門に在り。往いて之に従はんと欲すれば雪紛紛たり。身を側て北望すれば涕巾を霑す。美人我に、(二〇) 錦繡段を贈る。何を以てか之に報いん、(二一) 青玉案。路遠くして致すなく倚りて歎を増す。何爲れぞ憂を懷いて心煩惋する。

【大意】 第一首に同じ。

日暮、(二二) 西園に遊ぶ。冀くは憂思の情を寫かん。

曲池、(二三) 素波を揚げ、(二四) 列樹、(二五) 丹榮を敷く。上に、(二六) 特

栖の鳥あり、春を懷ひ我に向つて鳴く。柵を褰

【一〇】 英瓊瑤。路遠くして致すなく倚りて惆悵す。何爲れぞ憂を懷いて心煩勞する。

【一一】 湘水。河の名。譏邪の小人に喩ふ。

【一二】 金琅玕。黄金及び美玉厚祿に喩ふ。

【一三】 雙玉盤。二個の玉の皿。

【一四】 雙玉盤。二個の玉の皿。

【一五】 漢陽。漢書に「天水郡明帝改めて漢陽といふ」とあり。

【一六】 隴阪。阪の名。喩意前に同じ。

【一七】 貂。貂。貂は貂蟬の冠、襜褕は蔽膝なり、冠服をいふ。

【一八】 明月の珠。隨侯の珠又は夜光の珠ともいふ。

【一九】 踟躕。行きて進まざる貌。

【二〇】 錦繡段。美錦なり。

【二一】 青玉案。青玉のテーパール。

【二二】 西園。鄴都の西園なり。

【二三】 素波。白波なり。

【二四】 丹榮。紅花なり。

【二五】 特栖。孤棲なり。

雜詩

王仲宣



げて之に從はんと欲するも、路險にして征くを得ず。徘徊して去る能はず、佇立して爾の形を望む。風塵を揚げて起り、白日忽ち已に冥し。身を廻らして空房に入り、夢に託して精誠を通ず。人欲天違はず、何ぞ合併せざるを懼れん。

【大意】此れ友を思ふ詩なり。夕に西園に遊びて憂情を慰めんとすれば、曲池は微波を揚げ、列樹は紅花を綴れり。樹上に孤棲の鳥（友に喩ふ）あり、春愁に堪へず、我に向つて鳴けり。我れ因つて衣を褰げて近づかんとすれば、路險（戦亂に喩ふ）にして行く能はず。ただ徘徊して遠く之を望むのみ。忽ち疾風起りて日既に暮れぬ。歸りて虚室に入り、夢に由りて我が精誠を通せんとす。人の欲する所は天必ず之に從ふ。何ぞ君と相會するを得ざることあらんや。

雜詩

劉公幹

職事煩として、填委し、文墨紛として消散す。翰を馳せて未だ食ふに暇あらず、日長いて晏ふを知らず。簿領の書に沈迷し、回回として自ら昏亂す。此を釋して西城を出で、高きに登りて

- 【一】 填委。委積すること。
- 【二】 文墨。案牘なり。消散は
- 【三】 簿領。文書なり。

疏理せらるること。

且く游觀す。方塘白水を含み、中に鳧と鴈とあり。安んぞ肅肅たる羽を得て、爾の波瀾に浮ぶに從はん。

【四】 回回。心の亂るる貌。

【五】 肅肅。飛ぶ貌。

【大意】職事多忙にして文書の疏理すべきもの多く、日夜筆を馳せて休息するに暇あらず。心之が爲に沈迷昏亂せんとす。因つて西城を出でて遊觀し、自ら慰めんとすれば、池水白を湛へ中に鳧鴈の游べるを見、羽翼を得て此鳥と同じく波瀾の中に游ばんことを願ひぬ。

雜詩二首

魏文帝

漫漫として秋夜長く、烈烈として北風涼し。展轉して寐ぬる能はず、衣を披て起ちて彷徨す。彷徨忽ち已に久しく、白露我が裳を霑す。俯して清水の波を視、仰いで明月の光を看る。天漢廻りて西に流れ、三五正に從横。草蟲鳴くこと何ぞ悲しき、孤鴈獨り南に翔る。鬱鬱として悲思多く、縣縣として故郷を思ふ。飛ばんことを願ふも安にか翼を得ん、濟らんと欲するも河に梁なし。風に向つて長く歎息し、我が中腸を斷絶す。

- 【一】 漫漫。夜の長き貌。
- 【二】 烈烈。詩經に「冬日烈烈たり」とあり。
- 【三】 展轉。ねがへりすること。
- 【四】 彷徨。徘徊なり。
- 【五】 天漢。あまのがは、以下四句は羣小君を感し身を安んずる能はざるに喩ふ。
- 【六】 三五。星なり。詩經に「三五東に在り」とあり。從横は縱横。多きなり。
- 【七】 縣縣。絶えざる貌。



【大意】この詩疑ふらくは魏武曹操が太子（文帝）を易へんと欲せし時、憂へて作りしものならん。秋夜長くして北風寒く、寐ねて安んずる能はず。衣を着て起ちて徘徊すれば、白露降りて我が衣を沾せり。仰いで天上を望めば星斗縦横なり。（羣小君を惑すに喩ふ）。俯して耳を傾くれば草蟲悲鳴し孤鴈南に飛ぶ。（己の身を安んずる能はざるに喩ふ）憂愁の極、故郷を思ふこと頻なるも、（離間の懼明言すべからず、故に故郷を思ふを借りて言ふ。真に故郷を思ふにあらずと知るべし）其道なきを如何せん。因つて獨り長嘆して心腸を摧く。

西北に浮雲あり、亭亭として車蓋の如し。惜しいかな時遇はず、適く飄風と會ふ。我を吹きて東南に行き、行き行きて 吳會に至る。吳會は我が郷にあらず、安んぞ能く久しく留滞せん。（客子 棄置復た陳ぶるなげん、）客子常に人を畏る。

【大意】作意は前首に同じ。西北に浮雲（自ら喩ふ）あり。依託する所なくして其形車蓋を張れるが如し。たまたま颺風（離間する人に喩ふ）に遇ひ、吹かれて南方吳地に至る。（泰伯の逃れて吳に至り、弟季歴に天下を譲りし故事に倣はんとせるに喩ふ）然も吳會は我が故郷にあらず、焉んぞ永く留滞するを得んや。身は棄置せられて客地に在り、常に人を畏れて惴惴たるのみ。

- 【八】亭亭。廻遠して依る所なき貌。
- 【九】吳會。吳郡と會稽郡とをいふ。
- 【一〇】棄置。己の棄て置かるること。
- 【一一】客子。旅客なり、文帝自ら謂ふ。

朔風の詩

曹子建

彼の朔風を仰ぎ、用て魏都を懷ふ。願くは代馬を聘せ、倏忽として北に徂かん。凱風永く至り、彼の蠻方を思ふ。願くは越鳥に隨ひ、翻飛して南に翔らん。四氣代謝し、懸景運周す。別俯仰の如く、脱ち三秋の若し。昔我れ初めて遷りしとき、朱華未だ希ならず。今我れ旋り止れば、素雪云に飛ぶ。俯して千仞に降り、仰いで天阻に登り、風飄蓬飛し、載ち寒暑に離ふ。千仞は陟り易く、天阻は越ゆべし。昔我が同袍、今永く乖き別れぬ。子は芳草を好む。豈爾に貽るを忘れんや。繁華將に茂らんとし、秋霜之を悴らす。君眷を垂れざるは、豈其の誠なりと云はんや。秋蘭喻ふべく、桂樹冬榮く。絃歌思を蕩すも、誰と與にか憂

- 【一】朔風。北風なり。
- 【二】魏都。鄴都なり、今の河南臨漳縣。
- 【三】代馬。代は北方の郡名、代郡に産する馬。
- 【四】凱風。南風なり。
- 【五】蠻方。南國なり、東阿を指す、東阿は魏都の南に在り。
- 【六】越鳥。南方越國に産する鳥。
- 【七】四氣。四時なり。代謝は往來すること。
- 【八】懸景。日月なり。
- 【九】俯仰。暫時なるをいふ。
- 【一〇】三秋。三年なり。
- 【一一】朱華。紅花なり。
- 【一二】素雪。白雪なり。
- 【一三】千仞。深谷なり。
- 【一四】天阻。高山なり。
- 【一五】風飄蓬飛。風の如く飄り蓬の如く飛ぶ。
- 【一六】同袍。文帝を指して言ふ。
- 【一七】子。文帝を指して言ふ。芳草は賢臣に喩ふ。
- 【一八】繁華。己の忠心に喩ふ。
- 【一九】秋霜。讒人に喩ふ。
- 【二〇】秋蘭、桂樹。己に喩ふ。



を銷さん。川に臨んで暮に思ふも、何爲れぞ舟を泛べん。豈和樂なからんや、遊ぶこと我が 鄰にあらず。誰か舟を泛ぶるを忘れんや、愧らくは 榜人なきを。

【大意】 久しく外に役し、將に藩邑(子建は文帝の弟にして東阿王に封せらる)に歸らんとし、途に在りて感懷を述べし詩なり。北風を仰いで、代馬に跨りて北(鄴都)に行かんことを思ひ、南風に遇ひては南國(東阿を指す)を慕ひ、越鳥に隨つて南に行かんことを思ふ。歳月は移り易く、藩を去りて暫くなるも、既に三年を経たるの思あり。嘗て征途に上りし時は、花未だ凋まざりしに、今歸途に就けば白雪紛紛たり。山路險難にして寒暑を冒して進む。險路は過ぎ易きも、君(文帝)と我との乖離は耐ふべからず。君もと賢臣を好めり、我亦君恩に報いんことを思ふ。精忠を盡さんとすれば、讒人ありて之を間つ。然れども君の我を眷愛せざるの君の本心にあらざるは、我よく之を知れり。故に事功を晩年に建て、君の恩に報いんと期す。今や絃歌の以て憂を銷すなきにあらざれども、誰と與にか之を樂まん。川に臨んで濟らんと思へども、何を以て舟を泛べん。樂遊するも吾が親にあらず、舟を泛べんとするも舟人なし。(君に親まんと欲すれども、良友の調護する者なきに喩ふ) 獨り自ら愧づるのみ。

【一】 鄴。親といふが如し。  
【二】 榜人。舟人なり、己を調護する良友に喩ふ。

雜詩六首

曹子建

高臺悲風多、朝日北林照。之子萬里在、江湖迥且深。舟方泛也安、極極極、離思故に任へ難し。孤鴈飛んで南に遊び、庭を過ぎて長く哀吟す。思を翹げて 遠人を慕ふ。願くは 遺音を託せんと欲す。形影忽ち見えす、翩翩として我が心を傷ましむ。

【一】 高臺。京師に喩ふ。悲風多しとは氣象愁慘なるをいふ。  
【二】 朝日。文帝に喩ふ。北林を照すは小人を任用するをいふ。  
【三】 之子。子建自ら謂ふ。  
【四】 遠人。遠方に居る人、文帝を指す。  
【五】 遺音。傳言といふが如し。  
【六】 翩翩。飛ぶ貌。

【大意】 忠を抱きて忌まれ、君に近づくを得ざるを傷む詩なり。京師を望めば氣象愁慘にして、君正に小人を任用す。是を以て我れ放たれて藩國(郢城)に在り、江湖遠く且つ深し。舟を方ふるも渡るを得ず、獨り離別を悲むのみ。時に孤鴈あり、來りて我が庭に鳴く。我之を見て坐に君を思ひ、書信を託せんと欲すれば、忽ち去りて其影を留めず。悵然として心を傷ましめぬ。

【七】 轉蓬。風に吹かれて飛ぶ蓬。  
【八】 飄飄。風にひるがへるこ。



んとは。高高として上りて極なし。天路安んぞ  
窮むべけんや。類す此の(一)游客の子、軀を捐て  
て遠く(二)戎に従ひ、(三)毛褐形を掩はず、(四)薇藿  
常に充たざるに。去り去りて復た道ふこと莫け  
ん、沈憂人をして老いしむ。

【九】廻。旋風なり。  
【一〇】我。蓬をいふなり。  
【一一】游客の子。子建自ら謂ふ。  
【一二】戎。軍役なり。  
【一三】毛褐。粗服なり。  
【一四】薇藿。野菜の名。  
【一五】綺縞。白絹なり。縞は

多き貌。  
【一六】明晨。朝なり。  
【一七】良人。夫なり。  
【一八】九春。一年に三春あり、  
故に三年を九春といふ。  
【一九】嗷嗷。鳥の鳴く聲。  
【二〇】景。日なり。

【大意】己の遷徙常なく甚だ貧困なるを傷むなり。轉蓬風に随つて、飜り高く雲中に至る。何ぞ我の遠く軍役に従ひ(託言なり事實にあらず)衣食常に足らざると相似たるや。然れども飢寒困窮を訴ふるも益なし。ただ帝京を去りて復た言ふことなからん。憂は人をして老いしむるのみ。

西北に織婦あり、(一)綺縞何ぞ縵紛たる。(二)明晨機杼を乗り、日昃くも文を成さず。太息して長夜を終へ、悲嘯して青雲に入る。妾が身空閨を守り、(三)良人行いて軍に従ふ。自ら期す三年にして歸らんと。今已に(四)九春を歴たり。飛鳥樹を繞りて翔り、(五)嗷嗷として鳴いて羣を索む。願くは南流の(六)景となり、光を馳せて我が君を見ん。

【大意】西北に織婦あり。常に白絹を織る。然も愁思多くして心亂れ、早朝機杼を執りて夕に至るも竟に文章を成す能はず。ただ太息して天に向ひ獨り悲嘯するのみ。因つて曰く妾は空閨を守り、

夫は軍に従ふ。夫去るとき三年にして歸らんと約し、今既に其期に満てるも、尙ほ未だ歸らず。彼の飛鳥すら友を求めて鳴けり、況んや人に於てをや。願くは日景となり、光を馳せて夫を見んことをと。

南國に佳人あり、(一)容華桃李の若し。朝に江の北岸に遊び、夕に(二)瀟湘の沚に宿す。時俗(三)朱顔を薄んず、誰か爲にか(四)皓齒を發かん。(五)俛仰して歳將に暮れんとす、(六)榮耀久しく恃み難し。

【大意】江南に美女あり、美貌桃李の花の如し。朝夕江畔に行遊す。然も時俗その美貌を尙はざるを以て、之と言笑するに由なし。惜いかな歲月過ぎ易く、美貌亦衰へんとす。是れ誠に慨すべきなり。此首己の徒に偉才を抱き屢々藩邑を移され、人の調護するなくして、年將に老いんとするを傷むもの如し。

【大意】僕夫早く駕を嚴めよ、吾將に遠く行きて遊ばんとす。遠く遊んで何に

之かんと欲する。吳國我が仇たり。將に萬里の塗に馳せんとす。(一)東路安んぞ由るに足らん。(二)江介悲風多く、(三)淮酒急流を馳す。願くは一たび軽く濟らんと欲すれども、惜しい哉(四)方舟なし。閑居は

【一】容華。美貌なり。  
【二】瀟湘。江南の川の名。  
【三】朱顔。紅顔なり。  
【四】皓齒。白き齒。  
【五】俛仰。俯仰に同じ。  
【六】榮耀。美容なり。  
【一七】僕夫。車を御する人。  
【一八】東路。江東なる吳に行、  
道。  
【一九】江介。江間といふが如し。  
【二〇】淮酒。二川の名。江蘇地方を指す。  
【二一】方舟。駢舟なり。



吾が志にあらす、甘心して國憂に赴かん。

【大意】 僕夫早く駕を用意せよ、吾將に行きて吳を伐たんとす。國家當に萬里の外に土宇を開かんとす。吳地の近き之に行くは易易たるのみ。行きて淮泗長江の間に至れば、悲風吹き急流馳せ、一舉して濟らんとするも舟船なし。然りと雖も、閑居は我が志にあらす。自ら行きて國憂を除かんのみ。

飛觀百餘尺、牖に臨んで 櫺軒に御る。遠望千里に周く、朝夕平原を見る。烈士は悲心多く、小人は自閑を愉む。國讎亮に塞がらず、甘心して元を喪はんことを思ふ。劔を拊でて西南を望み、泰山に赴かんと思欲す。絃急にして悲聲發す。我が慷慨の言を聆け。

- 【一】 甘心。自ら好んで。
- 【二】 飛觀。高樓なり。
- 【三】 櫺軒。欄干なり。
- 【四】 國讎。國家の仇。塞は滅なり。
- 【五】 泰山。山東省にある山の名。

【大意】 高樓高きこと百餘尺なり。我れ此樓に登り欄に憑りて四方を望む。夫れ烈士は國の未だ安からざるを見て常に悲心多く、小人は唯身の安逸を貪りて成す所なし。今や國讎未だ滅びず、我れ一身を抛ちて之を滅さん。因つて劔を撫して西南を望み、更に轉じて東方を望み、行いて將に之を征せんとす。我が情切にして聲悲し。人當に我が歎言を聽くべし。

情詩

曹子建

微陰陽景を翳ひ、清風我が衣を飄す。游魚綠水に潛み、翔鳥天に薄りて飛ぶ。 眇眇たる客行の士、遙役して歸るを得ず。始め出でしとき嚴霜結び、今來れば白露晞く。游子は黍離を歎じ、處る者は式微を歌ふ。慷慨して 嘉賓に對し、悽愴して内に傷悲す。

【大意】 今や佞臣君明を蔽ひ、教令嚴にして 征役多く、小人各々其志を得たり。我れ獨り行役して歸るを得ず、時を経ること既に久し。役に従ふ者は戰苦を歎き、國に留る者は歸らざるを悲む。我れ乃ち良友と相對し、國政の否なるを嘆く。

- 【一】 微陰。讒人に喩ふ。陽景は日なり。君に喩ふ。
- 【二】 清風。教令に喩ふ。
- 【三】 游魚。翔鳥。佞人の時を得たるに喩ふ。
- 【四】 眇眇。遠き貌。客行の士。
- 【五】 黍離。行役の難を歌へる詩。
- 【六】 式微。行役して歸らざるを刺れる詩。
- 【七】 嘉賓。良友なり。

雜詩

嵇叔夜

微風清く扇ぎ、雲風四に除る。皎皎たる亮月、高隅に麗けり。興つて公

- 【一】 皎皎。月の明なる貌。亮月は明月。
- 【二】 高隅。高城の一角。



子に命じ、手を攜へて車を同うす。龍驤翼として、鑣を揚げて、脚蹶す。肅肅として宵征き、我が友の廬に造る。光燈輝を吐き、華幔長く舒ぶ。鸞觴醴を酌み、神鼎魚を烹る。絃は子野に超え、歎は縣駒に過ぐ。太素を流詠し、俯して玄虚を讚す。孰か克く英賢なる、爾と符を剖かん。

【大意】微風吹きて雲散じ、明月高く城角に懸れり。因つて起ちて公子と共に馬車に乗り、行きて吾友の草廬を訪へば、燈火明光を吐き、幔帷長く垂る。即ち酒を酌み魚を烹、絃歌を奏すれば、琴は子野よりも巧に、歌は縣駒に勝れり。かくて詠歌して虚無自然の道を樂めり。世に英賢の士あらば、共に此樂を同うせん。

- 【三】龍驤。駿馬なり。翼は飛ぶ貌。
- 【四】脚蹶。緩く行くこと。
- 【五】肅肅。静に行く貌。
- 【六】華幔。美しき帳帷。
- 【七】鸞觴。杯なり。

- 【八】子野。師曠、字は子野、古の琴に巧なる人。
- 【九】歎。歌なり。縣駒は古の歌に巧なる人。
- 【一〇】太素。虚無の道なり。
- 【一一】玄虚。太素に同じ。

雜詩

傅休奕

志士は日の短きを惜み、愁人は夜の長きを知る。衣を擣げて前庭を歩し、仰いで南鴈の翔るを觀

【一】傅休奕。傅玄、字は休奕、晉の北地の人。

る。玄景形に随つて運り、流響空房に歸す。清風何ぞ飄飄たる、微月西方に出づ。繁星青天に依り、列宿自ら行を成す。蟬は高樹の間に鳴き、野鳥東廂に號く。織雲時に髣髴たり、渥露我が裳を濡す。良時景を停むるなく、北斗忽ち低昂す。常に恐る寒節至り、凝氣結んで霜とならんことを。落葉風に随つて摧け、一絶流光の如し。【大意】我れ愁へて眠る能はず寢衣を擣げて前庭を歩し、南飛の鴈を見らる。其影忽ち雲中に消え、其聲ただ風に随つて虚室に聞ゆ。清風吹いて微月西天に懸り、列星青天に布列し、鳥蟬樹間に鳴き、雲露我が衣を濡す。良時久しく留まらず、北斗忽ち廻轉す。恐らくは寒節至りて遂に霜を結び、落葉風に随つて散じ去ること、彼の月光の流没するが如くならんことを。

- 【一】玄景。鴈の黒き影。
- 【二】飄飄。風の吹く貌。
- 【三】列宿。二十八宿の星、行は行列。
- 【四】織雲。輕雲なり。髣髴は分明ならざる貌。
- 【五】渥露。濃き露。
- 【六】流光。月をいふ。
- 【七】

雜詩

張茂先

暑度天に随つて運り、四時互に相承け、東壁正に昏に中し、固陰寒節升る。繁霜當夕に降り、悲風中夜に興る。朱火青くして光なく、蘭

- 【一】暑度。日景なり。
- 【二】東壁。星の名、禮記に「仲冬の月、昏に東壁中す」とあり、夕暮に正南に現はるるなり。
- 【三】固陰。陰氣の結ぶこと。
- 【四】當夕。日暮なり。
- 【五】朱火。燈火なり。



膏坐ながら自ら凝る。衾を重ぬるも暖氣なく、  
纒を扱むも氷を懐けるが如し。枕に伏して遙

【六】蘭膏。燈油なり。  
【七】遙昔。長夜なり。

【八】寤言。覺めて語ること。  
【九】崇替。興廢盛衰なり。

昔を終へ、寤言するも予に應ふるなし。永く思ひて崇替を慮り、慨然として獨り膺を撫づ。  
【大意】天運循環して四時代謝し、今や東壁星天に中する仲冬の時節となり、風霜嚴厲にして燈  
火光なく、燈油忽ち凍り、衾を重ぬるも寒に耐へず、獨り枕に伏して長夜を過ぎ、覺めて語るも應  
答する者なし。因つて人事の興廢を感じ、慨然として胸を打ちぬ。

情詩二首

張茂先

清風帷簾を動かし、晨月幽房を照す。佳人遐遠に處り、蘭室容光なし。襟懷虚景を擁し、輕衾  
空牀を覆ふ。歡に居ては夜の促きを愕り、感に在りては宵の長きを怨む。  
枕を拊ちて獨り嘯歎し、感慨して心内に傷む。

【大意】此れ閨情の詩なり。清風帷帳を動かし、明月幽闇を照し、我が  
情思をそること急なり。夫は遠地に客遊して今閨中に在らず。ただ心  
中に虚影を抱き、輕衾を以て空牀を蔽ふのみ。嘗て歡を共にせし時は、

【一】晨月。夜の將に明けんと  
する頃の月。  
【二】佳人。夫をいふ、遐遠は  
遠地なり。  
【三】容光。夫の姿なり。  
【四】襟懷。心中なり。

夜の短きを惜みたるに、今や却つて夜の長きを怨み、胸を拊つて獨り歎嘯するのみ。  
目を四野の外に遊ばしめ、逍遙して獨り延佇す。蘭蕙清渠に縁り、繁華綠渚を蔭ふ。佳人茲  
に在らず、此を取りて誰にか與へんと欲する。巢居しては風の寒きを知り、  
穴處しては陰雨を識る。曾て遠く別離せずば、安んぞ儔侶を慕ふを知  
らんや。

【大意】此れ亦夫を戀ふる詩なり。獨り野外に出でて逍遙すれば、香草  
清渠の邊に生じ、美花綠渚を掩へり。吾が夫は遠く客遊して在らざれ  
ば、此花を採るも贈るべき人なし。それ巢居の鳥は風の寒きを知り、穴  
居の蟲は陰雨の來るを知る。人も亦然り、別離の經驗なき者は焉んぞ戀情の憂を知らんや。

園葵の詩

陸士衡

葵を北園の中に種  
う。葵生じ鬱とし  
て萋萋たり。朝榮

【一】園葵。趙王倫位を篡ひて  
晉の惠帝を金墉城に遷す、後  
諸王共に倫を誅し帝を位に復  
す、齊王問、士衡倫の爲に禪

文を作ると譖す、成都王穎之  
を救ひしに頼り死を免るるを  
得たり、故に此詩を作り葵を  
以て自ら喻へ、穎に謝せしな

【二】葵。其花は常に日に向  
ふ。  
【三】萋萋。茂る貌。



東北に傾き、夕類  
西南に啼く。零露  
鮮澤を垂れ、朗月其

【四】朝榮。朝咲く花。  
【五】夕類。夕に咲く花。  
【六】零露。落つる露。  
【七】柔風。春風なり。

【八】商飈。秋風なり。  
【九】曾雲。重雲なり。温液は  
潤雨なり。  
【一〇】高塘。高き塘。

【一】玄景。塘の黒き影。素蕤  
は白き花。  
【二】豊條。太き枝。  
【三】晚彫。後れて凋むこと。

輝を耀かす。時逝いて柔風戢り、歳暮れて商飈飛ぶ。曾雲温液なく、嚴霜凝威あり。幸に高塘の徳を蒙り、玄景素蕤を蔭ふ。豊條春に並びて盛に、落葉秋に後れて衰ふ。彼の晚彫の福を慶び、此の孤生の悲を忘る。

【大意】葵を北園の中に植ゑしが、萋萋として繁茂し、朝夕その花を開いて日に向へり。(己の吳滅びて後來りて晉に仕へ、常に忠義の心を失はざるに喩ふ)乃ち露は鮮澤を垂れて之を潤し、月は清光を舒べて之を照せり。(君恩の己に及べるに喩ふ)嘗て春風絶えて秋風來り、重雲雨なく、嚴霜威を逞うするや、(己の吳に在りて苦みしに喩ふ)幸に高塘の庇蔭を受け、(晉室の恩を蒙りしに喩ふ)春盛の時に隨つて盛え、凋落の秋に後れて凋むを得、心に晚凋を喜んで幸となし、孤生の悲を忘れつつあり。

友人を思ふ詩

曹顔遠

【一】曹顔遠。曹據、字は顔遠、晉の譙國の人。

密雲 陽景を翳ひ、霖潦庭除を淹す。嚴霜翠草を彫ましめ、寒風 織枯を振ふ。凜凜として天氣清く、落落として 卉木疎なり。時に感じて 蟋蟀を歌ひ、賢を思ひて 白駒を詠す。情は玄陰に隨ひて 滯り、心は 廻飄と俱なり。思心何の懷ふ所ぞ、我が 歐陽子を懷ふ。精義神奧を測り、清機

妙理を發す。我が 旬朔を別れしより、(一) 微言耳に絶ゆ。(二) 裳を褰ぐることに難しとするに足らざるも、(三) 清揚未だ俟つべからず。首を延べて階檐を出で、佇立して増々似たるを想ふ。

【大意】これ友人歐陽建を思ふ詩なり。密雲 日を掩ひて霽れず。淫雨庭階を沾し、風霜枯葉を振ひ、天寒くして草木稀疎なり。因つて時物の變に感じて蟋蟀の詩を歌ひ、賢者を思ひて白駒の詩を誦すれば、情結んで黒雲に似、心飛んで旋風の如し。我が思ふ所は他にあらず、即ち歐陽子を思ふなり。歐陽子は精義よく鬼神の深奥を測り、清機よく神妙の理を剖つる賢士なり。我れ暫時彼と別れしより、また其微言を聽く能はず。彼れ湊水を涉りて來ること難きにあらざるも、彼

- 【一】 陽景。日なり。
- 【二】 霖潦。ながあめ。庭除は庭階。
- 【三】 織枯。細き枯木。
- 【四】 凜凜。寒き貌。
- 【五】 卉木。草木なり。
- 【六】 蟋蟀。詩經の篇の名。歳の暮るるを感ずる詩なり。
- 【七】 白駒。詩經の篇の名。賢人を思ふ詩なり。
- 【八】 廻飄。旋風なり。
- 【九】 旬朔。十日を旬といひ、月の初を朔といふ。暫時といふが如し。
- 【一〇】 微言。微妙の言。
- 【一一】 裳を褰ぐ。詩經に「子我を惠思せば、裳を褰けて湊を涉れ」とあり。
- 【一二】 清揚。眉目なり。

れ暫時彼と別れしより、また其微言を聽く能はず。彼れ湊水を涉りて來ること難きにあらざるも、彼



の眉目待ちて之を見るべからず。因つて階檐を出でて遙に望み、彼を思ふこと切にして、彼を見ざればその似たる人を見て甘心せんと欲す。

感舊の詩

曹顔遠

富貴なれば他人も合ひ、貧賤なれば親戚も離る。  
廉蘭門軌を易へ、田寶相奪移す。晨風茂林に集り、棲鳥枯枝を去る。今我れ唯困蒙す、郡士背馳する所なり。郷人懿義を敦うし、濟濟として光儀を蔭す。賓に對して有客を頌し、觴を擧げて露斯を詠す。樂に臨んで何の歎ずる所ぞ、素絲と路歧と。

【大意】 富貴なれば他人も來り就き、貧賤なれば親戚も背き去るは、世の常情なり。されば廉蘭の勢を失ふや、賓客皆蘭相如の

- 【一】 廉蘭。廉頗の權を失ふや門下の賓客皆蘭相如の門を望む、後位に復するや門客また來る。
- 【二】 田寶。漢の寶太后怒りて丞相寶嬰、太尉田蚡を免す、嬰蚡侯を以て家に居る、蚡職に任ぜずと雖太后の故を以て親幸せられ、しばしば事を言ひ効多し、士の勢利に趨く者皆嬰を去りて蚡に歸す。
- 【三】 晨風。鷓鴣なり。
- 【四】 郡士。一本に羣士に作る。
- 【五】 懿義。美義なり。
- 【六】 濟濟。衆盛の貌。
- 【七】 賓。客なり、顔遠自ら謂ふ。
- 【八】 有客。詩經の篇の名、客あり宿宿し、客あり信信す、言に之に繫を授け、以て其馬を繫がんとあり。
- 【九】 露斯。詩經の篇の名、湛湛たる露斯、陽に匪れば晡かず、厭厭たる夜飲、醉はずんば歸るなかれとあり。
- 【一〇】 素絲。白き絲、墨子は素絲を見て泣けり、その以て黄にすべく以て黒にすべきを以てなり。
- 【一一】 路歧。わかれ道、楊子は

路歧を見て泣けり、以て南すべく以て北すべきを以てなり。

り。

門に趨り、寶嬰の權を失ふや、人皆田蚡に歸す。鳥も亦人に同じく、茂林には鷓鴣集り、棲鳥も枯枝を去る。今我れ困蒙なるを以て、衆士に背馳せらるるも亦宜なり。獨り郷人は美義を重んじ、我に假すに光儀を以てし、酒杯を擧げて我を饗す。これ俗情に勝ること遠しと謂ふべし。吾が歎ずる所は、彼の貧富貴賤によりて去就を異にするに在り。

雜詩

何敬祖

秋風夕に乗じて起り、明月高樹を照す。閑房清風來り、廣庭暉素を發す。靜寂にして愴然として歎き、惆悵として出でて游願す。仰いで垣上の草を視、俯して階下の露を察る。心虚うして體自ら軽く、飄飄として仙歩の若し。彼の陵上の栢を瞻、神人と遇はんことを想ふ。道深くして期すべきこと難く、精微慕ふ所にあらず。思を勤めて遙夕を終へ、言を永うして情慮を寫く。

【大意】 秋風夕に起り、明月高樹を照し、清風閑室に入り、月色空庭に滿つ。閑夜友なく愴然として戸を出でて願望し、俯仰して草露を見、乃ち虚無の理を悟り、身の



輕きこと飛仙の如きを覺ゆ。轉じて丘上の柏の、寒に耐へて凋まざるを見、神仙と遇合して長生を求めんことを思ふ。然も仙道は深遠精微にして、容易に希ふべからず。因つて沈思して長夜を過ぎ、詠歌して情思を舒ぶ。

雜詩

王正長

朔風秋草を動かせば、邊馬歸心あり。胡寧ぞ久しく分析し、靡靡として忽ち今に至る。王事我が志に離り、殊隔して商參に過ぐ。昔往くとき、鷓鴣鳴き、今來るとき、蟋蟀吟す。人情舊郷を懷ひ、客鳥故林を思ふ。師涓久しく奏せず、誰か能く我が心を宣べん。

【大意】北風の秋草を拂ふを見ては、胡馬忽ち北歸の心を起す。況んや人に於てをや。我れ久しく親舊に離れて宦遊し、遲遲として今

- 【一】王正長。王讚、字は正長、晉の義陽の人。
- 【二】朔風。北風なり。
- 【三】邊馬。北方胡地に産せる馬。
- 【四】分析。親舊に離るること。
- 【五】靡靡。漸進の貌。遲遅といふが如し。
- 【六】殊隔。離隔なり。商參は二星の名、この二星常に相隔りて會ふことなし。
- 【七】鷓鴣。鶯なり。
- 【八】蟋蟀。こほろぎ。
- 【九】師涓。古の喜く琴を鼓せし人の名、韓非子に「衛の靈公新聲を鼓する者あるを聞きて之を悦び、師涓を召して曰く、新聲を鼓する者あり、其狀鬼神に似たり、子我が爲に聽きて之を寫せと、師涓曰く諾と、因つて端坐し琴を撫して之を寫す、明日報じて曰く、臣之を得たり」とあり。

日に至れり。是れ皆王事に志すの致す所にして、遂に此の離居をなしぬ。昔郷を出づる時は春なりしも、今や既に秋となれり。人の故郷を思ふは猶は鳥の舊林を戀ふが如し。我が心は師涓の如き明察の士にあらずんば知り難し。願くは師涓の如き人あり、我が心を宣通せんことを。

雜詩

棗道彦

吳寇未だ殄滅せず、亂象邊疆を侵す。天子上宰に命じ、蕃たらしむ。國を開いて元士を建て、玉帛賢良を聘す。予は荆山の璞にあらず、認りて和氏の場に登る。羊質にして虎文を服し、燕翼にして鳳翔を假る。既に任ふる所にあらざるを懼れ、彼の南路の長きを怨む。千里既に悠逸たり、路次關梁を限る。僕夫遠涉に罷れ、車駕山岡に困む。深谷下底なく、高巖穹蒼に暨ぶ。豊草滋潤を停め、霧露衣裳を沾す。玄林陰氣を結び、風ふかすして自ら寒涼なり。顧瞻して情感切に、惻愴

- 【一】棗道彦。名は據、字は道彦、晉の潁川の人、太尉賈充征吳都督となるや、辟して從事中郎となす。
- 【二】吳寇。吳主孫權。
- 【三】邊疆。晉の國境。
- 【四】上宰。宰相賈充を指す。
- 【五】蕃。藩に通ず、國家の藩屏とすること。
- 【六】元士。善士なり。
- 【七】玉帛。玉と絹、賢を聘する禮物。
- 【八】荆山。楚山なり。韓非子に「楚人和氏璞玉を楚山の中に得たり」とあり。
- 【九】悠逸。遠きこと。
- 【一〇】路次。途中なり。關梁は關所及び橋。



して心哀傷す。士生れて則ち弧を懸く、事あり四方に在り。安んぞ恆に逍遙するを得、端坐して閨房を守らん。義を引いて外情を割く。内感實に忘れ難し。

【二】僕夫。御者なり。  
【三】穹蒼。天なり。

【三】玄林。暗林なり。  
【四】惻愴。悲痛なり。

【大意】吳寇未だ滅亡せず、來りて我が邊境を侵す。天子乃ち賈太尉に命じ、漢陽に都督たらしむ。太尉因つて國を開きて善士を招き、玉帛を厚くして賢良を聘す。我れ不才にして謬りて登庸せられしも、羊にして虎皮を被り、燕にして鳳翔に倣はんとするが如し。常に重任に耐へざるを懼る。況んや道遠くして關橋の隔あり、谷深く巖高く、草に潤澤なく、衣は毒霧に沾ひ、林暗くして風寒きをや。心之が爲に益々悲傷す。然れども士生れて弓を門左に懸け、志四方に在るを示す。何ぞ安閑として閨房の樂に耽るを得んや。ただ道義を引いて外情を抑ふ。然も心中の離情亦忘れ難きものあり。

雜詩

左太冲

秋風何ぞ 冽冽たる、白露朝霜をなす。柔條旦夕に勁く、綠葉日夜に黄なり。明月 雲崖を

【一】冽冽。寒き貌。  
【二】柔條。柔き枝。

【三】雲崖。雲畔といふが如し。

出で、嗷嗷として素光を流す。軒を披いて前庭に臨めば、嗷嗷として晨鴈翔る。高志四海を局とし、塊然として空堂を守る。壯齒恆に居らず、歲暮常に慷慨す。

【四】嗷嗷。明なる貌。素光は白き光。  
【五】嗷嗷。鴈の聲。

【六】塊然。獨居の貌。  
【七】壯齒。少壯の年。  
【八】歲暮。老年なり。

【大意】此れ壯志の展ぶるを得ざるを傷む詩なり。今や寒風霜露の秋となり、條勁く葉黄ばみ、明月雲端に出で、鴻鴈南に飛ぶ。此景を觀て豈感なきを得んや。我れ壯志を抱き、天下を以て局小となし、終に志を遂げずして獨り空室を守る。然るに少壯幾時ならずして過ぎ、今衰老に至りて徒に慷慨するのみ。

雜詩

張季鷹

暮春 和風應じ、白日園林を照す。青條擡翠の若く、黃花散金の如し。嘉卉亮に觀あり、願ふに此れ久しく耽り難し。頸を延ぶるも良塗なく、足を頓めて 幽深に託す。榮と壯と俱

【一】張季鷹。張翰、字は季鷹、晉の吳郡の人。  
【二】和風應す。時節に應じて和風の吹くこと。

擡翠は翡翠の羽を聚めたること。  
【四】黃花。菜の花。  
【五】嘉卉。よき草。觀は好觀なり。



に去り、賤と老と相尋ぬ。歡樂顔を照さず、(八) 慘愴して謳吟を發す。謳吟するも何ぞ嗟及ばん、古人心を慰むべし。

【大意】 此れ老大的の歡樂すくなきを傷むなり。和風時に應じて吹き、白日園林を照し、枝葉緑を疊み、菜花黄金の如し。この好觀ありと雖も、榮あれば必ず衰あり、久しく之を樂み難し。故に出遊せんとするも良途なく、退いて陋巷の中に伏するのみ。人も亦然り、榮と壯と忽ち去り、賤と老と相尋いで來り、顔に歡樂の色なく、悲傷して詠歌す。然れども徒に悲むも亦益なし。ただ貧賤に甘んじ天命を樂める古人を思ひて、自ら慰むべきのみ。

雜詩十首

張景陽

秋夜涼風起り、清氣 暄濁を蕩す。蜻蛉階下に吟じ、(三) 飛蛾明燭を拂ふ。(四) 君子遠役に從ひ、佳人竒獨を守る。離居幾何時ぞ、燧を鑽りて忽ち木を改む。(五) 房櫓行迹なく、庭草 萋とし

【一】 暄濁。暖く汗れたる氣。蕩は洗ふこと。  
【二】 蜻蛉。蟋蟀なり。  
【三】 飛蛾。蛾は好んで燈火に集る。

【四】 君子。夫をいふ。  
【五】 佳人。婦人なり。竒獨は孤獨。  
【六】 燧を鑽り。燧は火なり、火を鑽るの木を改むとは久し

て以て緑なり。青苔空牆に依り、蜘蛛四屋に網す。物に感じて懷ふ所多く、沈憂 心曲に結ぶ。

【大意】 閨怨の詩なり。秋風起りて溽熱の氣を一洗し、蟋蟀階下に鳴き飛蛾燈火に集る。時に夫は遠征して在らず。其妻獨り空閨を守る。夫去りて既に久しく、室に影なく庭に跡なく、青苔牆を侵し蜘蛛網四檐に張る。此景を見て感を起し、深憂胸に滿つ。

【七】 房櫓。櫓は窓なり。房室といふが如し。行迹は足跡。

【八】 萋。茂る貌。  
【九】 心曲。心の底。

【大意】 心星西南に下り、天日西陸を行くの秋となれば、風日翠緑の林を照し、雨露蘭菊の叢に降り、暖氣凝りて肅殺の氣天地に滿ち、枝枯れて華落つ。人の海内に生るるも亦此の如し。死生の疾かなること、鳥の目前を過ぐるが如し。

【一〇】 大火。心星なり。坤維は西南隅。七月には大火西南に見ゆ。  
【二】 西陸。續漢書に、「日西陸を行く之を秋といふ」とあり。  
【三】 浮陽。日光なり。  
【四】 迴蕨。旋風なり。  
【五】 暄氣。暖氣なり。  
【六】 芳蕤。芳ばしき花。  
【七】 瀛海。大海なり。  
【八】 前脩。古の賢人。



孔子の川上に於て、逝く者は斯の如し、晝夜を舍かずと長嘆し、自ら奮勉せるは即ち此が爲なり。  
金風素節を扇ぎ、丹霞 陰期を啓く。騰雲涌煙に似、密雨散絲の如し。  
緑滋を含む。閑居して萬物を玩び、羣を離れて思ふ所を戀ふ。  
貢公の棊なし。高尙にして王侯を遣れ、道積りて自ら基を成す。至人は物に嬰らず、餘風時を染むるに足れり。

【大意】 己の隱棲の感を述べたる詩なり。秋風吹いて陰氣到り、白雲飛び密雨散じ、菊は黄花を開き草木潤澤あり。我れ閑居して此景を眺め、そぞろに友を思へども、机上に友の書信なく、庭に友の足跡なし。既に交友を絶ち、又自ら高尙にして王侯に仕へず、道を積んで身の基となす。夫れ達人は物に紛亂せられず、其餘風亦能く時人を感化するに足るものあり。

朝霞白日を迎へ、丹氣陽谷に臨む。翳翳として繁雲結び、森森として雨足散ず。輕風日の出づる處。  
【二七】 丹氣。赤氣なり。陽谷は日の出づる處。  
【二八】 翳翳。雲の蒸す貌。  
【二九】 森森。雨の散ずる貌。

勁草を推き、凝霜高木を疎す。密葉日夜に疎にして、叢林森として束ぬるが如し。疇昔は時の遅きを歎き、晩節には年の促るを悲む。歳暮れて百憂を懷き、將に季主に從つてトせんとなす。  
【一】 勁草。強き草。  
【二】 晩節。晩年なり。  
【三】 歳暮。衰老をいふ。  
【四】 季主。ト者の名、史記に「司馬季主は楚人なり、長安の東市にトす」とあり。

昔我れ章甫を資し、聊か以て諸越に適く。行き行いて幽荒に入れば、歐駱祝髮に從ふ。年を窮めて用ふる所にあらず、此貨將に安に設けんとする。瓊瓊璵璠に夸り、魚目明月を笑ふ。見すや郢中の歌、能否居然として別るるを。陽春は和する者なく、巴人は皆  
【四】 章甫。冠の名、莊子に「宋人章甫を資して諸越に適く、越人は髮を斷ち身を文ぐ、之を用ふる所なし」とあり。章甫は以て明德に喩ふ。  
【五】 諸越。越の國。流俗に喩ふ。  
【六】 歐駱。越王の姓號。祝髮は斷髮。  
【七】 此貨。此品、即ち章甫。  
【八】 瓊瓊。瓦なり。璵璠は美玉。  
【九】 魚目。魚の目玉。明月は寶珠なり。  
【十】 郢中の歌。郢は楚の都、戰國策に「宋玉曰く客郢中に歌ふ者あり、其始を下里巴人といふ、國中屬して和する者



下節なり。流俗多くは昏迷す、此理誰か能く察せん。

【大意】才を抱いて用ひられざるは、世に眞識なきに由るを述べ、以て自ら傷むなり。我れ章甫の冠を買入れ、之を賣らんとして越に往けり。

(明德を積みて世に用ひられんことを冀へるに喩ふ) 遠く國中に入れども、越人の風俗は斷髮にして冠を用ひず。故に終年の間一個も售れず。(時君の賢者を用ひざるに喩ふ) ああ我れ誤れり。今や世人は瓦を貴んで玉を賤み、魚目を賞して美珠を笑ふ。(時君の小人を以て賢となすに喩ふ) かの郢中の歌を見ずや、高尚なる調には和する者少く、卑俗なる調には和する者多し。賢者の用ひられずして、小人の貴ばるるは、古よりして然り。智識昏迷して是非顛到す。然も此理を悟る者なし。歎すべきの至なり。

【四二】陽春。高尚なる歌曲の名。國中屬して和する者數十人に過ぎずとあり。

【四三】巴人。俗調の名。下節は俗調といふが如し。

【四四】魯陽關。關の名。

【四五】流澗。澗は溪谷。

【四六】園木。合抱の木。

【四七】咆虎。ほゆる虎。

【四八】凄風。寒風なり。

【四九】百籟。大木の孔穴。風に激して聲をなすなり。

朝に魯陽關に登れば、狹路峭うして且つ深し。流澗萬餘丈、園木數千尋。咆虎窮山に響き、鳴鶴空林に聒し。凄風我が爲に嘯き、百籟坐に自ら吟ず。物に感じて思情

多く、險に在りて常心を易ふ。竭來不虞を戒め、轡を挺りて飛岑を越ゆ。王陽九折に驅り、周文岑峯に走る。阻を経ては遅るなきを貴ぶ。此理 來今に著る。

【大意】山路の險を述べて世路の險に喩ふ。魯陽關に登れば其路險にして狭く、溪谷深き萬餘丈、大木高さ數千尋なり、虎吼え鶴鳴き風籟自ら鳴る。此險阻を見て感慨を催し、顛墜を恐れて恆心を失ひ、警戒して高山を越ゆ。昔王陽は馬を驅りて九折坂を去り、文王は殺の險を過ぐるごと風雨を避くるが如し。是れ顛墜を避くるの道なり。此道傳りて今に存せり。

【五〇】常心。恆心なり。

【五一】竭來。去り來ること。不虞は不測の險なり。

【五二】飛岑。高山なり。

【五三】王陽。漢書に「琅邪の王陽、益州刺史となり部をめぐりて九折坂に至り、嘆じて曰く先人の遺體を奉じ、奈何ぞ數く此險に乗ぜんやと、病を以て去る」とあり。

【五四】周文。周の文王、公羊傳に「百里奚、蹇叔と其子を送り之を戒めて曰く、爾もし死せば、必ず殺の險を避けし所なり」とあり。何休註に「其處阻險也。故に文王之を過ぐれば驅馳して常に風雨を避くるが若し」とあり。岑峯は險阻の貌。

【五五】來今。今日なり。

【五六】鞞鼓。鞞は小鼓。

【五七】翩翩。動搖する貌。

【五八】羽檄。兵を徵す文書。

我又之に則り、顛墜の災を避けんとす。此郷は吾が地にあらず、此郭は吾が城にあらず。でては軍馬の陣を觀、入りては鞞鼓の聲を聞く。常に懼る 羽檄飛び、神武一朝に征せん

【大意】山路の險を述べて世路の險に喩ふ。魯陽關に登れば其路險にして狭く、溪谷深き萬餘丈、大木高さ數千尋なり、虎吼え鶴鳴き風籟自ら鳴る。此險阻を見て感慨を催し、顛墜を恐れて恆心を失ひ、警戒して高山を越ゆ。昔王陽は馬を驅りて九折坂を去り、文王は殺の險を過ぐるごと風雨を避くるが如し。是れ顛墜を避くるの道なり。此道傳りて今に存せり。

【五〇】常心。恆心なり。

【五一】竭來。去り來ること。不虞は不測の險なり。

【五二】飛岑。高山なり。

【五三】王陽。漢書に「琅邪の王陽、益州刺史となり部をめぐりて九折坂に至り、嘆じて曰く先人の遺體を奉じ、奈何ぞ數く此險に乗ぜんやと、病を以て去る」とあり。

【五四】周文。周の文王、公羊傳に「百里奚、蹇叔と其子を送り之を戒めて曰く、爾もし死せば、必ず殺の險を避けし所なり」とあり。何休註に「其處阻險也。故に文王之を過ぐれば驅馳して常に風雨を避くるが若し」とあり。岑峯は險阻の貌。

【五五】來今。今日なり。

【五六】鞞鼓。鞞は小鼓。

【五七】翩翩。動搖する貌。

【五八】羽檄。兵を徵す文書。



ことを。長鉄鞘中に鳴り、烽火、邊亭に列る。我が衡門の衣を捨て、更に縵胡の纓を被る。曠昔微志を懐き、帷幕竊に經し所なり。何ぞ必しも干戈を操らん、堂上に奇兵あり。衝を樽俎の間に折き、勝を制するは

- 【一】神武。天子なり。
- 【二】長鉄。劍の名。
- 【三】邊亭。邊驛なり。
- 【四】衡門。カブキ門なり、詩經に「衡門の下、以て棲遲すべし」とあり、故に隱者の服を衡門の衣といへり。
- 【五】縵胡の纓。軍服なり。
- 【六】帷幕。謀略を運らす所。
- 【七】樽俎。樽は酒樽、俎は肉を盛る具、杯酒談笑の間といふが如し。
- 【八】兩楹。賓主の位なり。

【大意】此れ從軍の詩なり。郷里を離れて遠く邊城に在れば、心搖搖として旌の風に翻るが如く、常に軍馬の陣、鞞鼓の聲を見聞し、羽檄一たび飛んで天子の親征を見んことを懼る。寇敵將に至らんとすれば、長劔必ず鞘中に鳴り、烽火列りて遠近を警戒す。我れ既に野人の服を脱ぎて軍装をなせり。昔微志を抱きて、籌を帷幄の中に運らせる經驗あり。何ぞ自ら干戈を執るをなさん。堂上に坐し奇策を以て敵を破るこそ即ち奇兵なり。杯酒談笑の間に衝を折き勝を制するは戦の上乗なり。巧遲は稱するに足らず、拙速なれば勝を得て名を著すに足る。

【大意】遠く邊地に宣するを苦みて、故郷を懐ふ詩なり。われ職を奉じて邊境に在り。常に軍隊の中に拘束せらる。著任せしは昨日の如くなるも、既に數月を経たり。況んや故郷は今や胡蝶南園に飛ぶ。流波舊浦を戀ひ、行雲故山を思ふ。閩越文蛇を衣、胡馬燕に渡らんことを願ふ。土風習ふ所に安んず。由來固に然るあり。

- 【一】神武。天子に朝するをいふ。こゝは單に職に供する意。
- 【二】戎旅。軍隊なり。羈束は
- 【三】望舒。月をいふ。
- 【四】閩越。南方の地名。文蛇は模様ある蛇。
- 【五】胡馬。北方胡地に産せる馬。燕は北方の國の名。

宇を窮岡の曲に結び、幽藪の陰に耦耕す。荒庭寂として以て閑なり、幽岫峭くして且つ深し。凄風東谷に起り、澗として南岑に興るあり。箕畢の期なしと雖も、膚寸にして自ら霖を成す。澤雉壟に登りて雉き、寒猿條を擁して吟す。磧壑人跡な

- 【一】耦耕。耕作なり。
- 【二】幽岫。幽遠の山。
- 【三】澗。雲の起る貌。南岑は南方の山。
- 【四】箕畢。二星の名。期は會なり。月と箕と會すれば風吹き、月と畢と會すれば雨ふる。
- 【五】膚寸。膚は四指の幅、寸は一寸。公羊傳に「石に觸れて出で、膚寸にして合し、朝をなへずして天下に彌きものは唯泰山の雲なり」とあり。



く、<sup>(七六)</sup>荒楚鬱として  
蕭森たり。未を投じ  
て<sup>(七九)</sup>岸垂に循ひ、時

霖は淫雨なり。  
【七六】荒楚。草木の叢生する處、蕭森は茂る貌。  
【七九】岸垂。岸邊なり。

【八〇】樵采。きこり。  
【八一】重基。山をいふ。  
【八二】道勝。道のすぐれたる者。  
陸沈は隠れて俗間にひそみ居

ること。  
【八三】竹素。典籍なり。  
【八四】翰墨。筆墨なり。

に<sup>(八〇)</sup>樵采の音を聞く。<sup>(八一)</sup>重基志を擬すべく、<sup>(八二)</sup>廻淵心を比ぶべし。眞を養ふは無爲を尙び、<sup>(八三)</sup>道勝は陸沈を貴ぶ。思を<sup>(八四)</sup>竹素の園に遊ばしめ、<sup>(八五)</sup>辭を<sup>(八六)</sup>翰墨の林に寄す。

【大意】己の隠居して道を樂むを述ぶ。われ屋宇を深山の隈に構へ、藪澤の間に耕作す。庭には草木自ら生じ、山は遠くして險なり。寒風東より來りて雲油然として起り、星月の會なきも膚寸にして忽ち風雨を成し、雉鳴き猿吟じ、人の來り訪ふなく、ただ草木の繁茂するあり。未を投じ岸邊に沿ひ、行きて樵者の歌を聞く。山の高きは以て志を擬すべく、淵の深きは以て心を比ぶべし。天真を養ふには無爲を尙び、道勝を得んと欲せば隱居に如くはなし。因つて古人の書を読み、文筆を弄して山中に在り。

【八五】黑蜺。黒蛇なり。淮南子に「蜺牛は驛毛にして廟牲に宜しきも、其の雨を致すに於ては黒蜺に若かず」とあり。

【八六】商羊。鳥の名、孔子家語に「齊に一足の鳥あり公朝に飛集す、齊侯犬に怪み使をして孔子に訪はしむ、孔子曰く

此名を商羊といふ、水祥なり、昔童兒其一脚を屈し兩臂を振起して跳るあり、且つ諺つて曰く、天將に大に雨ふらんと

【八七】飛廉。風の神。南箕は星の名。月此星と會すれば風吹

【八八】豐隆。雲の神。號屏は雨の神。

【八九】八極。八方の極。

【九〇】四溟。四海なり、天下といふが如し。

【九一】霖瀝。淫雨のふりそそぐこと。二句は二十日。

【九二】散漫。水の流ること。

【九三】九齡。九九年、堯の時九年の洪水あり。

【九四】水衣。苔なり。

【九五】洪潦。洪水なり。浩は大方なる貌。

【九六】昏墊。溺ること。

【九七】沈液。雨水なり。陳根は古き木根。

【九八】曲突。曲れる煙突。

【九九】環堵。小屋をいふ。

【一〇〇】尺燼。少しの薪。尋柱は

八尺の桂樹。戰國策に「薪桂よりも貴し」とあり。

【一〇一】紅粒。紅腐せる米。瑤瓊は美玉。

【一〇二】約。困窮なり。

【一〇三】田方。説苑に「子思、衛に居り緇袍裏なく、二句に九食す、田子方、人をして狐白裘を遺らしめ、其の受けさら

んことを恐れ、因つて之に謂つて曰く、吾れ人に假せば遂に之を忘る、吾れ人に與ふるは之を棄つるが如しと、子思辭して曰く、彼聞く忘と棄とは物を溝壑に遺つるが如しと、彼貧しと雖身を溝壑となすに忍びず、故に敢て當らずと、つひに受くるを肯んぜずし

【一〇四】約。困窮なり。

【一〇五】田方。説苑に「子思、衛に居り緇袍裏なく、二句に九食す、田子方、人をして狐白裘を遺らしめ、其の受けさら

【一〇六】贈。を榮とすと雖

【一〇七】約。困窮なり。

【一〇八】田方。説苑に「子思、衛に居り緇袍裏なく、二句に九食す、田子方、人をして狐白裘を遺らしめ、其の受けさら

【一〇九】約。困窮なり。



も、溝壑の名をなす  
を慚ぶ。志を於  
陵子に取り、足るを  
黔婁生に比す。

とあり。  
【一〇三】於陵子。陳仲子なり、於  
陵の地に隱居し、貧居して屈  
せず。  
【一〇四】黔婁生。賢人の名、魯侯  
用ひて相となさんとすれども

辭して就かず。

【大意】窮乏を忍び清廉を守るをいふ。今や雲結んで收まらず、霖雨二十日にわたり、流水漫漫として、堯の九年の洪水に次ぐ。其害甚しく人皆溺れんとし、草木悉く腐萎し、煙突も水に流され、路上に車聲なく、家頽れ垣傾き、尺薪は尋桂より貴く米は玉よりも貴し。ただ君子は窮約に在りと雖も、真正の志に差はず、他人の惠與を受くるを屑しとせず。貧苦を忍んで清廉を守らんことを期す。

時興の詩

盧子諒

【一】時興。時物に感じて情を興喻するなり。亦雜詩の類なり。  
【二】疊疊。進み行く貌。圓象  
【三】悠悠。遠き貌。方儀は地なり。  
【四】忽忽。速なる貌。

【一】時興。時物に感じて情を興喻するなり。亦雜詩の類なり。  
【二】疊疊。進み行く貌。圓象

【一】時興。時物に感じて情を興喻するなり。亦雜詩の類なり。  
【二】疊疊。進み行く貌。圓象

かた伊と洛とに臨む。凝霜蔓草を霑し、悲風林薄を振ふ。披撮として芳葉零ち、榮榮として芬華落つ。下泉冽清を激し、曠野遼索を増す。高きに登りて退荒を眺め、極望すれば崖嶒なし。形變時に隨つて化し、神感物に因りて作る。澹乎たり至人の心、恬然として玄漠を存す。

- 【五】蕭蕭。よもぎ及び菽なり。詩經に「蕭蕭在雨」とあり。
- 【六】芒。北邙山なり。洛陽の北に在り。
- 【七】伊洛。二川の名。
- 【八】林薄。草木の叢生する處を薄といふ。
- 【九】披撮。葉の落つる聲。
- 【一〇】榮榮。垂るる貌。芬華は芳しき花。
- 【一一】下泉。流泉なり。冽清は寒清なり。
- 【一二】曠野。廣き野原。遼索は荒涼なり。
- 【一三】退荒。遠き野原。
- 【一四】崖嶒。限際なり。
- 【一五】澹乎。安き貌。至人は達人といふが如し。
- 【一六】恬然。靜なる貌。玄漠は虚無の道。

【大意】天地轉運して歲將に暮れんとする時北のかた邙山と黄河とを越え、南のかた伊水と洛水とに遊べば、風霜寒涼にして、葉落花凋み、水流清澈にして曠野荒涼たり。高處に登りて遠く望めば、四方茫茫として限際なし。夫れ萬物は時に隨つて形を變じ、人心之を觀て感を起す。ただ達人は心常に安靜にして虚無の道を抱く。故に物に因りて悲喜を生ずることなし。

雜詩二首

陶淵明



廬を結んで人境に在り、而も車馬の喧なし。君に問ふ何を能く爾る。心遠くして地自ら偏なり。菊を東籬の下に采り、悠然として南山を望む。山氣日夕佳く、飛鳥相與に還る。此に還りて眞意あり、辯せんと欲すれば已に言を忘る。

【大意】 貧に安んじ道を樂むの眞意を述ぶ。我れ居室を構へて俗界に居れども、貴人の來り訪ふ者なれば、車馬の喧騒を覺えず。是れ他に在らず、我が心超遠にして、物慾の蔽ふ所となるざるを以て、自然に閑靜にして偏僻の地に在るが如きなり。菊花を籬の下に採り、悠然として南山を望めば、山氣夕佳に佳色あり、飛鳥相與に時に還るを見る。此れ皆天眞の自然を得たるものなり。我れ此眞意を言はんと欲すれども、吾亦眞意の中に冥合せるを以て、其言を忘れて言ふ能はず。

- 【一】 喧。騒がしき物音。
- 【二】 君。淵明自ら謂ふ。自ら問を發し、下旬之に答ふるなり。
- 【三】 偏。偏僻なり。
- 【四】 悠然。自得の貌。南山は居宅の南に在る山。望の字一本見に作る。
- 【五】 衰露。露にうるほるま。
- 【六】 忘愛の物。酒をいふ。
- 【七】 達世。世情に通達せること。
- 【八】 一觴。一杯なり。
- 【九】 東軒。東の櫺。嘯傲は嘯歌して世に傲ること。

秋菊佳色あり、衰露其英を撥る。此の忘愛の物に泛べて、我が達世の情を遠くす。一觴獨り進むと雖も、盃盡きて壺自ら傾く。日入りて羣動息み、歸鳥林に趨きて鳴く。東軒の下に嘯傲し、聊か復た此生を得たり。

【大意】 飲酒の眞意をいふ。菊に佳色あり。故に露を帯びしままに其花を採り、酒に泛べて之を飲み、以て遠く世情を遺る。一觴獨り自ら進むれば、杯盡きて壺自ら傾く。衆物の羣動する者日入りて皆息み、鳥の飛ぶに倦みて歸る者林に趨きて喧しく鳴く。我れ亦嘯歌して傲を東軒の下に寄せ、聊か此生を樂むを得たり。

貧士を詠ず

陶淵明

萬族各々託するあり。孤雲獨り依るなし。暖暎として虚中に滅ゆ。何の時にか餘輝を見ん。朝霞宿霧を開き、衆鳥相與に飛ぶ。遲遲として林を出づる翮、未だ夕ならざるに復た來り歸る。力を量りて、故轍を守る。豈寒と饑とにあらざらんや。知音苟に存せず、已ぬる矣何の悲む所ぞ。

【大意】 萬物各々依託する所あれども、孤雲は迥に山を出でて、獨り依託する所なく、暗昧にして空中に消滅し、復た光輝あることなし。(貧士の身を託する所なく、富榮の望なきに喩ふ)天明くれば衆鳥相率ひて飛

- 【一】 萬族。萬物なり。
- 【二】 孤雲。貧士に喩ふ。
- 【三】 暖暎。暗き貌。虚中は空中。
- 【四】 宿霧。夜來の霧。
- 【五】 故轍。從來の業跡。
- 【六】 知音。知己なり。



べども、困鳥獨り遅遅として林を出で、未だ夕ならずして歸り來る。(衆人は各々營求する所あれども、貧士は力足らずして衆人と競争する能はざるに喩ふ。)あゝ貧士は己の微力なるを知り、其舊跡を守りて營求せず、常に飢寒に苦めり。然りと雖も、世既に知己なし。悲むと雖も何の益あらんや。宜しく自ら安んずべきなり。

山海經を讀む

陶淵明

孟夏草木長じ、屋を繞りて樹扶疎たり。衆鳥託するあるを欣び、吾亦吾が廬を愛す。既に耕して亦已に種ゑ、且く還りて我が書を讀む。窮巷深轍を隔て、頗る故人の車を廻す。歡んで言に春酒を酌み、我が園中の蔬を摘む。微雨東より來り、好風之と俱にす。泛く周王の傳を覽流く山海の圖を觀る。俛仰して宇宙を終ふ。樂ますして復た何如せん。

【大意】此詩凡て十三首あり、此れ其第一首

- 【一】 山海經。衆山百川草木禽獸を記せる書なり。
- 【二】 孟夏。初夏なり。
- 【三】 扶疎。枝葉の四方にひろがる貌。
- 【四】 深轍。大路は車馬の往來多し、故に轍跡深し。窮巷は
- 【五】 蔬。野菜なり。
- 【六】 周王の傳。穆天子傳なり、周の穆王が天下を周遊せし事を記せし書。
- 【七】 俛仰。俯仰に同じ。暫時をいふ。

なり。故に通首空寫し、只末處に於て題を點す。初夏の候、草木既に長じ、屋を繞りて枝葉茂り、衆鳥此の茂林の扶疎たるを欣び、我も亦其中の居を愛す。耕種既に終り、室に歸りて書を讀む。我が居幽僻にして大路を隔つ。故に友の我を訪ふ者遠く車を廻らして來り到る。因つて共に春酒を酌み園蔬を煮て食ふ。時に微雨好風を帯びて來る。乃ち穆天子傳を通覽し、次に山海經の畫圖を觀る。暫時にして天下の珍奇を見盡すを得て、其樂言ふべからず。

七月七日夜、牛女を詠す

謝惠連

落日欄檻に隱れ、升月簾櫳を照す。團團たり葉に滿つる露、析析たり條を振ふ風。足を蹀んで、廣除に循ひ、目を瞬ぎて、曾穹を瞻る。雲漢に靈匹あり、牟を彌りて相從ふを闕く。遐川昵愛を阻て、脩渚清容を曠うす。杼を弄して、藻を成さず、轡を聳げて、前蹤に驚す。昔離れて秋已に兩び、今聚りて夕雙な

- 【一】 牛女。牽牛、織女の二星、七月七日の夜、天河を渡りて相會すといふ。
- 【二】 欄檻。のきはしら。
- 【三】 升月。のぼる月。櫳は窓。
- 【四】 團團。露の貌。
- 【五】 析析。風の聲。
- 【六】 廣除。廣き庭。
- 【七】 曾穹。天なり。
- 【八】 雲漢。あまのがは。靈匹は牛女二星の相配偶すること。
- 【九】 遐川。長き川、天河なり。昵愛は親愛。
- 【一〇】 脩渚。長き渚。清容は麗貌。
- 【一一】 藻。あや模様。
- 【一二】 前蹤。前路なり。
- 【一三】 雙。二なり、今夜聚りて



し。傾河廻轉し易く、款情久しく惊み難し。沃若として靈駕旋り、寂寥として雲幄空し。情を留めて華寢を顧み、心を遙にして奔龍を逐ふ。沈吟して爾が爲に感ず。情深くして意彌々重る。

忽ち別る、二夜をかきぬる能はず。  
【二】傾河。天河の傾くこと。  
廻轉は廻轉。

【五】款情。愛情なり。  
【六】沃若。龍の行く貌。  
【七】雲幄。雲の帳。  
【八】爾。牛女を指す。

【大意】日入りて月出で、露結び風涼しき時、廣庭を歩して高天を望めば、天河の中に牛女二星あり。年を終へて相會合するを得ず。長川その親愛を隔て、長渚その美容を隔つ。織女は終日機杼を弄すれども章を成さず、龍車に駕して前路に驅る。昔離れて今會ふまで、秋に遇ふこと既に再なるに、今會ひて忽ち別れ夜を重ねる能はず。天河廻轉して夜將に明けんとし、愛情久しく樂み難し。各々龍車を旋らして歸り、雲帳空しく残る。情を留めて寢處を顧戀し、心を遠くして龍車を驅る。吾れ之を觀て深慨を生ず。

擣衣

謝惠連

衡紀度を淹むるなく、晷運條々催すが如し。白露園菊を滋くし、秋風庭槐を落す。

【一】擣衣。きめた。  
【二】衡紀。玉衡星と牽牛星。

度は廻轉の度。  
【三】晷運。日の運行。

【四】肅肅。羽の動く聲。莎雞は蟋蟀。  
【五】烈烈。聲の多き貌。寒蟬は蟬の類。  
【六】空幕。空圍の帳。  
【七】霄月。天空の月。  
【八】裳服。衣服なり。戒は整なり。  
【九】端飾。正しく装ふこと。招摺は相携へて出づること。  
【一〇】北房。婦人の室。  
【一一】金。金佩なり。  
【一二】肅肅。羽の動く聲。莎雞は蟋蟀。  
【一三】雙題。二人の額、砧を打つには二人相對して打つ。  
【一四】執素。白絹。  
【一五】君子。夫をいふ。  
【一六】笥中。箱の中。刀は剪刀。  
【一七】萬里の衣。遠方に居る夫に贈る衣。  
【一八】幽絨。密封なり。  
【一九】腰帶。衣の長短廣狹なり。疇昔は舊日。  
【二〇】是非。適否なり。

【大意】日星運行して歲月移り、今や白露西風の秋となり、園菊茂り槐葉落ち、蟋蟀羽を振ひ寒蟬啼き、夜陰の氣空帷に結び、月閨中を照せり。時に美人衣裳を整へ、相携へて出で、玉釵を戴き金佩を鳴らして南庭を歩し、將に衣を搗たんとす。忽ちにして砧響杵聲高堂の間に起り、其聲誠に哀し。兩人相對して擣つこと暫時にして、白絹ここに成る。乃ち之を裁縫して遠方の夫君に贈る。美人手自ら箱に收め、夫君



の自ら開くを待つ。衣の長短は全く舊日に準せり、故に今能く身に適ふや否やを知らず。

南樓の中、遅つ所の客を望む

謝 靈 運

【一】 杳杳。遠き貌。  
 【二】 漫漫。長き貌。  
 【三】 三五。十五夜なり。  
 【四】 圓景。圓月なり。  
 【五】 佳人。君子といふが如し、前文の來客なり。  
 【六】 際攜。乖離なり。  
 【七】 物。見る所の景物。悽戚は愛ふること。  
 【八】 孟夏。初夏なり。  
 【九】 晦明。夜の明るること。

【一〇】 瑤華。麻の花なり、其色白し故に瑤に比す、此花を服食すれば長壽を致すべし、故に以て美となして遠人に贈らんとするなり。  
 【一一】 蘭若。香草なり。以て君子に比す、故に摘みて人に贈る。  
 【一二】 贈問。贈遺なり、離析。離居なり。  
 【一三】 離析。離居なり。  
 【一四】 良覲。良友との會合。

【大意】 年冉冉として漸く老い、人生の長路漸く迫るを覺ゆ。乃ち樓に登り江に臨み、友の來るを待ちて以て憂思を慰めんとす。初め友と別る時、十五日を以て會合せんと期し、其期既に至れば自ら開くを待つ。衣の長短は全く舊日に準せり、故に今能く身に適ふや否やを知らず。

ども友は未だ來らず。因つて此の離別を怨み、景を見て悲を起す。夏夜短しと雖も、友を待てるを以て其長きこと一歳の如し。瑤華未だ開かざれば、折りて贈るべからざれども、蘭若は屢々之を摘みて、將に友に贈らんとす。然も道遠くして贈る能はず、何を以てか離情を慰めん。首を搔いて行路の人を訪ひ、良友に會せんことを冀ふ。

田南に園を樹て流を激ぎ三援を植う

謝 靈 運

【一】 援。衛なり。屋舎の傍に樹木を植えて屏牆となすなり。  
 【二】 樵隱。樵者と隱者。  
 【三】 氛雜。穢氣喧雜。  
 【四】 清曠。清淨廣闊。  
 【五】 北阜。北の岡。  
 【六】 權。木の名、むくげ。列塘は周牆。  
 【七】 靡迤。細走の貌。下田は山下の田。  
 【八】 迢遞。高遠の貌。  
 【九】 蔣生。蔣詡、字は元卿。杜陵に隱る、舍中の三徑唯羊仲、求仲之に従つて遊ぶ、二仲は皆廉を挫き名を逃れし人なり。  
 【一〇】 賞心。友人なり。



心忘るべからず、妙善冀くは能く同じからんことを。

【大意】樵者と隱者と俱に山に居れども、其の爲す所同じからず。其の同じからざるも亦一様にあらず。我の病を養ふが如き者も、亦山園の中に在り。園中に穢氣喧雜を屏け、居を清曠にトして長風を招き、北は岡を負ひて室を占め、南は江に面して門を設け、溪水を引きて井水を汲むに代へ、槿を挿して周牆となし、羣木既に門に列り、衆山また窓に當りて見ゆ。或は走りて山下の田に趨き或は遠く高峰を瞰る。欲を寡くせんことを欲して勞役をなさず、營室の事亦己の力を用ふることに罕なり。唯三徑を開きて、良友の來り訪ふを待つ。交友の樂は病むと雖も忘るべからず、妙善の道希くは古人と之を同うせん。

三 齋中に書を讀む

謝 靈 運

昔余 京華に遊びしも、未だ嘗て 丘壑を廢てす。矧や乃ち山川に歸り、心跡 雙ながら寂漠たるをや。虚館 諍訟絶え、空庭 鳥雀來る。疾に臥して 暇豫豊に、翰墨時に間作る。懷抱

- 【一】 齋中。齋は靜室、即ち永嘉郡齋なり。
- 【二】 京華。帝都なり。建康をいふ。
- 【三】 丘壑。山水の樂なり。
- 【四】 心跡。心及び事。
- 【五】 暇豫。閑樂。
- 【六】 翰墨。文詩なり。
- 【七】 懷抱。心なり、古今を觀るとは書を讀むをいふ。

古今を觀、寢食 戲謔を展ぶ。既に沮溺の 苦を笑ひ、又子雲の 閣を晒ふ。執戟亦以に疲る。耕稼豈云に樂まんや。萬事 竝び歡び難し。達生 幸に託すべし。

【大意】余は昔帝都に宦遊せしも、未だ嘗て山水の樂を忘れず。況んや今山川に歸り、心と事と共に閑なるをや。館に諍訟の事なく、庭に鳥雀の遊ぶあり。疾を養ひて閑樂多く、興に觸れて詩文を作り、書を讀んで古今を知り、寢食して戲言を弄し、長沮桀溺耦耕の事(論語に出づ)を讀みて其苦を笑ひ、揚雄(字は子雲)が閣上より自ら投じて死せる事(漢書に出づ)を讀みて其愚を晒ふ。執戟(揚雄)は既に勞苦多し。耕作(沮溺)も亦樂事にあらず。世間の萬事は歡樂を并せ得ること難し。ただ達生の理即ち身を託するに足るのみ。

- 【八】 戲謔。たはむれ言。
- 【九】 執戟。揚子雲郎となり、戟を執りて宿衛す。

- 【一〇】 達生。人生の眞情に通達して虚無恬淡の生活をなすこと。

三 石門に新に住する所を營む、四面は

高山廻溪石瀨茂林 脩竹なり 謝 靈 運

險に躋りて幽居を築き、雲を披て石門に臥す。苔滑かにして誰か能く歩せん、葛弱くして豈捫るべ

- 【一】 石門。永嘉郡に在り。
- 【二】 脩竹。脩は長なり。



んや。嬋嬋として秋風過ぎ、(四) 萋萋として春草繁し。(五) 美人遊んで還らず、佳期何に由りてか敦うせん。芳塵瑤席に凝り、(七) 清醕金樽に滿つ。(八) 洞庭空しく波瀾、桂枝徒に攀翻。結念(九) 霄漢に屬し、(一〇) 孤景與に談るるなし。俯して石下の潭に濯ぎ、仰いで(一一) 條上の猿を看る。早に(一二) 夕飈の急なるを聞き、(一三) 晩に朝日の(一四) 噉たるを見る。崖傾きて光留り難く、林深くして響奔り易し。感往きて(一五) 慮復るあり、理來りて情存するなし。庶くは特(一六) に日用に乗じ、以て(一七) 營魂を慰するを得んことを。(一八) 衆人の爲に説くにあらず、冀はくは智者と論せん。

- 【三】 嬋嬋。風の吹く貌。
- 【四】 萋萋。草の盛なる貌。
- 【五】 美人。君子なり、友を指す。
- 【六】 佳期。會合なり。
- 【七】 清醕。酒なり。
- 【八】 洞庭。湖の名。此句秋の至れるをいふ。楚辭に「洞庭波たちて木葉下り、桂枝を攀波たちて木葉下り、桂枝を攀
- 【九】 霄漢。天空なり。
- 【一〇】 孤景。孤影なり。
- 【一一】 條上。枝の上。
- 【一二】 夕飈。夜風なり。
- 【一三】 噉。日の初めて出づる貌。
- 【一四】 營魂。心ないふ。
- 【一五】 衆人。俗人なり。

【大意】 此れ友を懷ふ詩なり。我れ山雲の間に幽居を構ふ。其地は石上苔滑かにして到り易からず、葛藟細くして攀づべからず。草木常に萋萋として塵俗の氣なし。吾が友は遠遊して還らず。何れの時か會合するを得ん。人來らずして輕塵席に集り、友を待ちて酒樽に滿てり。洞庭波たちて秋季至れども、友人還らずして與に桂樹を攀づべからず。天を仰いで憂を結び、孤影を顧みて友を懷ふ。林暗くして朝にも風夜の如く、

山高くして夕にも日朝の如し。崖傾いて日光久しく留り難く、林深くして風奔るが如し。此を觀て感慨反復し、物理を悟りて情乃ち安し。庶くは恬淡無爲にして自然に任せ、以て我が心を慰むるを得ん。此道は俗人と語るべからず、智者と論せんことを思ふ。友よ願くは早く來り遊べ。

雜詩一首

王景玄

【一】 思婦高臺に臨み、長く想ひて(二) 華軒に憑る。絃を弄すれども曲を成さず、(三) 哀歌して(四) 苦言を送る。

箕箒江介に留り、(五) 良人鴈門に處る。詎ぞ無衣の苦を憶はん、但(六) 狐白の温かなるを知る。日暗れて牛羊下り、野雀空園に滿つ。(七) 孟冬寒風起り、(八) 東壁正に中昏す。(九) 朱火獨り人を照し、景を抱いて自ら愁怨す。誰か知らん(一〇) 心曲の亂るるを、思ふ所論すべからず。

【大意】 思婦あり。高臺に登り鉤欄に憑りて夫を想ひ、絃歌すれども曲調を成さず。唯苦

- 【一】 王景玄。王徽、字は景玄、宋人なり。
- 【二】 思婦。遠行の夫を思ふ妻。
- 【三】 華軒。樓の鉤欄。
- 【四】 苦言。相思の苦を述ぶる言。
- 【五】 箕箒。箒と箒、婦人の執りて掃除する具。江介は江間なり。
- 【六】 良人。夫をいふ。鴈門は北方の郡名。
- 【七】 狐白。裘なり、狐の腋の皮を以て作る。
- 【八】 孟冬。初冬なり。
- 【九】 東壁。星の名。中昏とは夕に正南に見ゆること。
- 【一〇】 朱火。燈なり。人とは妻自ら謂ふ。
- 【一一】 心曲。心緒といふが如し。



言を漏すのみ。身は箕箒を執りて江間に留まり、夫は征成して北塞に在り。夫は狐白裘の温きを著て我が無衣の苦を憶はざらん。日暮れて牛羊山を下り、鳥雀亦時に歸り、各々その栖息する所に安んずれども、われ獨り空間に在り、冬風の聲を聞き星斗の影を望み、獨り燈下に愁怨すれば、心緒亂れて言ふべからず。

數詩

鮑明遠

一身關西に仕へ、家族山東に滿つ。二年車駕に從ひ、甘泉宮に齋祭す。三朝國慶畢り、休沐して舊邦に還る。四牡長路を曜かし、輕蓋飛鴻の若し。五侯相餞送し、高會して新豐に集る。六樂廣坐に陳り、組帳春風に揚る。七盤長袖を起し、庭下歌鐘を列ぬ。八珍彫俎に盈ち、綺肴紛として錯重す。九族共に瞻遲し、賓友微容を仰ぐ。十載學就るなく、

- 【一】三朝。正月元日なり、歳の朝、月の朝、日の朝なればなり。國慶は朝會の儀式。
- 【二】休沐。休暇を賜ること。舊邦は故郷。
- 【三】四牡。四馬なり。
- 【四】輕蓋。輕き車蓋。
- 【五】五侯。漢の成帝悉く舅王譚、王立、王根、王逢、王商を封じて列侯となす、世に之を五侯といふ。ここは王公と
- 【六】新意。邑の名。
- 【七】六樂。六代の音楽。
- 【八】組帳。とばり。
- 【九】七盤。舞の名。
- 【一〇】八珍。八種の珍味。彫俎は彫飾を施したる器。
- 【一一】綺肴。佳肴なり。
- 【一二】九族。己の親族。瞻遲は望み待つこと。
- 【一三】微容。美姿なり。

【二】善宦。朝通す。

【四】十載。十年なり。

【五】善宦。高官なり。

【大意】我來りて關西に仕へ、家族は留りて山東（明遠は東海の人なり）に在り。二年車駕に從ひて甘泉宮に祭り、三朝の儀終りて休暇を賜り、故郷に歸る。駟馬疾走すること飛鷹の如し。王侯送別の宴を新豐邑に設け、歌舞音楽を奏し、珍味佳肴座に滿ち、親族舊友亦我を迎へて美姿を仰ぐ。我れ學ぶこと十年にして、學業成らずと雖も、幸にして此の高官を得たり。

月を城の西門二廨中に翫ふ

鮑明遠

始め西南の樓に出で、織織として玉鉤の如し。末に東北の墀に映じ、娟娟として蛾眉に似たり。蛾眉。珠櫳に蔽はれ、玉鉤。瑣窓に隔る。三五二八の時、千里君と同うす。夜移り。衡漢落れば、徘徊す帷戸の中。歸華先づ露に委し、別葉早く風に辭す。客游苦辛を厭ひ、

- 【一】廨中。廨は役所なり、時に明遠は秣陵令たり。
- 【二】織織。細き貌。玉鉤は玉のかぎ。
- 【三】墀。石を敷きたる庭。階上に設く。
- 【四】娟娟。美好の貌。蛾眉は婦人の眉。
- 【五】珠櫳。珠を以て飾りし大窓。
- 【六】瑣窓。瑣文を畫きし窓。
- 【七】三五。十五夜。二八は十六夜。
- 【八】衡漢。衡は北斗星、漢は天河。
- 【九】徘徊。月光のゆらゆらす



仕子飄塵に倦む。(三) 休澣して公よりする日、宴慰して私に及ぶの辰。(四) 蜀琴白雪を抽んで、郢曲陽春を發す。肴乾けども酒未だ缺まず、金臺夕淪を啓く。軒を廻らして輕蓋を駐め、酌を留めて情人を待つ。

【大意】 月初め西南に出で、細くして玉鉤の如し。後漸く升りて東北の階に映じ、美人の眉の如し。遂に欄檻に蔽はれ、窓牖に阻てらる。若夫れ十五十六夜に至れば、皎皎として千里を照し、離居の人も同じく之を仰ぐを得べく、更闌なるに至れば其光帷戸の中に廻旋す。月を翫ぶの時草木の花葉を見れば、皆早く風露に委して落つ。人も亦かくの如く、微より著に至り、終に衰謝するなり。宦遊の身は既に風塵の苦に倦めり。休暇を得て自宅に歸れば、琴を抱きて陽春白雪の曲を奏し、以て自ら慰む。肴既に乾けども酒未だ止まず。金臺の漏水漸く滴りて夜將に盡きんとす。因つて車を廻らして將に歸らんとし、復た車を駐めて酒を酌み、遠行の友を思ふ。

- 【一〇】 歸華。落ちて本に歸る花。
- 【一一】 別葉。落ちて枝に離るる葉。
- 【一二】 仕子。宦遊の人。
- 【一三】 休澣。休暇なり。公は役所。
- 【一四】 私。私宅なり。及ば在なり。
- 【一五】 蜀琴。琴なり。蜀は國名。
- 【一六】 白雪は曲の名。
- 【一七】 郢曲。樂曲なり。郢は地名。陽春は曲の名。
- 【一八】 金臺。一本金臺に作る。刻漏水を貯ふるもの、銅を以て之を作る。故に金臺といふ。夕淪は夜の波。
- 【一九】 輕蓋。前詩に見ゆ。情人。友人なり。

始めて尚書省を出づ

惟ふ昔 休明に逢ひ、(一) 十載雲陛に朝す。既に金閨の籍を通じ、復た瓊筵の醴を酌む。(二) 宸景照臨を厭ひ、昏風繼體に淪む。(三) 紛虹朝日を亂し、濁河清濟を穢す。(四) 口を防ぐは猶ほ寛政なり、茶を餐ひて更に薺の如し。(五) 英衰人謀を暢べ、文明固に天啓。(六) 青精紫軟を翼け、黃旗朱邸を映す。還りて司隸の章を

観、復た東都の禮を見る。(七) 中區咸已に泰に、輕生諒に昭洒す。事に趨りて宮闕を辭し、筆を載せて旌檠に陪す。(八) 巴里疏蕪に向ひ、寒流自ら清泚な

- 【一】 尙書省。官署の名、時に玄暉は尙書殿中郎たり。
- 【二】 休明。徳の美明なる人の意、齊の武帝を指す。
- 【三】 十載。十年なり。
- 【四】 金閨。金門なり、名籍を門に懸け乃ち出入を通ず、所謂禁門なり。
- 【五】 瓊筵。天子羣臣を宴する席。醴は酒。
- 【六】 宸景。宸は天帝の居、景は日、因つて天子に喻ふ。
- 【七】 昏風。亂風といふが如し。

謝 玄暉

繼體は繼嗣なり。【八】 紛虹。邪陰の氣なり。【九】 濁河、清濟、共に川の名。【一〇】 口を防ぐ。周の厲王暴虐にして國人を殺し以て誘者を止む、召穆公諫めて曰く、人の口を防ぐは川を防ぐより甚しと、王之を聽かず。【一一】 英衰。衰は三公の服なり、明帝を謂ふ、帝初め尙書令たりしを以てなり。【一二】 青精。星の名、齊は木徳なり、故に此星之を翼く。紫軟は天子の車。【一三】 黃旗。瑞雲なり。朱邸は明帝の居る所。【一四】 司隸。更始將軍劉秀(後漢の光武帝)を以て司隸校尉となす、三輔の府吏皆秀を洛陽に迎ふ。章は儀なり。【一五】 東都。洛陽なり。【一六】 中區。中國なり。【一七】 輕生。下民をいふ。昭洒は昭明洗滌なり。【一八】 筆を載せ。明帝、玄暉を以て尙書殿中郎より諮議とな



り。(三) 衰柳尙ほ沈沈たり、凝露方に泥泥たり。零落して友朋を悲み、歡虞して兄弟を謙す。既に丹石の心を乗る。寧んぞ素絲の涕を流さんや。此に乗じて終に蕭散し、竿を深澗の底に垂れん。

！記室を領せしむ。旌柴は門の列戟。  
【一九】 邑里。郷里なり。  
【二〇】 清泚。水の清き貌。  
【二一】 衰柳。自ら喩ふ。沈沈は茂盛の貌。  
【二二】 凝露。君恩に喩ふ。泥泥は沾ふ貌。

【三】 歡虞。歡娛なり。  
【四】 丹石。移らざるをいふ。呂氏春秋に「石は破るべくして其堅を奪ふべからず、丹は磨すべくして其赤を奪ふべからず」とあり。

【三】 素絲の涕。素絲は白絲なり、淮南子に「墨子練絲を見て泣く、其の以て黄にすべく以て黒にすべきが爲なり」とあり。  
【六】 蕭散。志を肆にする事。

【大意】 我れ昔明君(齊の武帝)に逢ひ、陛下に侍すること十年、禁門に出入し盛宴に興るを得たり。武帝の崩するや、鬱林王位に即く。然も昏亂淪溺して武帝の體を繼がず。邪陰の氣朝日を蔽ひ、濁河の水清濟の流を穢す。(鬱林王の昏亂に喩ふ) 周の厲王の暴虐も之に比すれば、猶ほ寛政となすべく、民其政に苦むこと茶を食ふよりも甚し。時に明帝丞相として國政を輔けしが、遂に民望に従つて帝位に即く。明帝文明の徳は、實に天の啓く所なり。故に其の位に即かんとするや、星雲の瑞現はれ、民の之を迎ふること、司隸校尉たる光武を洛陽に迎へたる儀禮に同じ。かくて聖政下民に流通し、穢濁を昭洗せり。我れ又文吏の職を以て陛下に仕へ、功の成れるを見て將に

れん。

郷里に歸らんとす。今や我が郷里は人物漸く疎に、田園亦荒れんとし、ただ寒流の自ら流るるのみ。我れ衰老せりと雖も、尙は天子の恩顧を蒙り、常に洪澤に沾へり。郷友の漸く零落せるを悲み、歸りて兄弟と歡を盡さんことを思ふ。我れ既に忠貞の志を執りて變移することなし。ここに志を肆にして竿を垂れ魚を釣り、悠悠自適せんことを思ふ。

中書省に直す

謝玄暉

紫殿肅として陰陰たり、形庭赫として弘敞なり。風は萬年の枝を動かし、日は承露の掌に華し。玲瓏として綺錢を結び、深沈として朱網に映ず。紅藥階に當りて翻り、蒼苔砌に依りて上る。茲に言鳳池に翔り、鳴珮清響多し。信に美なれども吾が室にあらず、中園に偃仰せんことを思ふ。朋情以て鬱陶たり、春物方に駘蕩たり。安んぞ

【一】 直。役所に宿直すること。  
【二】 紫殿。天子の宮殿。肅は嚴なり。陰陰は沈靜なる貌。  
【三】 形庭。禁中の朱塗の庭。赫は盛なり。弘敞は廣大なり。  
【四】 萬年。木の名。  
【五】 承露。高臺を起し、仙人の形を作り、掌を以て盤を承け、盤を以て甘露を承くるなり。  
【六】 玲瓏。鮮明なる貌。綺錢

は綺文の連錢をなせるもの。宮殿の飾なり。  
【七】 朱網。宮殿の飾。  
【八】 紅藥。赤き芍藥。  
【九】 砌。階段の石疊。  
【一〇】 鳳池。中書省をいふ。  
【一】 鳴珮。佩ぶるところの玉なり。  
【三】 偃仰。俯仰なり。  
【三】 朋情。朋友を思ふ情。鬱陶は憂結びて解けざる貌。



凌風の翰を得て、聊か山泉の賞を恣にせん。

【大意】 此れ中書郎たりし時の作。省中に在

りて歸隱を思ふなり。宮殿嚴靜にして彤庭廣濶なり。庭には風萬年の枝を動かし、日仙人掌の上に輝き、殿には綺錢朱網の鮮麗なるあり。芍薬の花階に當りて亂れ、青苔は砌に沿うて生ず。我れ此に宿直して緩歩すれば、佩玉の聲鏘鏘然として清し。ああ中書は眞に美なりと雖も、吾が居室にあらず。丘園の中に偃息するの自由なるに如かず。況んや友朋を思ふの情結んで解けず、春光の駘蕩として賞すべきあるをや。願くは鳥の飛翼を得て、恣に山水の勝を賞せんことを。

朝雨を觀る

謝玄暉

朔風飛雨を吹き、蕭條として江上より來る。既に百常の觀に灑ぎ、復た九成の臺に集る。空濛にして薄霧の如く、散漫として輕埃に似たり。平明衣を振ひて坐すれば、重門猶ほ未だ開かず。耳目暫く擾るるなく、古を懷ふこと信に悠なる哉。翼

- 【一】朔風。北風なり。
- 【二】蕭條。淋しき貌。
- 【三】百常。觀の名。觀は樓閣なり。

- 【四】九成。臺の名。呂氏春秋に「有城氏に二佚女あり、九成臺を爲る」とあり。
- 【五】輕埃。輕塵なり。

- 【六】平明。早曉なり。
- 【七】重門。宮門なり。
- 【八】翼を戦む。成公綏の感情賦に「惟れ潛龍の用ふるなき、

【四】駘蕩。春光のうらかなる貌。

を戦めては首を驥げんことを希ひ、流に乗じては、鯁を曝さんことを畏る。

- 【九】鯁を曝す。三秦記に「江海の大魚龍門の下に薄り集り、上れば則ち龍となり、上るを得ざれば鯁を水次に曝す」とあり。

- 【一〇】動息。出處進退なり。
- 【一一】戰勝。韓非子に「子夏肥えたり、或人之を問ふ、子夏曰く吾れ戰勝てりと、人問ひて曰く何をか戰勝といふと、曰く吾れ入りて夫子の義を見て之を榮とし、出でて富貴を

- 【一二】菜。賤草なり、詩經に「南山に臺あり、北山に菜あり」とあり。

【大意】 朝雨を觀て所感を述べる詩なり。風雨蕭條として江上より來り、高臺の間に降り灑ぎ、空濛にして煙霧の如し。且に衣を整へて坐すれば、宮門尙ほ未だ開かず。因つて暫く雨を觀つたれば、心自ら靜まり坐に古人盛衰の理を思ふ。人或は貧賤に居て富貴を望み、或は富貴に居て衰敗を畏る。然れども人の出處進退は兩ながら兼ねるを得ず。是れ人の歧路に彷徨して決する能はざる所以なり。我は彼の戰勝者に倣ひ、道を樂み官を退き、隱居して北山の菜を採らんことを願ふ。

郡内登望

謝玄暉

【一】郡内。郡は宣城郡なり、玄暉時に宣城太守たり。



借問す車を下るの日、直に望舒の圓なるのみにあらず。寒城一たび以て眺れば、平楚正に蒼然たり。山は陵陽の阻を積み、溪は春穀の泉を流し、威紆として遙甸に距り、嶮岳として遠天を帯ぶ。切切として陰風暮れ、桑柘寒烟起る。悵望して心已に極り、愴怏として魂屢々遷る。結髮して旅の爲に倦み、平生早く邊を事とす。誰か鼎食の盛を規らん、寧んぞ狐白の鮮を要めん。方に汝南の諾を棄て、言に遼東の田に税かん。

【大意】此れ登望に因りて歸を思ふの詩なり。我れ著任以來時を経ること既に久し。今城に登りて遠望すれば、平野蒼然として、中に陵陽の山あり、春穀の川あり。蜿蜒として遠く流れ、嶮然として天に聳え、陰風切切と

- 【一】借問。假に自ら問ふなり。車を下るとは著任せしこと。
- 【二】望舒。月なり。
- 【三】平楚。平林といふが如し。楚は叢木。蒼然ば草木の色なり。
- 【四】嶮岳。山の名。阻は險なり。
- 【五】春穀。川の名。
- 【六】威紆。長く曲れる貌。遙甸は遠地なり。
- 【七】切切。急迫の貌。
- 【八】桑柘。木の名。
- 【九】愴怏。自失する貌。
- 【一〇】結髮。元服すること。旅は旅客なり。
- 【一一】邊を事とす。邊境の戍役に從事すること。
- 【一二】鼎食。鼎を並べて食ふこと。豪奢なる生活をいふ。
- 【一三】狐白。狐の腋の皮にて作れる裘。裘の最上等なるもの。鮮は麗なり。
- 【一四】汝南。後漢の宗資、汝南郡守となり、毎事功曹范滂に委し、ただ唯諾するのみ。一句の意は官を辭するをいふ。
- 【一五】遼東。魏の管寧遼東に至る、牛寧が田を暴するものあり、寧之を牽きて爲に之を飼ふ、其人大に慙づ、是に於て禮讓大に行はる。一句の意は其事に傲はんとするなり。税は税駕にて致仕すること。

して寒煙桑柘の間に起る。之を見て心魂爲に憂ふ。我れ少年の時より常に客となり、早く邊境の事に従ひ、苦艱の間に年を経たり。然れども榮達豪華は敢て望む所にあらず。願くは官を退きて郷黨に歸り、徳を脩めて俗を化せんことを。

伏武昌が孫權の故城に登るに和す

謝玄暉

炎靈劍璽を遺て、當塗龍戰に駭く。聖期中壤に缺け、霸功寓縣に興る。鵲起して吳山に登り、鳳翔して楚甸を陵ぐ。衿帶巖險を窮め、帷帟謀選を盡す。北に拒ぎて驂鑣を溺らし、西に籠ちて組練を收む。江海既に波なく、俯仰して英盼を流す。

- 【一】伏武昌。伏曼容、武昌太守たり。孫權の故都は武昌に在り。後延業に徙る。
- 【二】炎靈。漢をいふ、漢は火徳の玉なればなり。劍璽は帝位に喩ふ。
- 【三】當塗。魏をいふ、後漢書獻帝紀に「許昌氣見ばれ塗に當る、蓋し道に當りて高きものは魏なり」とあり。龍戰は羣雄の戦争。

- 【四】聖期。論衡に「孟子に云く五百年にして王者の興るありと、五百年は以て天聖を出すの期となすなり」とあり。中壤は中國。
- 【五】寓縣。寓は字なり、邊地なり、吳の興りしをいふ。
- 【六】鵲起。鵲の如く急に飛ぶこと、莊子に「君子時を得れば則ち蟻の如く行き、時を失へば則ち鵲の如く起る」とあり。

- 【七】鳳翔。鳳の如く翔ること。楚甸は楚國。
- 【八】衿帶。帶の如く繞ること。
- 【九】帷帟。帷帳なり。謀選は謀略にすぐれたる人。
- 【一〇】北に云云。魏の曹操を禦ぎしこと。驂鑣は馬のくつわ。
- 【一一】西に云云。蜀の劉備を敗りしこと。組練は甲冑。
- 【一二】英盼。英氣ある目つき。



す。(三) 裘冕して禋郊に類し、(四) 揆して離殿を崇くす。(五) 釣臺講閣に臨み、(六) 樊山廣謙を開く。文物共に 葦蕤として、(七) 聲明且つ葱蒨たり。(八) 三光景を分つを厭ひ、書軌 薦を

中原を圍らんとせしこと。  
【三】 裘冕。衣冠なり。禋郊は天帝の祭。類は祭ること。  
【四】 卜揆。卜筮し日景をばかりて地を相すること。離殿は離宮。  
【五】 釣臺。臺の名。武昌にあり。  
【六】 樊山。山の名、一名袁山。武昌にあり。  
【七】 葦蕤。盛なる貌。  
【八】 聲明。禮樂なり。葱蒨は盛なる貌。

【九】 三光。日月星なり、三國に喩ふ。  
【一〇】 薦。獻なり。  
【一一】 參差。時の停まらざる貌。世祀は吳の宗廟の祭。忽は忽ちに過ぐること。  
【一二】 歌梁。妙歌の聲發すれば梁を繞りて塵起る、故に梁を見て其餘聲を想ふなり。  
【一三】 雄圖。吳國の壯圖。  
【一四】 茂宰。すぐれたる長官。伏武昌を指す。遐瞻は遠想して詩を作りしこと。

【一五】 幽客。玄暉自ら謂ふ。江畢は江邊なり。  
【一六】 從賞。伏武昌に從ひ行きて賞樂すること。纓弁は冠の紐及び冠、賓從の士に喩ふ。  
【一七】 清卮。酒杯なり。  
【一八】 良書。古人の典籍。  
【一九】 芳音。伏武昌の詩。  
【二〇】 餘綯。餘美なり。  
【二一】 于役。行役なり。  
【二二】 鄂渚。武昌の渚の名。游衍は遊樂なり。

同うせんと欲す。(三) 參差として世祀忽たり、寂寞として市朝變ず。舞館餘基を識り、(四) 歌梁遺囀を想ふ。故林衰木平に、荒池秋草偏し。(五) 雄圖悵として茲の若し。(六) 茂宰深く遐瞻す。(七) 幽客江阜に滞り、(八) 從賞纓弁に乖く。(九) 清卮獻酬を阻て、(一〇) 良書聞見を限る。幸に(一一) 芳音の多きに籍り、風を承けて(一二) 餘綯を采る。(一三) 于役儻し期あらば、(一四) 鄂渚游衍を同うせん。

【大意】 此れ伏曼容が武昌に在る吳王孫權の故城に登りて作りし詩を讀み、遙に之に和せしなり。

漢帝位を失ひ魏之に代らんとするや、羣雄交々争ひて王者未だ出でず。時に吳興りて霸業を邊地に立て、忽ち起りて吳を領し、更に進んで楚を併せ、巖險を以て襟帶となし、帷幄の謀臣亦妙選を盡し、北のかた曹操を江淮に禦ぎて驂馬を溺らし、西のかた劉備を敗りて甲兵を收め、國內清平にして進んで中原を圖らんと欲し、先づ衣冠を整へて祭祀を行ひ、地の宜しきを相て宮館を營み、釣臺に登りて武事を講じ、兵車を閱し、樊山に於て盛宴を開き、文物禮樂盛美を極めたり。然も三國(吳魏蜀)その土地を分つを厭ひ、書は文を同うし、車は軌を同うし、天下一統の世となさんと欲す。是に於て孫氏國亡び、其都(武昌城)荒墟となり、今や舞館は僅に餘基を存し、歌梁を見て餘聲を思ふのみ。舊林荒池また當時の盛を留めず。霸圖悵として休み、滿目荒涼たり。賢宰(伏曼容を指す)その故城に登りて詩を賦す。我れ江畔に客となり、賞樂に從ふ能はず。共に酒杯の獻酬をなし、共に先王の典籍を讀む能はず。幸に其佳什を誦するを得、茲に餘美を拾ひて和詩を作りぬ。若し行役して武昌に赴くの期あらば、當に遊樂を同うすべし。

王著作が八公山の詩に和す

謝玄暉

(一) 二別漢城に阻り、(二) 王著作。王融なり。(三) 八公山。山の名、安徽省の北部に在り。晉將謝玄の苻



雙嶠河澳を望む。  
茲嶺復た嶺峴區  
を分ちて 淮服を奠  
む。東は 琅邪の臺  
を限り、西は 孟諸

【一】 堅を破りし處なり。  
【二】 二別。大別小別の二山。  
漢城は漢水の渚。  
【四】 雙嶠。殺谷をいふ。殺に  
二陵あり故に雙嶠といふ。河  
隴は黄河の隈。

【五】 茲嶺。八公山を指す。嶺  
航は高峻の貌。  
【六】 淮服。淮水の流域。  
【七】 琅邪の臺。山海經に「琅  
邪臺は渤海の間、琅邪の東に  
在り」とあり。

【八】 孟諸。澤の名、八公山の  
東に在り、而して西は云云と  
云ふは、澤の西此山に至るを  
謂ひ、上句の東の字を避けた  
るなり。陸は澤なり。

の陸に距る。阡眠として雜樹起り、  
檀欒として脩竹蔭ふ。日隠れて  
澗空しきかと疑はれ、雲聚り  
て岫復れるが如し。  
出沒 樓雉を眺  
め、遠近春目を送る。

【九】 阡眠。茂密の貌。  
【一〇】 檀欒。竹の茂る貌。脩竹  
は長き竹。  
【一一】 樓雉。樓は城樓、城高さ  
一丈長さ一丈なるを堵とい  
ひ、三堵を雉といふ。出沒は  
樓雉の出沒なり。

【一二】 素景。素は白なり、晉は  
金徳の王なり故に素景とい  
ふ。伊穀は洛陽の近くに在る  
川の名、苻堅の晉を伐ちし時、  
晉は洛陽を去り江を渡りて之  
を避けしをいふ。

【一三】 宗袞。謝安をいふ。  
【一四】 管微く。管仲なしの意。  
明牧は謝玄をいふ。此一句は  
霸者の佐たる管仲はなけれど  
も、明牧謝玄の天命を寄する  
に足るありとの意。  
【一五】 長蛇。苻堅に喩ふ。  
【一六】 奔鯨。苻堅に喩ふ。  
【一七】 芳塵。美譽に喩ふ。  
【一八】 芳塵。美譽に喩ふ。

戎州昔華を亂し、  
素景伊穀に淪む。  
危きに陥んで 宗  
袞に頼り、管微く  
して明牧に寄る。長蛇固に能く翦り、  
奔鯨此れより曝す。道暖くして  
芳塵流れ、業遙にして

【一九】 令圖。善謀なり。  
【二〇】 浩蕩。宏遠なる貌。親知  
は親族舊知。  
【二一】 連翩。鳥の飛ぶ貌。征軸  
は行車。  
【二二】 館娃宮。吳に在り、昔吳  
王夫差の築きて以て西施を置

【二三】 令圖。善謀なり。  
【二四】 浩蕩。宏遠なる貌。親知  
は親族舊知。  
【二五】 連翩。鳥の飛ぶ貌。征軸  
は行車。  
【二六】 館娃宮。吳に在り、昔吳  
王夫差の築きて以て西施を置

【二七】 令圖。善謀なり。  
【二八】 浩蕩。宏遠なる貌。親知  
は親族舊知。  
【二九】 連翩。鳥の飛ぶ貌。征軸  
は行車。  
【三〇】 館娃宮。吳に在り、昔吳  
王夫差の築きて以て西施を置

年運倏なり。平生 令圖を仰ぐも、吁嗟命淑からず。  
浩蕩として親知に別れ、連翩として征軸  
を戒む。再び 館娃の宮に遠ざかり、兩び 河陽の谷に去る。風煙四時に犯し、霜雨朝夜に沐す。  
春秀 良に已に凋む。秋場 庶くは能く築かん。

【大意】 大別、小別の二山、漢水の曲に相隔り、嶠谷の二陵 黄河の隈に相望む。(八公山を起す陪  
筆なり) 此山(八公山) 復た峻嶮にして淮水  
の流域を分ち奠め、東は琅邪臺を限り、孟諸  
の澤西に延びて此山に至る。此に登りて遙に望  
めば、雜樹茂り脩竹生じ、山林幽邃にして日  
光隱蔽し、澗暗くして空気が如く、雲氣密聚  
して山峰重複し、城樓の遠近に出沒するを見  
る。昔秦王苻堅の中華を亂しし時、晉は洛陽を去りて南に遷り、謝安、謝玄に頼りて討賊興復の事  
を託す。謝玄乃ち苻堅を此山に破る。其道高邁にして英名後世に傳はれども、其身は忽ちにして死  
亡せり。我れ平生二公の善謀を仰慕すれども、命拙くして要職を得ず。親戚舊知に別れて宦遊を事  
とし、再び吳都を去りて河陽に客となり、奔馳して休息するに遑なく、常に風塵の犯す所となり、

【二九】 令圖。善謀なり。  
【三〇】 浩蕩。宏遠なる貌。親知  
は親族舊知。  
【三一】 連翩。鳥の飛ぶ貌。征軸  
は行車。  
【三二】 館娃宮。吳に在り、昔吳  
王夫差の築きて以て西施を置



今や既に衰老に及びぬ。庶はくは早く老を告げて歸田せんことを。

徐都曹に和す

謝 玄暉

宛洛遊遊するに佳く、春色 皇州に滿つ。川上に動き、風光草際（三）に浮ぶ。桃李 蹊徑（四）を成し、桑榆道周を陰ふ。東都已に載を傲む。言に歸りて 綠疇を望め。

〔一〕 徐都曹。徐勉なり。

〔二〕 宛洛。河南省の二縣の名。

〔三〕 皇州。帝都なり。即ち宛洛。時に都は江東に在り、ここに宛洛といふは古都か借りて言ふのみ。

〔四〕 青郊。春郊なり。

〔五〕 日華。日光なり。

〔六〕 蹊徑。こみち。

〔七〕 桑榆。木の名。道周は道のほとり。

〔八〕 東都。即ち宛洛なり。載は事なり、春耕の事をいふ。詩經に「傲めて南畝に載あり」とあり。

〔九〕 綠疇。綠田なり。

【大意】 此れ徐勉が新亭渚を出で、帝都に遊ばんとするを送るなり。帝都は遊樂の好地にして、今や春色正に闌なり。車を郊外に驅り江流を眺めつつ往けば、日出でて風吹き草木光華あり。桃李の蹊を成し、桑榆の茂盛するを見る。君帝都に往きて春耕の始まるを見れば、宜しく歸りて田疇を治むべし。

王主簿が怨情に和す

謝 玄暉

〔一〕 王主簿。名は季哲。

掖庭絶國に聘せられ、長門 歡宴を失ふ。相逢ひて 蕪蕪を詠じ、寵を辭して 班扇を悲む。花叢數蝶亂れ、風簾雙燕入る。徒に春帯をして賒からしめ、坐に紅装の變するを惜む。平生一顧重く、宿昔千金賤し。故人心尚ほ爾り、故心人見えず。

〔二〕 掖庭。宮の名。王昭君の居りし處、因つて王昭君に喩ふ。絶國は匈奴なり。

〔三〕 長門。宮の名、漢の陳皇后の寵を失ひて幽閉せられし處。因つて陳皇后に喩ふ。

〔四〕 蕪蕪。草の名、古樂府に

「山上りて蕪蕪を採り、山を下りて故夫に逢ふ」とあり。

〔五〕 班扇。漢の班婕妤君寵を失ひて團扇歌を作る。

〔六〕 故人。舊夫なり。

〔七〕 故心。もとの如く變らざる心。

〔二〕 掖庭。宮の名。王昭君の居りし處、因つて王昭君に喩ふ。絶國は匈奴なり。

〔三〕 長門。宮の名、漢の陳皇后の寵を失ひて幽閉せられし處。因つて陳皇后に喩ふ。

〔四〕 蕪蕪。草の名、古樂府に

「山上りて蕪蕪を採り、山を下りて故夫に逢ふ」とあり。

〔五〕 班扇。漢の班婕妤君寵を失ひて團扇歌を作る。

〔六〕 故人。舊夫なり。

〔七〕 故心。もとの如く變らざる心。

【大意】 王昭君は匈奴に嫁し、陳皇后は君寵を失ふ。女子の末路は皆此の如し。故に故夫に逢ひては蕪蕪の詩を詠じ、寵を失ひては團扇の歌を作れり。蝶燕皆耦ありて花叢風簾に居れども、我れ獨り匹儔を得ざるを悲み、身瘦せて衣帶緩く、年逝きて紅顏衰ふ。是れ我が少年の時、顧眄を重んじ、千金を賤みて、容易に人に許さざりしが爲なり。故夫すら心變りて舊妻を棄つ。故心を執りて變らざる者、世にあることなし。嘆すべきかな。

謝宣城に和す

沈 休文

王喬飛鳧の鳥、東

〔一〕 謝宣城。謝朓宣城太守と

なり。病に臥して詩を作る。

休文因つて之に和す。



方金馬門。宦に從へども宦侶にあらず、世を避くれども喧を避くるにあらず。余を揆りて皇鑿を發し、短翮屢々飛翻す。晨に趨りて建禮に遊び、晩に沐浴して郊園に臥す。賓至れば塵榻を下し、愛來れば綠罽を命ず。昔賢は時雨に倅しく、今守は蘭蓀より馥し。神交夢寐に疲れ、路遠くして思存を隔つ。拙に牽かれて東汜を謬り、浮惰して西峴に及ぶ。顧循するに良に菲薄、何を以てか瑣瑣に儷はん。將に渤澥に隨ひて去り、羽を刷めて清源に汎ばんとす。

【一】王喬。後漢書に「王喬は河東の人なり、顯宗の時葉令となる、喬神術あり、毎月朔望參朝す、帝其來ること數にして車騎を見ざるを怪み、密に太史をして之を伺はしむ。其去るに臨んで輒ち雙鳧あり、東南より飛び來る、羅を舉げて之を張る、ただ一雙の鳧を得たり」とあり。

【二】今守。宣城太守謝朓を指す。蘭蓀は香草の名。【三】東汜。日の初めて出づる處、少壯に比す。【四】西峴。日の入る處。衰老に比す。【五】顧循。自ら顧思すること。菲薄は才能の薄きこと。【六】瑣瑣。美玉なり。謝朓に喻ふ。【七】渤澥。海の名。

【大意】我れ王喬の如く宦に從へども宦侶にあらず、又東方朔の如く仕官して世を避くれども喧を避くるにあらず。天子我が才器を揆り、短才を以て登庸せられ、晨には建禮門に出仕し、暮には歸りて郊園に臥し、塵榻を下して容と語り、綠酒を酌んで憂を忘る。昔賢は時雨の化の如く、宣城太守たる足下の徳は蘭蓀よりも香し。我れ足下と離居して思を馳せ、夢に神魂相交るのみ。余や少年の時、拙才に牽かれ、謬りて王事に就き、浮惰疎昧にして衰老に至る。自ら顧るに我が才誠に薄し。何を足下の偉才に比するを得ん。願くは彼の鳥の如く渤澥の水に泛び、羽毛を洗ひて清波を弄せんことを。

【大意】我れ王喬の如く宦に從へども宦侶にあらず、又東方朔の如く仕官して世を避くれども喧を避くるにあらず。天子我が才器を揆り、短才を以て登庸せられ、晨には建禮門に出仕し、暮には歸りて郊園に臥し、塵榻を下して容と語り、綠酒を酌んで憂を忘る。昔賢は時雨の化の如く、宣城太守たる足下の徳は蘭蓀よりも香し。我れ足下と離居して思を馳せ、夢に神魂相交るのみ。余や少年の時、拙才に牽かれ、謬りて王事に就き、浮惰疎昧にして衰老に至る。自ら顧るに我が才誠に薄し。何を足下の偉才に比するを得ん。願くは彼の鳥の如く渤澥の水に泛び、羽毛を洗ひて清波を弄せんことを。

【一】王中丞。名は思遠、御史中丞たり。【二】應。和なり。【三】月華。月なり。【四】氛埃。塵なり。【五】方暉。戸は方形なり、戸よりさし込む光なる故方暉といふ。【六】圓影。隙穴圓し、故に影も亦圓し。【七】思婦。夫を思ふ妻。【八】西園。魏の鄴都の西園なり、魏の文帝毎に月夜を以て文人才子を集めて此に遊べり。【九】網軒。軒は檐なり、網及び珠綴を以て之を飾る。【一〇】應門。門の名、班婕妤の自傷賦に「應門閉ちて楚關扃せり」とあり。【一一】洞房。深闇なり。

王中丞思遠が月を詠ずるに應ず

沈休文

月華靜夜に臨み、夜靜にして氛埃を滅す。方暉戸を竟りて入り、圓影隙中より來る。高樓思婦を切にし、西園上才を遊ばしむ。網軒珠綴に映じ、應門綠苔を照す。洞房殊に未だ曉けず。清光信に悠な

す。清光信に悠な

【一】王中丞。名は思遠、御史中丞たり。【二】應。和なり。【三】月華。月なり。【四】氛埃。塵なり。【五】方暉。戸は方形なり、戸よりさし込む光なる故方暉といふ。

【六】圓影。隙穴圓し、故に影も亦圓し。【七】思婦。夫を思ふ妻。【八】西園。魏の鄴都の西園なり、魏の文帝毎に月夜を以て文人才子を集めて此に遊べり。

【九】網軒。軒は檐なり、網及び珠綴を以て之を飾る。【一〇】應門。門の名、班婕妤の自傷賦に「應門閉ちて楚關扃せり」とあり。【一一】洞房。深闇なり。



る哉。

【大意】 夜靜に月清くして塵氣なく、光輝戸隙より入りて、或は方或は圓なり。高樓の思婦は、之を見て思切なるべく、西園には才子相集りて宴遊すらん。或は網軒の珠綴を照し、或は應門の綠苔を照し、清光曉に至るまで去らず。信に悠遠なり。

冬節の後丞相の第に至り世子に詣づる車中の作

沈休文

廉公權勢を失ひ、門館虚盈あり。貴賤猶ほ此の如し。況んや乃ち曲池の平なるをや。高車塵未だ滅えず、珠履故より餘聲あり。賓階綠錢滿ち、客位紫苔生ず。誰か九原の上に當り、鬱鬱として佳城を望

- 【一】 冬節。冬至の日。
- 【二】 丞相。齊の豫章王巖は太祖の第二子なり、薨じて丞相揚州牧を贈らる。第は宅なり。
- 【三】 世子。諸侯の嫡子にいふ、巖の長子廉なり。
- 【四】 廉公。趙の廉頗、權を失ふや門下の客皆去る、復た將となるに及んで客復た來る。
- 【五】 門館。賓客の居る處。
- 【六】 曲池平。桓子新論に「雍門周、孟嘗君に謂ひて曰く、千秋萬歳の後、高臺既已に傾き、曲池又以て平ならんと」
- 【七】 綠錢。青苔なり。
- 【八】 客位。客の席。
- 【九】 九原。墓地なり。
- 【一〇】 鬱鬱。憂ふる貌。佳城は墳墓。

まん。

【大意】 此れ盛に就き衰を去る世態の輕薄なるを慨し、己獨り然らざるを言ふなり。昔廉頗の勢を失ふや賓客皆去り、復た將となるや客復た來れりといふ。貴ければ就き、賤しければ去ること此の如し。況んや主人の死後をや。人の來り就く者なきは、固より宜なり。丞相の車塵未だ滅えず、珠履の聲尙ほ残れるに、(死して未だ幾ならざるをいふ) 賓客の階席已に苔を生じ、(來り訪ふ者なければなり) 復た憂思を抱いて其墳墓を弔ふ者なし。世態の輕薄なること誠に慨すべきなり。

學省の愁臥一首

沈休文

秋風 廣陌を吹き、蕭瑟として南閣に入る。愁人 軒を掩ひて臥せば、高窓時に扉を動かす。虚館清陰滿ち、神宇曖として微微たり。網蟲戸に垂れて織り、夕鳥欄に傍ひて飛ぶ。櫻珮空しく、忝をなし、江海事多く違ふ。山中桂樹あり、(一〇) 歲暮言に歸るべし。

- 【一】 學省。國學なり、齊の明帝の即位するや、休文國子祭酒(大學總長)に遷る。
- 【二】 廣陌。廣き街路。
- 【三】 蕭瑟。淋しき聲。南閣は南門。
- 【四】 軒。門なり。
- 【五】 神宇。屋室美しくして神

- 【六】 網蟲。蜘蛛なり。
- 【七】 櫻珮。官服の飾なり。
- 【八】 江海。隱遁なり。
- 【九】 桂樹。芳香にして貞堅なり、故に君子之を尙ぶ。
- 【一〇】 歲暮。衰老なり。



【大意】 秋風蕭條として南門に入る時、我れ愁思を抱き門を閉ちて獨り臥せば、室宇高深にして清陰の氣自ら滿ち、日暮れんとして四方漸く暗く、蜘蛛は戶外に網を結び、鳥は欄干に傍ひて時にかへ歸る。我れ官に在るも徒に身の辱をなすのみ、隱遁の志久しく遂げず。山中に桂樹の賞すべきあり。願くは衰老を待ちて山中に歸休せんことを。

湖中の鴈を詠す

沈休文

白水春塘に滿ち、旅鴈毎に廻翔す。流に咬みて 弱藻を牽き、翻を斂めて餘霜を帶ぶ。羣り浮んで輕浪を動かし、單り汎んで 孤光を逐ふ。懸に飛んで竟に下らず、亂れ起ちて未だ行を成さず。羽を刷めて 搖漾を同うし、一舉して故郷に還らん。

【大意】 春水滿つるとき旅鴈其間に飛翔し、藻を咬みて之を食ひ、羽を斂めて餘霜を拂ひ、羣り浮んで浪を動かし、獨り泛んで遠光を逐ひ、高く飛んで下らず。亂れ起ちて未だ列を成さず。願くは此鳥と同じく飛び、去つて故郷に還らんことを。

三月三日 率爾に篇を成す

沈休文

麗日 元巳に屬し、年芳具に斯に在り。開花已に樹を匝り、流嚶復た枝に滿つ。洛陽繁華の子、長安輕薄の兒。東のかた 千金堰に出で、西のかた 鴈鶩陂に臨む。遊絲空に映じて轉じ、高楊地を拂ひて垂る。綠幘文照曜し、紫燕光陸離たり。清晨 伊水に戯れ、薄暮 蘭池に宿す。象筵寶瑟を鳴し、金瓶羽卮を汎ぶ。寧ろ憶はんや春蠶起き、日暮れて桑萎まんと欲するを。長袂屢以て拂ひ、彫胡方に自ら炊ぐ。愛すれども見るべからず、宿昔容儀を減せり。且く當に情を忘れて去るべし。歎息するも獨り何をか爲さん。

【大意】 今日の上巳の節句にして、折しも天

- 【一】 率爾。突然といふが如し。
- 【二】 元巳。上巳の節句。
- 【三】 年芳。春花のうるはしさ。
- 【四】 流嚶。一本流鶯に作る、鶯は鶩なり。
- 【五】 千金堰。堤の名。洛陽の東に在り。
- 【六】 鴈鶩陂。堤の名、長安の西に在り。
- 【七】 遊絲。かげろふ。
- 【八】 綠幘。冠なり。
- 【九】 紫燕。良馬の名。陸離は光色の貌。
- 【一〇】 伊水。川の名。洛陽の附近にあり。
- 【一】 蘭池。宮の名。長安に在り。
- 【二】 象筵。簾なり。飾るに象牙を以てす。寶瑟は樂器。
- 【三】 金瓶。酒を貯ふる器。羽卮は杯。
- 【四】 長袂。長袖なり。楚辭に「長袂面を拂つて善く客を留む」とあり。
- 【五】 彫胡。草の名、其實美味なり。宋玉の賦に「彫胡の飯、露葵の羹を炊き來りて臣に勸めて食はしむ」とあり。
- 【六】 宿昔。舊來の憂をいふ。



氣晴朗なれば、花は樹を匝りて開き、鶯は枝を繞りて鳴けり。想ふに洛陽長安の貴公子は、或は千金堰に遊び、或は鴈鶩陂に遊び、遊絲天に映じ、楊柳地を拂ふ所、緑冠の美しきを戴き、駿馬の色よきに跨り、伊水に蘭池に憩宿し、酒筵を開きて樂を奏し杯を銜み、美女も亦行樂して蠶の起き桑の凋めるをも打ち忘れ、長袖を拂つて客を留め彫胡の飯を炊ぎて客に勸め、共に享樂に耽りつつあらん。我れ之を好めども、行きて樂を共にする能はず。宿昔の愛徒に我が美容を損するのみ。如かず喜憂を忘れ去らんには。獨り憂ふるも何をかなさん。

雜擬上

古詩に擬す十二首

陸士衡

『行き行き重ねて行き行く』に擬す

(一) 悠悠として行邁遠く、戚戚として憂思深し。此思亦何をか思ふ。君が徽と音を思ふ。音徽日夜離れ、緬邈たること飛沈の若し。王鮪河岫を懐ひ、晨風北林を思ふ。遊子天末に眇

- 【一】 悠悠。遠き貌。行邁は行くこと。
- 【二】 戚戚。憂ふる貌。
- 【三】 君。夫を指す、徽は美德、音は音信。
- 【四】 緬邈。遠きなり。
- 【五】 王鮪。魚の名。
- 【六】 晨風。くまだか。
- 【七】 遊子。遠行せる夫を指す。天末は遠方なり。

なり、(一) 遠期尋ねべからず。(二) 驚颺反信を褰ち、歸雲音を寄せ難し。佇立して萬里を想へば、沈憂我が心に萃る。衣を攬れば餘帶あり、形を循れば衿に盈たず。去り去りて(三) 情累を遺て、安處して清琴を撫せん。

【大意】 閨怨の詩なり。我が夫遠行して在らず。我れ之を思ふこと深し。我れ何をか思ふ。夫の美德と音信とを思ふなり。然も美德音信の接すべからざることを、飛沈せるが如し。夫れ魚鳥すら猶ほ其居を思ふ。我が夫も必ず我を思ひつつあらん。然も遠く離れて歸期知るべからず。廻風來れども反信を絶ち、歸雲去れども以て音信を寄せ難し。佇立して遠方を望めば、深憂我が心に萃り、身瘦せて帶長く衿寛し。ああ此憂を捨て去り、琴を弾じて自ら慰めん。

『今日良宴會』に擬す

閑夜 權友に命じ、(一) 迎風館に置酒す。(二) 齊僮梁甫の吟、(三) 秦娥張女の(四) 彈。哀音棟宇を繞り、遺響(五) 雲漢に入る。四坐咸志を同うし、(六) 羽觴算ふべからず。(七) 高譚一に何ぞ綺なる、蔚たること朝霞の爛たるが若し。人生幾何もなし、樂をなすこと常に晏きを苦む彼の

- 【八】 遠期。一本遠期に作る。
- 【九】 驚颺。廻風なり。
- 【一〇】 情累。心の煩ひ。
- 【一一】 權友。親友なり。
- 【一二】 迎風館。館の名。西京賦に見ゆ。
- 【一三】 齊僮。古の善く歌ふ者。梁甫吟は歌曲の名。
- 【一四】 秦娥。古の善く歌ふ者。張女彈は歌曲の名。
- 【一五】 雲漢。天上なり。
- 【一六】 羽觴。杯なり。
- 【一七】 高譚。高尚なる談話。



〔八〕伺晨の鳥に譬ふ。聲を揚げて當に旦に及ぶべし。曷爲れぞ恆に憂苦し、此の貧と賤とを守らん。

【大意】人當に歡樂を盡すべきを言ふ。閑夜無事の時賓友を會して宴し、美歌を歌ひ妙樂を奏すれば、餘聲・梁を繞り、遙に散じて天に入る。坐客皆飽醉して、杯を擧ぐることに多く、談話綺美にして人品盛美なり。人の世に在ること幾何ならず、樂をなすことに常に晩し。彼の雞の晨を待ちて鳴くが如く、人の樂をなすも宜しく早きに及ぶべきなり。何ぞ永く貧賤に在りて憂苦しるを爲すべけんや。

「迢迢たる牽牛星」に擬す

〔一〕昭昭たる清漢の暉、〔二〕祭祭として天歩を光す。〔三〕牽牛西北に廻り、〔四〕織女東南に顧る。〔五〕華容一に何ぞ治しき、手を揮ふこと。〔六〕素を振ふが如し。彼の河の梁なきを怨み、此の年歳の暮るるを悲む。〔七〕跂として彼れ良縁なく、〔八〕睨焉として度るを得ず。領を引きて、大川を望めば、雙涕霑露の如し。

【大意】天河天上に明なり。之を隔てて牽牛織女の二星あり。織女は容姿艶冶にして手の白きこと練の如し。天河に橋なきを以て、牽牛に會せんことを望めども良縁なく、ただ相視て悲むの

- 〔一〕伺晨の鳥。雞をいふ。
- 〔二〕昭昭。明なる貌。清漢は天河。
- 〔三〕祭祭。鮮美の貌。
- 〔四〕牽牛。星の名。
- 〔五〕織女。星の名。
- 〔六〕華容。美姿なり。
- 〔七〕素。れりぎぬ。
- 〔八〕跂。踵を擧げて待つこと。詩經に「跂たる彼の織女、終日七襄す」とあり。
- 〔九〕睨焉。相視る貌。
- 〔一〇〕大川。天河なり。

み。雙淚流れて露の如し。

「江を涉りて芙蓉を采る」に擬す

山に上りて、瓊藥を采る。穹谷芳蘭饒し。采り采れども、掬に盈たず。悠悠として所歡を懷ふ。故郷一に何ぞ曠なる、山川阻りて且つ難し。沈思萬里に鍾り、躑躅して獨り吟歎す。

【大意】思婦遠行の夫を思ふなり。山に上りて玉華を採り、谷に臨みて芳蘭を採る。之を採りて未だ把に盈たざるに、忽ち遠行の夫を思ふ。夫は山川萬里の外に在り。我れ之を思ひ徘徊して長嘆す。

「青青たる河畔の草」に擬す

靡靡たる江離の草、熠燿として河側に生ず。皎皎たる彼の姝女、阿那として軒に當りて織る。祭祭として容姿妖しく、灼灼として顔色美し。良人遊んで歸らず、偏り棲みて獨り。空房悲風來り、中夜起ちて歎息す。【大意】美女あり、窓に當りて織る。その容姿極めて美艷にして、江離の河畔に生ずるが如し。

- 〔一〕瓊藥。玉華といふが如し。
- 〔二〕穹谷。深き谷。
- 〔三〕掬。ひとにぎり。
- 〔四〕悠悠。遠き貌。所歡は夫なり。
- 〔五〕躑躅。徘徊なり。
- 〔六〕靡靡。細く弱き貌。江離は香草なり。
- 〔七〕熠燿。光色の貌。

- 〔八〕皎皎。明潔の貌。姝女は美女。
- 〔九〕阿那。柔順の貌。軒は窓なり。
- 〔一〇〕灼灼。ひかりかがやく貌。
- 〔一一〕良人。夫をいふ。
- 〔一二〕雙翼。相手のなきこと。
- 〔一三〕空房。空閑なり。



夫は遠遊して歸らず。鳥の孤棲して翼を比ぶるなきが如し。空間に孤居して悲風の聲を聞き、忽ち起つて嘆息す。

『明月何ぞ皎皎たる』に擬す

安に北堂の上に寝ぬれば、明月我が牖に入り、之を照して餘暉あり、之を攬れば手に盈たず。涼風曲房を繞り、寒蟬高柳に鳴く。踟蹰して節物に感ず。我が行永く已に久し。遊宦成るなきに會し、離思常に守り難し。

【大意】 我れ靜に北堂の上に臥すれば、明月來りて我を照す。光輝を取らんとするも手に盈たず。(虚しく夫の名ありて、見る能はざるに喩ふ)今や涼風闥に入り、寒蟬柳に鳴くの時候となり、夫の去ること日既に久し。夫は遊宦して業未だ成らず。我が離別の思自ら堪へ難し。

『蘭若朝陽生ず』に擬す

嘉樹朝陽に生じ、凝霜其條を封ず。心を執りて時信を守り、歲寒きも終に彫まず。美人何ぞ其れ曠き、灼灼として雲霄に在り。隆想年月を彌へ、長嘯飛颺に入る。領を引きて天末を望む。彼の陽に向ふの翹に譬ふ。

- 【四二】 踟蹰。徘徊なり。
- 【四三】 我。夫を指して我とす。
- 【四四】 蘭若。皆香草なり。
- 【四五】 嘉樹。松柏なり。朝陽とは山の東をいふ。
- 【四六】 美人。夫を指す。
- 【四七】 雲霄。天空なり。
- 【四八】 天末。天外といふが如し。
- 【四九】 翹。花の秀でしもの。

【大意】 我れ貞堅の志を執ること松栢の寒を経るも凋落せざるが如し。我が夫は遠く天外に客たり。我れ之を思ふこと久しく、常に風に對して吟嘯す。又遙に天外を望むこと、葵藿の頭を傾けて日に向ふが如し。

『青青たる陵上の柏』に擬す

冉冉たる高陵の蘋、習習たる風に隨ふ。翰。人生當に幾時ぞ、彼の濁水の瀾に譬ふ。戚戚として滯念多く、置酒して所歡を宴す。駕を方べて飛轡を振ひ、遠遊して長安に入る。名都一に何ぞ綺なる、城闕鬱として盤桓たり。飛閣虹帯を纓し、曾臺雲冠を冒ふ。高門北闕に羅り、甲第椒と蘭と。俠客絶景を控き、都人玉軒に驂す。遨遊して情願を放にす。慷慨して誰が爲にか歎かん。

- 【四九】 冉冉。進長の貌。高陵は高丘。山海經に「崑崙の丘に草あり、名づけて蕢といふ、葵の如し」とあり、字書に「蕢も亦蘋の字」とあり。
- 【五〇】 習習。しばしば飛ぶ貌。
- 【五一】 戚戚。憂ふる貌。
- 【五二】 所歡。朋友なり。
- 【五三】 名都。長安なり。綺は美なり。
- 【五四】 盤桓。廣大の貌。
- 【五五】 飛閣。高閣なり。
- 【五六】 曾臺。層臺なり。
- 【五七】 甲第。甲乙次第ある大邸。
- 【五八】 椒蘭は室に塗りて芳香を取る。
- 【五九】 絶景。馬の名。
- 【六〇】 玉軒。玉を以て飾れる車。驂は駕なり。

山上に生ずる靈草は、枝を高風の間に振ひて枯死することなきも、人生の果敢なきは、濁水の竭き易きが如し。何ぞ憂念を抱くをなさん。宜しく朋友と歡宴すべきなり。馬に跨りて長安



に遊べは、城闕廣大にして美麗に、高閣虹を繞らし、層臺雲外に聳え、王公の邸宅相竝んで立ち、行遊の人駿馬を控き玉車に乗りて、往來織るが如し。我れ亦行きて遊樂を放にせん。何ぞ獨り嘆息するをなさんや。

『東城一に何ぞ高き』に擬す

西山何ぞ其れ峻き、曾曲鬱として崔嵬たり。  
零露天に彌りて墜ち、蕙葉林に憑りて衰ふ。  
寒暑相因り襲り、時の逝くこと忽として頽るが如し。  
三閭飛轡を結び、大蓋落暉を嗟く。  
曷爲れぞ世務に牽かれ、中心違ふあるが若くなる。  
京洛妖麗多く、玉顔瓊蕤に倅し。  
閑夜鳴琴を撫し、惠音清く且つ悲し。  
長歌促節に赴き、哀響高徽を逐ふ。  
一唱すれば萬夫歎き、再唱すれば梁塵飛ぶ。  
河曲の鳥となり、豊水の涪に雙遊せんことを思ふ。

【大意】山は千歳を経て崩れざるも、露や香草や、或は零ち或は凋む。人も亦此の如し。寒暑逝

- 【六〇】曾曲。重疊せる山曲。崔嵬は高大の貌。
- 【六一】零露。零は落なり。
- 【六二】蕙葉。蕙は香草。
- 【六三】三閭。楚の屈原をいふ。
- 【六四】大蓋。老人なり。易經に「日昃の離、缶を鼓して歌ばずんば則ち大蓋の嗟あり」とあり。
- 【六五】京洛。洛陽の都。
- 【六六】瓊蕤。玉花なり。
- 【六七】惠音。順和なる聲。
- 【六八】促節。急調なり。
- 【六九】高徽。急調なり。
- 【七〇】河曲。河のほとり。
- 【七一】豊水。一本澧水に作る。川の名。

きて人亦老ゆ。屈原の遠遊して以て長生を求め、老人の日暮を嘆じて之を惜む所以なり。何ぞ俗務に拘束せられ、歡賞の心に違ふべけんや。都會には美女多く容貌玉花の如し。琴を鼓し歌を發すれば、人皆その妙を稱し、清韻梁を繞りて塵を動かす。我れ願くは此女と相雙ぶこと鴛鴦の如く、共に澧水の涪に遊ばんことを。

『西北に高樓あり』に擬す

高樓一に何ぞ峻き、迢迢として峻く且つ安し。  
綺窓塵冥を出で、飛陞雲端を躡む。佳人琴瑟を撫し、纖手清く且つ閑なり。  
芳氣風に隨ひて結び、哀響馥しきこと蘭の若し。  
玉容誰か顧みるを得ん、城を傾くること一彈に在り。  
佇立して日の昃くを望み、躑躅して再三歎く。  
佇立の久しきを怨みず。但歌者の歡を願ふ。  
歸鴻の羽に駕して、翼を雙飛の翰に比べんことを思ふ。

【大意】美人に喩へて賢才の用ひられざるを嘆くなり。高樓あり綺窓塵埃の外に聳え、閣道雲表に立つ。美人あり其上に坐し琴瑟を彈す。芳氣風に隨つて凝り、哀韻蘭香の如し。(君子美德あり哀歎するに喩ふ)玉姿人の顧みるなきも、彈奏の妙は城國を傾くるに足る。

- 【七二】迢迢。高き貌。
- 【七三】綺窓。うすきぬにて飾れる窓。塵冥は昏塵。
- 【七四】飛陞。閣道なり。雲端は雲上。
- 【七五】纖手。きやしやなる手。
- 【七六】玉容。美しき容姿。
- 【七七】一彈。一たび琴瑟を彈する。
- 【七八】躑躅。徘徊なり。
- 【七九】歌者。唱和する人。
- 【八〇】歸鴻。歸雁なり。



(才能の凡ならざるに喩ふ) 佇立して落日を望み嘆聲を漏らすと再三なり。(用ひられずして衰老の嘆を發するに喩ふ) 佇立の久しきを怨みず、ただ唱和する者の歡を得、(時を待つ久しきを怨みず、ただ知己の來らんことを願ふに喩ふ) 心を同うして共に翔らんことを願ふ。

『庭中に奇樹あり』に擬す

(一) 歡友蘭時に往き、迢迢として 音徽を匿す。虞淵絶景を引き、四節逝くこと飛ぶが若し。(二) 芳草久しく己に茂るも、佳人竟に歸らず。躑躅して林渚に遵へば、惠風我が懐に入る。物に感じて 所歡を戀ひ、此を采りて誰にか貽らんと欲する。

【大意】 友を思ふ詩なり。友は秋蘭花を開く頃此地を去り、爾來絶えて音信なし。歲月の逝くこと飛ぶが如く、今や芳草の萋萋たるを見るも、吾が友尙ほ未だ歸らず。獨り林池の間を漫步すれば、和風我が襟懐に入る。春色に感じて友を思ふこと轉切なり。此の芳草を採りて將た誰にか贈るべき。

『明月夜光に皎たり』に擬す

歳暮れて涼風發り、昊天肅として明明たり。招搖西北に指し、天漢東南に傾く。朗月閑房を照し、蟋蟀戸庭に吟ず。翻翻として歸鴈集り、嘒嘒として寒蟬鳴く。疇昔同宴の友、翰く飛んで高冥に戻れり。美を服して聲聽を改め、愉に居て舊情を遺る。織女機杼なく、大梁楹を架せず。

【大意】 貴人の舊交を念はざるを刺る詩なり。今や涼風起りて天澄み氣清く、招搖は西北を指し、天河は東南に傾き、明月閑室を照し蟋蟀戸庭に鳴き、歸鴈翔り寒蟬咽ぶ。見るもの聞くもの、悉く悲秋の色ならざるはなし。昔我と歡宴を共にせし友は、今既に貴顯の位に升り、美服を纏ひ愉樂に安んじ、昔時の聲聽を改めて、友人の故情を棄つ。恰も織女大梁の其名のみありて、機杼を操り楹を架する能はざるが如く、虚しく相知の名ありて、其實なきを悲まざるを得ず。

『四愁の詩』に擬す

張 孟 陽



我が思ふ所 營州に在り、往いて之に従はんと欲すれば路阻りて脩し。崖に登り遠く望めば 涕泗流る。私の懐へる心傷憂す。佳人我に綠綺琴を遺る。何を以てか之に贈らん 雙南金。願くは流波に因りて 重深を超えん。終然致すなくして永吟を増す。

【大意】 己明君を得て之に事へんとするも、讒佞の阻つる所となりて親近する能はざるを嘆ずるなり。我が思ふ所の人は營州に在り。之に親近せんとするも、路隔りて且つ遠し。高處に登りて遠望すれば心憂へて涙流る。佳人我に綠綺琴を贈れり。我之に酬ゆるに雙南金を以てせんとす(君我を待つこと甚だ深し、故に之に事ふるに忠誠を以てせんとすとの意) 我れ流波に因り(忠信に喩ふ)て、重深(讒佞に喩ふ)を越えんと欲すれども能はず。ただ益々長嘆するのみ。

古詩に擬す

陶淵明

日暮れて天に雲なく、春風 微和を扇ぐ。佳人清夜を美し。曙に達するまで 酣み且つ歌ふ。歌竟りて長く歎息し、此を持して人を感せしむるこ

- 【一】 微和。和げる微風。
【二】 酣。酒を飲んで楽しむこと。

と多し。明明たる雲間の月、灼灼たる葉中の花。豈一時の好なからんや、久しからざる當に如何すべき。

- 【三】 灼灼。明なる貌。

【大意】 歡樂の久しからざるを嘆ずるなり。日暮れて天に雲なく春風和かなるとき、美人此の良夜を愛し、夜を徹して酣歌せるも、歌終りて歎息せり。此事人をして疑を起さしむ。ああ我れ此意を知れり。夫れ雲間の月、葉中の花、豈一時の盛美なからんや。然れども盛なるものは衰へ、美なるものは褪せ、其の久しからざるを如何せん。これ美人の歎息を發せる所以なり。

魏の太子の鄴中集に擬す八首

謝靈運

建安の末、余時に鄴宮に在り。朝に遊び夕に讌し、歡愉の極を究む。天下の良辰美景賞心樂事、四者拜せ難し。今 昆弟友朋、二三の 諸彦共に之を盡せり。古來この 娛、書籍に未だ見えぬ。何となれば楚の襄王の時、宋玉唐景あり。梁の孝王の時、鄒枚嚴馬あり、遊ぶ者美なりとす。而も 其主は文ならず。漢の武帝の時、

- 【一】 魏太子。曹丕なり。鄴は魏の都。
【二】 建安は、後漢の獻帝の年號。
【三】 余。曹丕に代りて謂ふ。
【四】 昆弟。兄弟なり。後の平原侯植は丕の弟なり。友朋は王粲、陳琳等をいふ。
【五】 諸彦。美士を彦といふ。
【六】 宋玉唐景。宋玉、唐勒、景差なり。皆楚の大夫にして辭賦に巧なり。
【七】 鄒枚嚴馬。鄒陽、枚乘、嚴忌、司馬相如なり、皆梁王



徐樂諸才應對の能に備はれり、而も雄猜多  
忌なり。豈 晤言の適を獲んや。方將を誣  
ひず。庶くは必ず今日を賢れりとせんのみ。歳  
月流るるが如く、零落して將に盡さんとす。  
文を撰し人を懐ひ、往に感じて愴を増す。其辭  
に曰く、

魏太子

百川巨海に赴き、衆星 北辰を環る。照灼として  
中ごろ横潰し、家王生民を拯ふ。區宇既に滌蕩せられ、  
を忝うし、由來常に仁を懷ふ。況んや 衆君  
子に値ふをや。心を傾けて日新を隆にす。物  
を論ずるに浮説なく、理を析ちて實に敷陳す。  
羅縷豈辭を闕かんや、窈窕として天人を  
究む。澄觴 金壘に滿ち、連榻華茵を設く。

- 【一】 賓客たり、詞賦に巧なり。
- 【二】 晤言、歡談なり。適は樂なり。
- 【三】 方將、まさに壯なること。
- 【四】 帝に仕へて郎中たり。
- 【五】 帝に仕へて郎中たり。
- 【六】 帝に仕へて郎中たり。
- 【七】 帝に仕へて郎中たり。
- 【八】 帝に仕へて郎中たり。
- 【九】 帝に仕へて郎中たり。
- 【一〇】 帝に仕へて郎中たり。

【一】 賓客たり、詞賦に巧なり。

【二】 晤言、歡談なり。適は樂なり。

【三】 方將、まさに壯なること。

【四】 帝に仕へて郎中たり。

【五】 帝に仕へて郎中たり。

【六】 帝に仕へて郎中たり。

【七】 帝に仕へて郎中たり。

【八】 帝に仕へて郎中たり。

【九】 帝に仕へて郎中たり。

【一〇】 帝に仕へて郎中たり。

急絃飛聽を動かし、清歌梁塵を拂ふ。何ぞ  
言はん相遇ふこと易しと、此歡信に珍とすべ  
し。

急絃飛聽を動かし、清歌梁塵を拂ふ。何ぞ

言はん相遇ふこと易しと、此歡信に珍とすべ

し。

【一】 急絃。急調なり。飛聽は

【二】 急絃。急調なり。飛聽は

【三】 急絃。急調なり。飛聽は

【四】 急絃。急調なり。飛聽は

【五】 急絃。急調なり。飛聽は

【六】 急絃。急調なり。飛聽は

【七】 急絃。急調なり。飛聽は

【八】 急絃。急調なり。飛聽は

【九】 急絃。急調なり。飛聽は

【一〇】 急絃。急調なり。飛聽は

家もと 秦川貴公の子孫なり。亂に遭ひて流  
寓し、自ら傷み情多し。  
幽厲昔崩亂、桓靈今板蕩。伊洛既に燎  
煙、函嶠没して像なし。裝を整へて秦川を辭

王粲

- 【一】 秦川。地名、王粲の郷里。
- 【二】 幽厲。周の二王なり。
- 【三】 桓靈。後漢の二帝なり。
- 【四】 板蕩は世の亂れ敗るるをいふ。
- 【五】 函嶠。二關の名、長安を



し、馬に秣ひて 楚壤に赴く。沮漳自ら美なるべきも、客心 外獎にあらず。常に 詩人の言を歎く、式微何に由りてか往かん。上宰皇靈を奉じ、侯伯咸宗長とす。雲騎 漢南を亂め、宛郢皆掃盪す。霧を排して 盛明に屬し、雲を披いて 清明に對す。慶泰 重疊を欲し、公子特り先づ賞す。謂はざりき 肩を息ふの願、一旦 明兩に値はんとは、竝 び載りて鄴京に遊び、舟を方べて河の廣きに汎 ぶ。清讌の娛に 網繆し、梁棟の響を寂寥 ず。既に長夜の飲を作す。豈 乘日の養を 顧みんや。

【大意】 後漢の桓帝靈帝の時、天下の壞亂 せしこと、恰も周の幽王厲王の時の如く、洛 陽の宮室は悉く董卓の燒滅する所となり、長安の舊都亦陥没して跡なし。我れ（王粲）秦川を去 りて荆州に赴き劉表に依る。沮漳の風景佳ならざるにあらざれども、中に歸心を抱きて、外物の能

- 【一】 楚壤。荆州をいふ。
- 【二】 沮漳。二川の名。
- 【三】 外獎。外部より勵すこと。
- 【四】 詩人。詩經の詩を作りし 人。
- 【五】 式微。詩經に「式微式微、 胡ぞ歸らざる」とあり。
- 【六】 上宰。宰相曹操なり。皇 靈は後漢の獻帝を指す。
- 【七】 侯伯。諸侯なり。宗長は 盟主。
- 【八】 雲騎。衆騎なり。漢南は 漢江の南。
- 【九】 宛郢。楚の二縣の名。掃 盪は平定なり。
- 【一〇】 清明。曹操に喩ふ。
- 【一一】 慶泰。曹操に喩ふ。
- 【一二】 幸福なり。
- 【一三】 公子。曹丕を指す。
- 【一四】 明兩。太祖既に明にして 太子又明なり、故に太子を明 兩となす。
- 【一五】 網繆。交ること。
- 【一六】 乘日。日車に乗りて遊ぶ こと。

く勵し留むる所にあらず。常に詩人の言を歎じて歸らんことを思へども歸るに由なし。時に曹公（魏の太祖）獻帝を戴きて天下に號令し、諸侯皆之を盟主とす。乃ち大軍を率ゐて漢南地方を平定 ず。我れ茲に雲霧を披いて曹公を拜するを得たり。幸福竝び至り、又太子を識るを得たり。初め暫 く肩を息めんことを願ひしも、圖らずして太子の厚恩を蒙り、太子と舟車を同うして遊樂し、靜深の 宇に清宴し、歌聲梁棟に響く、既に此の長夜の飲をなせり。又何ぞ彼の日車に乗るの遊を願はんや。

陳琳

袁本初が書記の士なり。故に喪亂の事を述ぶること多し。

皇漢屯遭に逢ひ、天下 氣慝に遭ふ。董氏關西を淪め、袁家河北を擁す。 身を窘めて 羈勒に就く。豈意はんや事己に乖くを、永懷して故國を戀ふ。 單民周章し易く、 相公實に勤王、信 能く 蝥賊を定む。復た 東都の輝を觀、重ねて漢朝の則を見る。餘生幸に已に多し。矧んや 酒ち 明德に値へるをや。客を愛して疲を告げず、飲讌して 景刻を遺る。夜聽星爛を極め、朝遊 曠黑を窮む。

哀哇梁埃を動かし、 急觴幽黙を盪す。

- 【一】 袁本初。袁紹、字は本初。
- 【二】 氣慝。亂賊なり。
- 【三】 單民。單身なり。陳琳自 ら謂ふ。周章は狼狽。
- 【四】 羈勒。束縛なり。
- 【五】 相公。曹操を指す。
- 【六】 蝥賊。亂賊なり。
- 【七】 東都。洛陽なり。



且つ一日の娛を盡し、(五) 古來の惑を知ることなし。

【五】 明德。曹丕を指す。  
【六】 景刻。時刻なり。  
【七】 嘆息。日の暮るること。

【五】 哀哇。哀歌なり。  
【六】 急觴。杯を促すこと。  
【七】 古來の惑。後漢書に「楊

秉曰く、我三不惑あり、酒と色と財となり」とあり。

【大意】 漢末天下大に亂れ、董卓は長安を陥れ袁紹は兵を起して河北に據る。我れ(陳琳)孤獨にして惶懼し易く、遂に身を屈して袁紹に仕ふ。然も事己の志に乖ひ常に故郷に歸らんことを思ふ。時に曹公よく王事に勤め紹の徒を平ぐ。是に於て再び洛陽の光輝、漢朝の法度を見るを得たり。我れ亂に死せざるを得て幸既に多し。今又太子の厚遇を蒙る。太子客を愛して倦まず、飲宴して日夜を忘れ、音樂を聽きては夜の闌くるに至り、行遊しては日の暮るるに至り、歌聲は梁上の塵を動かし、杯を促して沈黙を破る。既に一日の歡を盡す。焉んぞ古人の惑となせるを知らんや。

徐幹

少くして宦情なく、箕穎の心あり、事故ありて世に仕ふ。(五) 素辭多し。伊れ昔臨淄に家し、(六) 提攜して齊瑟を弄す。

【六二】 宦情。仕官の心。  
【六三】 箕穎。箕は山の名、穎は川の名。許由・巢父の隠居せし處。

【六三】 素辭。質素の言。  
【六四】 臨淄。齊の都。徐幹の郷里なり。  
【六五】 提攜。朋友と共に。齊瑟

置酒して膠東に飲み、(五) 淹留して高密に憩ふ。此歡終ふべしと謂へり、(六) 外物始めて畢へ難し。(七) 箕穎の情を搖蕩し、年を窮めて憂慄に迫る。(八) 末塗幸に休明、棲集薄質を建つ。已に負薪の苦を免れ、仍りて椒蘭の室に遊ぶ。清論事萬を究め、美話信に一にあらす。行觴悲歌を奏し、永夜白日に繋ぐ。華屋蓬居にあらず、(九) 時髦豈余が匹ならんや。中飲にして昔心を顧みれば、(十) 悵焉として失ふあるが若し。【大意】 我れ(徐幹)昔臨淄に住し朋友と相携へて琴瑟を弄し、膠東高密の間に周遊し、歡を盡して世を終へんことを願へり。豈圖らんや世事に拘牽せられ、願を遂ぐる能はず、末年世亂に逢ひ憂懼の迫る所となり、遂に隱遁の志を棄つ。幸に美徳の太子に遇ひ、恩厚賤陋の身に及び、茲に賤役を離れて貴人の室に遊ぶを得、清雅の論萬物の理を究め、酒を飲み悲歌を奏し、夜を以て日に繼ぐ。華屋は吾が居るべき處にあらず、俊傑は吾が友にあらず、然も幸にして共に伍するを得たり。酒半にして昔日隱遁の志を顧れば、惘然として失ふ所あるが如し。

の齊は國の名。  
【六六】 膠東。齊の地名。  
【六七】 淹留。滯留なり。高密は齊の地名。  
【六八】 外物。世事なり。  
【六九】 箕穎。箕は山の名。許由の隠れし處。濮は川の名。莊周の釣りし處。搖蕩は動亂なり。

【七〇】 末塗。晩年なり。休明は美徳の人。太子丕を指す。  
【七一】 負薪。賤役なり。  
【七二】 椒蘭。山椒及び蘭を塗りし室。  
【七三】 蓬居。野人の居。  
【七四】 時髦。當代の俊傑。  
【七五】 悵焉。惘然なり。



劉楨

卓犖たる偏人にして文最も氣あり。得る所頗る經に奇なり。貧居して里閭に晏んじ、少小にして東平に長ず。河兗衝要に當り、淪飄して許京に薄る。

廣川逆流なく、招納せられて羣英に廁る。北のかた黎陽の津を渡り、南のかた紀郟の城に登る。既に古今の事を覽、頗る治亂の情を識る。歡友相解達し、敷奏して平生を究む。矧んや明哲の顧を荷ひ、知深くして命の輕きを覺るをや。朝に遊んで牛羊下り、暮に坐して揭鳴に括る。終歲一日にあらす、扨を傳へて新聲を弄す。辰事既に諧ひ難し、歡願如今并す。唯羨む肅肅たる翰、續紛として高冥に戻らんことを。

- 【七六】卓犖。高絶の貌。偏人は一方に傑出せる人。
- 【七七】里閭。郷里なり。
- 【七八】少小。幼少なり。東平は縣の名、兗州に屬す。
- 【七九】河兗。濟河及び兗州。衝要は要衝。
- 【八〇】許京。獻帝亂を避けて許州に遷る。故に許京といふ。
- 【八一】廣川。曹操に喩ふ。
- 【八二】羣英。羣賢なり。
- 【八三】黎陽。津の名。
- 【八四】紀郟。楚の地名。
- 【八五】歡友。親友なり。解達とは談説して進達するなり。
- 【八六】敷奏。陳奏なり。
- 【八七】明哲。太子丕を指す。
- 【八八】牛羊下。暮をいふ。詩經に「日の夕、牛羊下り括る」とあり。
- 【八九】揭鳴。掲は雞の棲木、雞の鳴く時をいふ。
- 【九〇】辰事。時と事と。
- 【九一】肅肅。羽の聲。
- 【九二】續紛。飛ぶ貌。高冥は天空なり。

【大意】われ(劉楨)少小より東平に長ず。其地天下の要衝に當れるを以て、遂に許都に至る。曹

公(曹操)我が微賤なるを顧みず、納れて羣賢の中に伍せしむ。乃ち公に従つて北のかた袁紹を征し、又南のかた劉表を伐つ。我れ古今治亂の事に通せるを以て、朋友相進達して陳奏の事に充て、以て平生の才を盡さしむ。後又太子の眷顧を蒙り、知遇の深くして身命の輕きを覺る。朝に遊んで暮に至り、暮に坐しては明に至り、終歲歡宴歌曲の樂を盡し、明時と樂事と并せ遇ふを得たり。ただ願くは羽を整へて高遠に上らんことを。(貴仕を求めんとするに喩ふ)

應璩

汝穎の士なり、世故に流離し、頗る飄薄の歎あり。嗷嗷たる雲中の鴈、翮を擧げて委羽よりす。涼を弱水の涓に求め、寒を長沙の渚に違く。願ふに我れ梁川の時、緩歩して穎許に集る。一旦世難に逢ひ、淪薄して恆に羈旅す。天下昔未だ定らず、身を託して早く所を得たり。官度一卒に廁り、烏林艱阻に預る。晚節衆賢に値ひ、會同して天宇に庇はる。坐を列ねて華棖に廢れ、金樽清醕を盈す。

- 【九三】汝穎。地名。
- 【九四】世故。世亂なり。流離は流浪すること。
- 【九五】飄薄。さまよふこと。
- 【九六】嗷嗷。哀鳴の聲。
- 【九七】委羽。北方の山の名。
- 【九八】弱水。北方の川の名。
- 【九九】長沙。南方の地名。
- 【一〇〇】梁川。地名。
- 【一〇一】穎許。地名。
- 【一〇二】淪薄。飄薄に同じ。
- 【一〇三】官度。官渡なり。川の名。
- 【一〇四】烏林。地名。荊州記に「周瑜黃蓋、魏武の兵を烏林に破る」とあり。
- 【一〇五】晚節。晩年なり。



始め(二〇)延露の曲を奏し、繼ぐに(二一〇)關夕の語を以てす。(二二)調笑して輒ら酬答し、(二三)嘲諷して慙沮するなし。軀を傾けて遺慮なく、心に在りて良に已に敍ぶ。

【大意】 飛鷹哀鳴して委羽山より來り、春は北に向つて涼を求め、冬は南に向つて陽に就く。(應場の國難に遇ひて飄薄せるに喩ふ)顧ふに我れ故郷に在りし時、往きて許京に至り、世の亂離に遇ひて東西に放浪せしも、早く既に身を曹公(曹操)に託し、士卒に交りて艱苦に參與す。晩年衆賢に値ひ、天子の宮に會合し、酒を酌み曲を奏し、夜を以て日に繼ぎ、嘲戲して相應酬し、恥ぢて止むることなし。身を公に委ねて復た遺恨なく、心に在るの事皆既に伸べ盡せり。

阮瑀

書記の任を管る。故に優渥の言あり。河洲に沙塵多く、風悲みて(二四)黄雲起る。(二五)金鞮相馳逐し、(二六)聯翩何ぞ窮り已まん。(二七)慶雲惠優渥、(二八)微薄多士を攀ぶ。念ふ昔(二九)渤海

【二〇】天字。天子の宮。  
【二一】華棧。華屋なり。  
【二二】清醕。清酒なり。  
【二三】延露。歌曲の名。

【二〇〇】關夕。夜關なり。  
【二〇一】調笑。あざけり笑ふこと。  
【二〇二】嘲諷。あざけりなぶること。  
【二〇三】慙沮。恥ぢて止むこと。

【二三】阮瑀。字は元瑜、曹操に仕へて記室となる、書檄多くは其手に出づ。  
【二四】黄雲。塵埃上りて雲の如きなり、戦亂に喩ふ。

【二五】金鞮。金を以て飾りしオモツラ。  
【二六】聯翩。馬の奔走する貌。  
【二七】慶雲。瑞雲なり。魏の太祖に喩ふ。

の時、(三〇)南皮清泚に戲る。今復た(三一)河曲の遊、(三二)箎を鳴らして蘭汜に汎ぶ。(三三)躡歩して丹梯を陵ぎ、竝び坐して(三四)君子に待す。(三五)妍談既に心を愉ましめ、(三六)哀弄信に耳を睦ぐ。(三七)酌を傾けて芳醕に係ぎ、(三八)酌言豈終始あらんや。(三九)萍を食ひしより來、唯今日の美を見る。

【二八】微薄。微賤の身、阮瑀自ら謂ふ。多士は衆賢なり。  
【二九】渤海。郡名。  
【三〇】南皮。縣名、渤海郡に屬す。清泚は清渚なり。太祖嘗て此に遊ぶ。  
【三一】河曲。黄河のほとり。曹丕嘗て此に遊ぶ。  
【三二】箎。笛なり。蘭汜は蘭の生ずる岸。  
【三三】躡歩。履行なり。丹梯は朱塗の階。

【三四】君子。太子曹丕を指す。  
【三五】妍談。美談なり。  
【三六】哀弄。哀歌の聲。  
【三七】酌。酒なり。  
【三八】酌言。言は助辭、酒を酌むこと、詩經に「酌みて言之を嘗む」とあり。  
【三九】萍を食ふ。詩經に「呦呦たる鹿鳴、野の草を食ふ」とあり、草は萍なり、草の名。この詩は天子諸侯を宴する時歌ふなり。

平原侯植

我に厚恩を賜ひ、我れ微賤にして衆賢と伍するを得たり。嘗て太祖に従ひて渤海の南皮に遊び、今復た太子に従ひて河曲に遊び、遂に朱殿に登り、諸賢と太子に待す。談話の美は以て心を樂ましめ、哀弄の音は以て耳を和らげ、宴樂して休息するなし。我れ嘉賓に預りしより以來、今日の遊を以て最も美なりとす。

【三〇】平原侯植。太子丕の弟曹植なり、平原侯に封ぜらる。



(二三) 公子世事に及ばず。ただ遨遊を美す。然れども頗る愛生の嗟あり。

朝に遊びて (二三) 鳳閣に登り、日暮れて (二三) 華沼に集る。柯を傾けて弱枝を引き、條を攀ちて (二三) 蕙草を摘む。 (二三) 徒倚して眺望を窮め、目極まりて討ぬる所を盡す。西のかた (二三) 太行の山を顧み、北のかた

(三七) 邯鄲の道を眺む。平衢脩くして且つ直く、白

楊信に (三三) 裊裊たり。 (三五) 副君飲宴を命じ、歡娛

して懷抱を寫く。良遊晝夜にあらず、豈云んや

晩と早と。衆賓悉く精妙、清辭蘭藻を灑ぐ。

哀音 (四〇) 廻鶴を下し、 (四二) 餘哇清昊に徹す。 (四三) 中

山醉ふを知らず、 (四三) 徳を飲んで方に飽くを覺

ゆ。願くは (四四) 黄髮の期を以て、生を養ひて將

に老せんとするを念はん。

【二三】 公子。曹植を指す。

【三三】 鳳閣。中書省なり。

【三三】 華沼。池なり。

【三四】 蕙草。香草なり。

【三五】 徒倚。徘徊なり。眺望は

眺望。

【三六】 太行。山の名。

【三七】 邯鄲。地名。

【三八】 裊裊。風の木を揺す貌。

【三九】 副君。太子丕をいふ。

【四〇】 廻鶴。昔師曠清徵の聲を

奏せしに玄鶴下り舞へり。

【四二】 餘哇。淫歌なり。清昊は

天なり。

【四三】 中山。地名、美酒を出す。

【四三】 徳を飲む。詩經に「既に

醉ふに酒を以てし、既に飽く

に徳を以てす」とあり。

【四四】 黄髮。老人なり。

【大意】 朝に中書省に登り、暮に池沼(太子宴樂の處)に至り、弱柳を引き香草を摘み、四方を望めば、西は太行山を見、北は邯鄲の道を見る。長道直きこと絲の如く、白楊風に揺く。太子盛宴を賜ひ、各々歡樂を盡さしめ、晝夜曉暮を問はず。衆賓皆俊秀の士にして、言辭の妙香蘭文藻の如く、

歌聲飛鶴を舞はしめ、清天に徹し、飲宴して酔ふを知らず。ただ道德に飽くを覺ゆ。願くは生を養ひて長壽を保ち以て老年に至らんことを。



卷の第十六

詩 庚

雜擬下

曹子建の樂府白馬篇に倣ふ

袁

陽源

劍騎何ぞ 翩翩たる、長安 五陵の間 秦地  
 は天下の樞、八方より才賢湊る。荆魏に壯士  
 多く、宛洛少年に富む。意氣深く自ら負む。肯  
 て郡邑の權に事へんや。籍籍として關外より  
 來り、車徒國鄜を傾く。五侯競つて書幣し、  
 羣公亟言をなす。義分霜よりも明に、信  
 行直きこと弦の如し。歡を 池陽の下に交へ、  
 留りて 汾陰の西に宴す。一朝人に諾を許す。

- 【一】 白馬篇。卷十四に見ゆ。
- 【二】 袁陽源。名は淑、字は陽源、宋の陳郡陽夏の人。
- 【三】 翩翩。輕健の貌。
- 【四】 五陵。漢の帝陵のある處、長安の近郊にあり、豪俠の居る所なり。
- 【五】 秦地。長安なり。樞は樞要の地をいふ。
- 【六】 荆魏。楚魏の二國。
- 【七】 宛洛。二都の名。
- 【八】 籍籍。誼盛の貌。
- 【九】 車徒。從者なり。國鄜は都市なり。
- 【一〇】 五侯。卷十五、鮑明遠の數詩に見ゆ。書幣は書及び贈物。
- 【一一】 義分。分義なり。
- 【一二】 池陽。縣名、左馮翊にあり。
- 【一三】 汾陰。縣名、河東郡にあり。

何ぞ能く坐ながら相捐てん。節を影てて函谷を去り、珮を投じて甘泉を出づ。嗟す此の遠圖を務め、心四海の爲に懸るを。但身意の遂ぐるを榮とす。豈耳目の前を校らんや。俠烈良に聞ゆるあり、古來共に然るを知る。

【大意】 俠士の豪快の狀を述ぶ。遊俠の士劍を佩び騎を結びて、五陵長安の間に遊ぶ。此士もと荆魏宛洛の壯士なりしが、天下の中樞たる長安に向ひて、四方より集り來りしなり。各々意氣を恃み、肯て郡邑執權の人に事へず。その長安に來るや、從者の衆きこと都市を傾くるばかりなり。長安の王公亦書幣を贈りて之を迎ふ。此士分義明にして嚴直なること弦の如く、池陽汾陰の間に歡宴を交へ、一たび許諾すれば決して乖違せず。官位を抛ちて義に趨り、心を天下の公事に懸け、己の志を成さんことを務めて、目前の榮利を顧みず。俠士獨り名を後世に傳ふ。古今共に此の如し。

古に倣ふ

袁

陽

源

此の倦遊の士を諱へば、本家 遼東よりす。昔 李將軍に隸し、十載西 遼東。北方の郡名。



戎を事とす。車を高闕の下に結び、極望して雲中を見る。四面各々千里、從横嚴風起る。寒燠豈節の如くならんや、霜雪異同多し。夕に北河の陰に寐ね、夢に甘泉宮に還る。勤役未だ云に已まず、壯年徒に空きをなす。迺ち知る古時の人、轉蓬を悲める所以を。

【大意】倦遊の人あり。試に之に問へば答へて曰く、吾れ本遼東の人なり。嘗て李將軍に從ひて匈奴を征し、邊塞に在ること十年なり。邊塞は地偏にして氣節中國と同じからず。寒風縱横に吹き荒び、夕に困臥しては夢に甘泉宮に還りて天子に謁するを見る。然も勞役未だ已まずして、空しく壯盛の年を度る。古人の飄迫を悲みし眞情、吾亦具に之を知ると。

擬古二首

劉

休玄

『行き行き重ねて行き行く』に擬す

眇眇として長道を陵ぎ、遙遙として行き遠く之く。車を回して京里に背き、手を揮つて

【一】劉休玄。南平穆王鑠、字は休玄。宋の文帝の第四子なり。

【二】眇眇。遠き貌。

- 【一】李將軍。漢の武帝の時の名將李廣なり。
- 【二】十載。十年なり。西域は匈奴。
- 【三】高闕。北邊の山の名。
- 【四】雲中。北邊の郡名。
- 【五】從横。縱横なり。嚴風は寒風。
- 【六】寒燠。寒暖なり。
- 【七】甘泉宮。長安の宮の名。
- 【八】轉蓬。蓬の風に颯る如く飄迫すること。

此より辭す。堂上流塵生じ、庭中綠草滋し。寒蟿水曲に翔り、秋兔山基に依る。芳年に華月あり、佳人還期なし。日夕涼風起り、酒に對して長く相思ふ。悲は江南の調を發し、憂は子衿の詩に委す。臥して明燈の晦きを覺え、坐して輕紈の縑きを見る。淚容飾るべからず、幽鏡復た治め難し。願くは薄暮の景を垂れ、妾が桑榆の時を照せ。

- 【三】遙遙。心の安からざる貌。
- 【四】寒蟿。水鳥なり。
- 【五】山基。山麓なり。
- 【六】佳人。夫をいふ。
- 【七】江南の調。采蓮の曲なり。
- 【八】子衿の詩。詩經に「青青

- たる子が衿、悠悠たる我が心」とあり、音信なきを嘆する詩なり。
- 【九】輕紈。白絹なり。
- 【一〇】桑榆。日の没する處にある木、老年に喩ふ。

【大意】閨怨の詩なり。吾が夫は帝都を去りて遠行し、今や堂庭人なきを以て徒に塵と草とを生ず。寒蟿は水に依り秋兔は山に依り、皆其所を得たり、芳年には花月の盛あり。然も吾が夫は一たび去りて還るの期なし。我れ乃ち秋風に對して相思の情を起し、悲憂のあまり唯心を詩歌に委ぬ。臥しては燈の暗きを感じ、坐しては衣裳の京塵に汗れしを見る。涕泣の容は脩飾すべからず、幽匣の鏡は誰か復た理めん。せめては吾が夫の微光を垂れて我が老年を照さんことを願ふのみ。

『明月何ぞ皎皎たる』に擬す

(一) 落宿遙城に半なり、浮雲層闕を滿ふ。(二) 玉宇清風來り、羅帳秋月を(三) 羅帳秋月を(二) 落宿。傾きし星。



延く。思を結んで 伊人を想ひ、沈憂して 明發まで懷ふ。誰か爲はん  
客行の久しく、屢 流芳の歌るを見んとは。河廣くして川に梁なく、山  
高くして路越え難し。

【大意】 閨怨の詩なり。星流れて城角に傾き浮雲飛んで高關を蓋ふ時、  
獨り玉堂に坐して清風に對し、帳帷を掲げて月光を引く。忽ち遠行の夫を思ひて、曉に達するま  
で寐ねられず。誰か謂はん、夫去りて既に久しく、芳春の消歇するに至らんとは。夫の許に行かん  
と欲するも、河廣く山高くして行くべからず。

- 【一】 玉宇。玉堂なり。
- 【二】 羅帳。薄絹のトバリ。
- 【三】 伊人。夫をいふ。
- 【四】 明發。翌曉なり。
- 【五】 流芳。春芳の移ること。

少年 馳俠を好み、旅宜して關源に遊ぶ。既に、終古の跡を踐み、聊か興亡の言を訊ふ。隆周藪  
澤となり、皇漢 山樊と成る。久しく離宮の地を没す。安んぞ 壽陵の園を識らんや。仲秋邊風起  
り、孤蓬霜根を卷く。白日精景なく、黄沙千里  
昏し。顯軌轍を殊にするなし。幽塗豈魂を異  
にせんや。聖賢良に已ぬる矣、命を抱いて復た何

琅邪王の古に依るに和す

王 僧 達

少年 馳俠を好み、旅宜して關源に遊ぶ。既に、終古の跡を踐み、聊か興亡の言を訊ふ。隆周藪  
澤となり、皇漢 山樊と成る。久しく離宮の地を没す。安んぞ 壽陵の園を識らんや。仲秋邊風起  
り、孤蓬霜根を卷く。白日精景なく、黄沙千里  
昏し。顯軌轍を殊にするなし。幽塗豈魂を異  
にせんや。聖賢良に已ぬる矣、命を抱いて復た何

- 【一】 依。擬なり。
- 【二】 馳俠。遊俠なり。
- 【三】 旅宜。遊學なり。關源は關中、河源の地方。
- 【四】 終古。古來なり。
- 【五】 隆周。隆盛なりし周。
- 【六】 山樊。山林なり。
- 【七】 壽陵。漢帝の山陵の名。

をか怨みん。

【大意】 我れ少年にして遊俠を好み、關源に  
旅遊し、古代の跡を歴、興亡の事を問へるに、周漢の故城は盡く山澤となり、離宮園陵蕪没して  
其處を識らず。今や風起り蓬絶え、黄沙昏亂し日に精景なし。(世の亂離に喩ふ)世人皆生きては戰  
亂に苦み、死しては冤魂となる。ああ盛なるものは衰へ、生あれば死あるは世の習なり。古來の聖  
賢亦皆死を免れず。吾亦天命に安んじて復た何を怨みんや。

【八】 顯軌。生理なり。

【九】 幽塗。死者の行く道。

擬古三首

鮑 明 遠

幽并騎射を重んじ、少年にして馳逐を好む。氈帶雙鞬を佩び、象弧彫服を挿む。獸肥えて春草  
短く、鞭を飛ばして平陸を越ゆ。朝に 鷹門の上遊び、暮に 樓煩に還りて宿す。石梁餘勁あ  
り、驚雀 全目な  
し。漢と虜と方に未  
だ和せず、邊城屢々  
翻覆す。我が一白

- 【一】 幽并。北方の二州の名。
- 【二】 氈帶。毛織の帶。雙鞬は二個の弓袋。
- 【三】 象弧。象牙にて飾れる弓。彫服は彫服を施せし服。
- 【四】 鞬。くつわ。馬の意なり。平陸は平野。
- 【五】 鷹門。北方の郡名。
- 【六】 樓煩。縣名。鷹門郡に屬す。
- 【七】 石梁。關子に「宋の景公工人をして弓を作らしむ、九年にして成る、公虎園の臺に登り弓を授り東面して之を射る、矢西霜の山を踰え彭城の



羽を留めて、將に以て虎竹を分たんとす。

【大意】 少年邊功

を建てんことを思ふに擬す。幽并の地は騎射を重んずるを以て、少年の時より騎射逐獵を習ひ、韃を帯び弓を執り、肥獸を逐ひて平野を越え、鴈門樓煩の間に往來し、射術神妙を極む。今や漢と匈奴と未だ和親せず、邊城屢々事を生ず。願くは一矢を放ちて軍功を建て、以て封侯を分ち取らんことを。

魯客楚王に事へ、金を懷にして丹素を襲ぬ。既に主人の恩を荷ひ、又令尹の願を蒙る。日晏れ朝を罷めて歸れば、輿馬衢路に塞る。宗黨光華を生じ、賓僕遠く傾慕す。富貴は人の欲する所、道を得ては亦何を懼れん。南國に儒生あり、方に迷ひて獨り淪誤す。木を清江の涓に伐り、置を設けて、兔を守る。

東に集り、其餘力逸動して猶ほ羽を石梁に飲む」とあり。  
【八】 全目。帝王世紀に「羿、吳賀と北遊す、賀羿をして雀を射しむ、羿曰く之を生さんか之を殺さんかと、賀曰く其左目を射よと、羿弓を引き之を射、誤りて右目に中つ、羿首を抑へて愧ぢ、終身忘れず」とあり。

【九】 白羽。箭の名。  
【一〇】 虎竹。銅虎符、竹使符なり。郡守に與ふる符なり。  
【一一】 魯客。魯人なり。  
【一二】 金。金印なり。丹素は中衣。  
【一三】 主人。楚王なり。  
【一四】 令尹。官名、楚の相なり。  
【一五】 宗黨。宗族郷黨。  
【一六】 儒生。明遠自ら謂ふ。

【一七】 木を云。詩經伐檀篇に「坎坎として檀を伐り、之を河の干に實く、河水清く且つ漣漪す」とあり、賢者の貧窮に居りて其力に食むことを美せし詩なり。  
【一八】 兔。狡兔なり、詩經に「肅肅たる兔置、之を椽つこと丁丁たり、赴赴たる武夫は公侯の干城」とあり。

【大意】 賢者貧に居りて自ら勉むる意なり。魯人あり來りて楚王に事へ金印を抱き朱衣を纏ひ、君王の恩寵を蒙り、又宰相の眷愛を受け、日暮れて退朝するや、從者路を塞ぐ。宗黨亦之が爲に光を生じ、賓客遙に此人を仰慕す。既に道によりて富貴を得たり。何の畏れ憚る所あらんや。ここに一儒生あり。向ふ所に迷ひて自ら沈淪せるも、貧に居りて自ら勵み、事功を立てて登庸せられんことを待てり。

十五にして詩書を諷し、篇翰通ぜざるはなし。弱冠にして多士に參り、飛歩して秦宮に遊ぶ。側に君子の論を觀、預め古人の風を見る。兩説舌端を窮め、五車筆鋒を擢く。白璧の賦に當るを羞ぢ、聊城の功を受くるを恥づ。晩節世務に従ひ、障に乘りて遠く戎を和す。佩を解いて犀渠を襲ね、表を卷

【一九】 詩書。詩經書經。諷は誦なり。  
【二〇】 篇翰。翰は筆なり、篇章に同じ。  
【二一】 多士。多くの朝臣。  
【二二】 飛歩。高歩なり。  
【二三】 兩説。二回の論説。史記に「秦邯鄲を圍む、魏王新垣衍をして邯鄲に入り平原君に説かしむ、秦の昭王を尊んで

帝となさば秦必ず兵を罷めて去らんと、魯仲連之を聞き乃ち垣衍を責む、垣衍乃ち敢て秦を帝とするを言はず」と。又曰く、田單聊城を攻む、下らず、魯仲連乃ち書を爲り之を矢に約し以て聊城の中に射る燕將書を得て自殺す」とあり。  
【二四】 五車。多くの書を讀めること。莊子に「惠施其書五車」とあり。

【二五】 白璧の賦。韓詩外傳に「楚の襄王使者を遣し金千斤白璧百雙を持ち莊子を聘せしめて以て相となさんとす、莊子許さず」とあり。  
【二六】 聊城の功。史記に「田單聊城を屠りて歸り、魯仲連を爵せんと欲するを言ふ、魯連逃れて海上に隱る」とあり。



いて盧弓を奉ず。始願力及ばず、安んぞ今の終る所を知らんや。

【七】晚節。晩年なり。  
【六】障。邊城なり。

【五】犀渠。よろひ。  
【三】裘。書帙なり。盧弓は征

伐の弓。

【大意】筆を投じて軍に従ひ、功業未だ就らざるを言ふ。吾れ十五にして詩書を誦し、いづれの篇章と雖も通曉せざるはなし。二十にして秦宮に仕へ、朝臣の間に伍す。嘗て古君子の徳風を見聞し、辯舌を揮へば魯仲連の如く、博識なること惠施の如し。然も恩賞を受くるに至らず。晩年時事に従ひ、邊城に往きて戎狄を伐ち、文服を脱して武装をなす。然りと雖も始め文に志して力既に及ばず。今武士となるも其の結果如何を知らざるなり。

劉公幹が體を學ぶ

鮑明遠

胡風朔雪を吹き、千里龍山を渡る。君が瑤臺の裏に集り、兩楹の前に飛舞す。茲辰自ら美となす、當に豔陽の年を避くべし。豔陽桃李の節には、皎潔も妍を成さず。

【一】胡風。北風なり。朔雪は北地の雪。  
【二】龍山。山の名。  
【三】瑤臺。玉を以て飾れる樓

閣。  
【四】兩楹。人君正坐の處。  
【五】豔陽。春なり。

【大意】雪を借りて自ら比するなり。風雪北より來りて龍山を度り、玉樓の前玉座の邊に舞ふ。(出でて君に仕ふるに喩ふ)この時獨り自ら美となし、春に至らば宜しく避けて退くべし。桃李の春には雪の皎潔なるも以て美となすに足らざればなり。(高位を避くべきに喩ふ)

君子思ふ所あるに代る

鮑明遠

西に出でて雀臺に登り、東に下りて雲閣を望む。層閣天居肅たり。馳道直きこと髮の如し。繡蕙飛霞を結び、璇題行月を納る。山を築いて蓬壺に擬し、池を穿ちて溟渤に類す。色を選んで齊代に遍く、聲を徴して邛越に匝し。鐘を陳ねて夕讌に陪し、笙歌して明發を待つ。年貌還すべからず、身意盈歇に會す。蟻壤山阿を漏らし、絲淚金骨を毀る。器は滿を含んで歎くを惡み、物は生を厚うして没するを忌む。智なる哉衆多の士、理

【一】雀臺。銅雀臺なり、鄴都の西にあり。  
【二】雲閣。雲に聳ゆる宮閣。  
【三】層閣。高閣なり。天居は天子の宮。  
【四】馳道。天子の道路。  
【五】繡蕙。美しき棟。  
【六】璇題。玉を飾りし椽頭。  
【七】蓬壺。仙山の名。  
【八】溟渤。海なり。  
【九】色。美女なり。齊代は二

國の名。  
【一〇】邛越。二地の名。  
【一一】明發。翌曉なり。  
【一二】盈歇。盛衰なり。  
【一三】蟻壤。蟻穴なり。山阿は大隄。  
【一四】絲淚。細き涙。  
【一五】器。歎器なり。虚しければ傾き、中すれば正しく、滿つれば覆る器。



を服して 昭昧を辨す。

【大意】 満を戒むる詩なり。出でて銅雀臺に登り雲鬪を望めば、天子の高閣殿然として聳え、其の馳道端直なること髪のごとく、棟は飛霞に連り椽は月行を障へ、山を築きて仙山に擬し、池を穿ちて大海に象り、遍く美女を求めて此に置き、善歌者を求めて此に集め、笙歌夜飲して夜を徹す。是れ實に満盈の極なり。然れども人の年齢容色は一たび移れば又還らず、身意の望亦盛衰なき能はず。大隄の頽るるは蟻穴の漏に由り、金骨の堅きも絲涙に銷く。欵器の満ちて覆るは満を惡む所以にして、生を養ひて厚くするは、生理却つて滅する所以なり。ただ世の智者獨り能く道理に習ひて、物情の明暗を知る。

古に倣ふ

范彦龍

寒沙四面に平に、飛雪千里に驚く。風は陰山の樹を斷ち、霧は交河の城を失ふ。朝に左賢の陣に驅り、夜は休屠の營に薄る。昔は前軍の幕に事へ、今は嫫姚の兵を逐ふ。道を失

- 【一】 陰山。匈奴の山の名。
- 【二】 交河。邊城の名。
- 【三】 左賢。匈奴の王。
- 【四】 休屠。夷狄の王。
- 【五】 前軍。漢將李廣匈奴を撃ち前將軍となる。
- 【六】 嫫姚。漢將霍去病、匈奴を撃ち嫫姚校尉となる。

ひて刑既に重く、遲留して法未だ輕からず。頼む所は今の天子、漢道日に休明なり。

【大意】 從軍の詩なり。寒風飛雪千里に互り、風は陰山の木を折り、霧は交河の城を罩むる處、日夜夷狄と戦ひて其陣營に迫り、嘗て前將軍に從ひ、今は嫫姚校尉に隸す。若し道に迷ひ遲滯することあらば忽ち刑殺せらる。ただ我が天子、道を漢王と同うし、其徳日美明なり。是れ我が頼む所なり。

雜體詩三十首

江文通

夫れ楚謠漢風既に一骨にあらす、魏製晉造固より亦二體なり。譬へば猶ほ藍朱彩を成し、雜錯の變窮りなく、宮商音をなし、靡曼の態極まらざるがごとし。故に蛾眉詎ぞ貌を同うせん。而も俱に魄を動かす。芳草寧んぞ氣を共にせん。而も皆魂を悦ばしむ。其れ然らずや。世の諸賢の各々迷ふ所に滯るに至りては、甘を論じては辛を忌み、丹を好んで素を非らざるはなし。豈所謂方を通じ恕を廣め、遠きを好んで兼愛する者ならんや。公幹、仲宣の家を論ずるに曲直あ

- 【一】 楚謠。楚辭なり。漢風は漢代の詩。
- 【二】 魏製晉造。魏晉時代に成れる詩。
- 【三】 宮商。音の調子の名。
- 【四】 靡曼。柔美なる貌。
- 【五】 蛾眉。美女なり。
- 【六】 方。道なり。
- 【七】 公幹。劉楨なり。仲宣は王粲。